エニックス文庫

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 上

遥かなるイデーン

久美沙織

ENIX

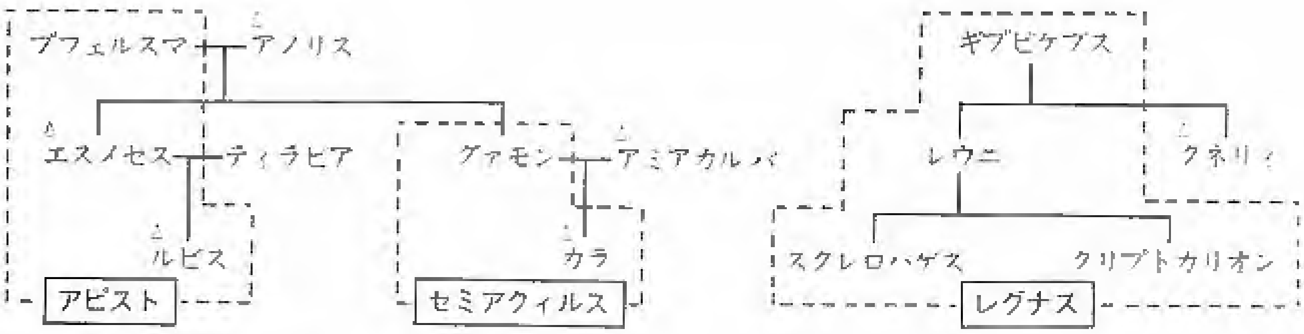
ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 上

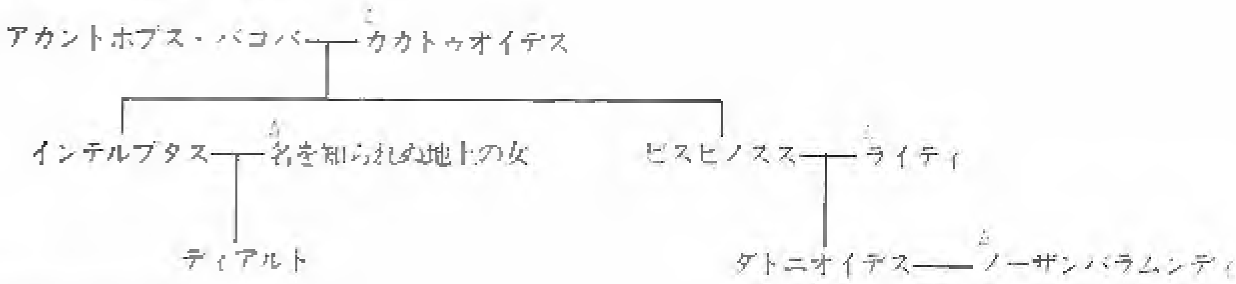
遙かなるイデーン

五大家の家系図

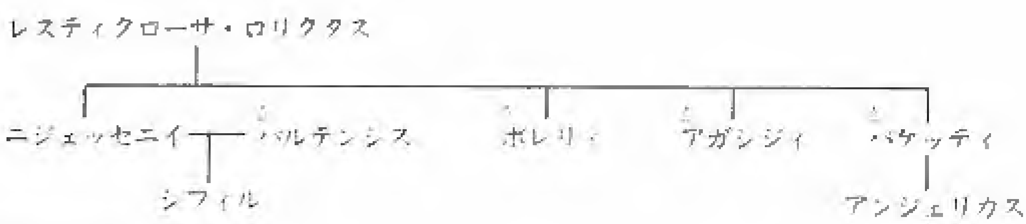
炎の一族：カリクティス家



大地の精：コリドラス家



水の守護：ポリプテルス家



金の主：アヌビアス家



森の人々：オトシンクルス家

ミラルダ・シクラソマ・オトシンクルス

（遠縁に　ヒライーバ・オルナ
　　　　　ヒラムターバ・オルナ）

ヘテランテラ——ディディフリス・ティアンドラ


イデーン
魔峰オーブ
メガロドラス
ラルパタス
レピディオ湖
ナスタチーウムの丘
パンカークス滝
ロリカリア
ポリプテルス家
コウデマ山
ゴスリニア島
ヴェリダタス山脈
六つの谷
カリクティス家
ホリル河
テネルス草原
コリドラス家
ランデール
岬マガア
アヌビアス家
サラマクセフシス
オトシンクルス家
アンデリア沙漠
パルマト岬
斜め灯台
日の入
つのぶえ座
日の出
狩人と犬座
パンガシアウドン・ギガス
MATSUMIE & MASHIN

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説

登場キャラクター紹介

イラスト/いのまた むつみ



ルビス

ルビス・アピスト・カリクティス

次期カリクティス家の当主。神託により結婚し、グァモンを継ぐはずであったが、混沌の渦へ巻き込まれていく。

ディアルト

ディアルト・バコバ・コリドラス

精霊と人間との間に生まれる。川辺の民のもとで育ちラーミアを自由に操ることができる。





クリプトカリオン

クリプトカリオン・レグナス

禍つ守、稲妻の主。片目に五芒の入れ墨を持つ。炎の一族につらなり、ルビスの又従兄にあたる。

五大家の当主たち





グァモン

グァモン・セミアクィルス・カリクティス

ルビスが成人に達していないため摂政を務める。火の種族のものたちを、従えるに足る風格を備えている。

ペルラ

ペルラ・ナナ・アヌビアス

金の精霊・アヌピアス家の女総裁。特異に生まれた長男カボンバを溺愛し、一族に暗雲を投げかける。



ダトニオイデス
ダトニオイデス・バコバ・コリドラス

その漆黒の瞳でイデーンを見つめ、大地の種族を統べるコリドラス家の当主。ディアルトは従弟にあたる。



水の守護・ポリプテルス家の若き当主。その長い銀髪と涼しげな瞳は、女性と見紛うほどの美しさである。

シフィル
シフィル・ロリクタス・ポリプテルス



森の長老
ミラルダ・シクラソマ・オトシンクルス

森の長老と呼ばれる、木の精霊一族の主人。五大家の当主の中でも最高齢であるが、直系の跡継ぎはいない。



川辺の民

ヤベヤベ

川辺の民のリーダー的存在。ディアルトとは互いに友として認めあっており、幼いころ一番の遊び仲間であった。





ピパピパとチャカチャカ

川辺の村、三の谷に住む子供たち。二人ともディアルトをしたっているが、大人たちの中には五大家の人々を快く思っていない者もいる。

いと尊き天上の花、慈愛の聖母、
万軍の守護天使にして
銀翼の不死鳥の唯一の飼い主。
われらが喜びをもって敬愛せる
精霊神ルビスの並びなき御名によって、記す。

これなる伝説の書は、
今日ロト伝説として広く知られる
ロト、アレフ、アレンの三人の英雄譚に遥かに先立つ
遠きいにしえの時代について、ものがたっている。
忘れさられて久しき精霊等の戦の顚末と、
われらが神であるルビスの誕生について、
知るもののやがて絶え果てなんとする正統を、
後の世々に生まれ来たるべきこころ正しき子孫らにも過ちなく伝えんがため、
海の神殿の巫女に秘めて語り継がれて来た一巻である。

序章

天は、ミトラ神をはじめとする威き神々の住まいである。

このことは永遠に変わりがない。

地上には、その昔、素朴にして愚昧なるひとびとがあった。

ひとびとは木の実や貝を拾い、獣の皮をまとい、広い地域に散らばって、互いに交易することもなく、細々とそれぞれの単調で短い生涯を営んでいるばかりであった。後の驕れるムー帝国もいくつかの丸木小屋にすぎず、栄光のアリアハンは雑草生い茂る荒れ地であり訪うものとてないさい果ての辺地であった。いずれの王家も、あまたの美姫も、種々の栄光の担い手も、この時にはいまだ誕生しておらぬ。語部、吟遊詩人、魔法をすなるものたちの誰ひとりとして、ものがたるべきことをも知らぬ時代が、長く続いた。

ひとの伝統はこの世の歴史ほど古くはなく、世々の移り変わりは天なる神々の統べる永劫の時の流れに比すれば、瞬くほどの刹那にすぎない。

そしてまた、天と地との間に、かつて両者を橋渡しするもうひとつの世界が存在していた。天なる神々に育まれし精霊や妖精たちの国、それは『イデーン』と呼ばれた。

イデーンは、地上の粗野なる人間たちにとっては、影か幻のようなものであった。目に見え、肌には感じられるが、しかと掴もうとすると疾く消え失せてしまうのだ。かの地に紛れこんだまま行方知れずになるものもあり、行きたいと願いつづけて生涯果たせぬものもあった。そうして、イデーンのさまざまな地方を旅して無事戻った幸運な例も、皆無ではなかった。そのようなものたちは、地上になかった年月とは別の時間を過ごしたので、故郷のひとびとよりも遥かに年を取っていたり、また、もとと全く変わらぬ姿であったりした。そのようにしてこの国は知られたのである。

イデーンに住みし精霊等は、数十万を数えた。彼等は地上に生起する森羅万象を、尊き神々に代わって、操り、見守る役を担っていた。みな地上の何ものよりも古き血を引き、また、何かしら魔法や呪術を有した。

イデーンの中心は、ランデールと呼ばれる小都市である。この都会は、多島にして狭隘なるアンギス湾に面し、ネリル河の河口に属した。日の出の

方向には、魔峰オーブから連なりしヴェリダヌス山脈を、日の入りの方角には、テネルス草原を経てコウデマ山を、遥かに望んだ。つのぶえ座の方角には、レピディオ湖とナスタチウムの丘があり、狩人と犬座の方角には、凍てる大海パンガシアノドン・ギガスがあった。

翳りなき神よります国イデーンにも、しかし、ひとつの禁忌があったことを述べておかなくてはならない。

魔峰オーブの麓の辺境に暮らす独特の種族に関することがそれである。彼等は一般の精霊等と起源を共にしながらも、このものがたりの時をさること遥か昔にミトラ神によって分離させられ別の運命をたどっていた。彼等は『追放されし者』または『川辺の民』と呼ばれ、精霊らしい魔力を持たなかったが、六つの谷に生息する怪鳥ラーミアをよく操った。

彼等と他の精霊等は、ヴェリダヌスの猛々しき連峰によって厳然と隔てられてあることに安住し、けして往来を持たなかった。互いに相手を懼れ忌み嫌うあまり、ないものと見做して思案の外に置くのが、イデーンの常識であった。

ルビスは、このイデーンに生まれた。

のち、天にある神々と同等、あるいはある意味でそれ以上の存在となり、かのムー帝国や比類なきアレフガルドをはじめとするさまざまな土地・さまざまなひとびとの間で、深く信

仰されることとなる。かの偉大なる精霊神は、もとは、このイデーンの五大家と呼ばれる旧家のひとつ、火の精霊カリクティス家本家の血族である。
ルビス・アピスト・カリクティス。
少女はこの時、まだ、神ではなかった……。

第一章　収穫祭

1

ルビスは寝間着姿のままひとり窓辺に立って、コウデマ山の向こうに沈んでゆく夕陽に、赤い瞳を細めていた。

太陽は、ナスタチウムの丘の懐にある生家から見る時よりも、幾分小さく霞んでいた。しかし、ちょうど今時分のカショーロの実のように、重たく熟れきった色をしている。年に一度の収穫祭のはじまりには、まことに相応しいみごとな姿だった。

もはや横になっていなくてはならない頃合であった。太陽はイデーンのこの季節には、夜半をすぎるまで隠れることはないのだ。

力強い夕映えが、ランデールの町じゅうを、色に染め上げている。複雑に入り組んだ運河や橋、狭い街路の隅々までが照り映えて、どんな小さな石ころも長い影を引いている。

家々の窓、水汲み場の丸屋根、それぞれの橋の欄干、丁寧に刈りこまれた木立や繋がれている妖馬たちさえもが、今日はみな、花やリボンやビーズ玉などでにぎにぎしく飾りつけられている。そのすべてが、朱がかったオレンジ色の星を宿して、ギラギラと騒々しく輝いているのだ。

（みんな、燃えているみたい……！）

ルビスはわくわくした。

火は、炎は、燃えるものはすべて、ルビスの家に属するものであった。

あと半巡り、狩人と犬座が天の最も高いところにかかる春のはじめごろには、ルビスは十六歳になる。イデーンにおいて、それは成人を意味する。彼女にとっては、一族の当主となることだった。

その日を境に、彼女は娘時代の衣をすべて捨て、敬虔で勤勉で格式ばった生活に入らなくてはならない。今は亡き両親に代わってカリクティス家を担っている叔父のグアモン・セミアクィルス・カリクティスから、火炎の精霊たち数百を統率する重要な役目を、すっかり引き継ぐことになる。

それは誇らしく、また、少々気の重いことだった。

家長ともなれば日常のすべてに身勝手は許されぬ。たとえば山麓の屋敷を離れることができるのは、岬や湖の神殿を訪う時のみ、それも暦に定められた特別の日だけだ。

祭りの雰囲気を多少とも味わうことができるのは、今年のこれが、生涯最後になるはずだった。

ルビスは軽く唇を噛んだが、やがて、豊かに腰までも届くマゼンタ色の髪を振って、気を取り直した。

(今宵は祭りだ。収穫祭がはじまったんだもの！　暗い気持ちは忘れよう)

窓からそっと顔を出して、ルビスは遠い町の中心街のほうに、耳をすませてみた。

遅い黄昏を迎えて、ひとびとの興奮はいよいよ高まったらしい。流れてくる笛や手鼓や鈴弓の楽しげな響きも、いっそう強くいっそう速くなっているようだ。太い声、細い声、おおぜいの混じりあった歌声、はしゃいだ娘の甲高い笑い声や、うかれた誰かのあげる奇妙な喚声などが、遠く木霊した。

(ああ。あそこで、みんなは、どんなことをしてるんだろう？

そんなに面白いのかしら？)

ルビスは両手を窓枠にかけて、つま先立ちになった。

広場そのものはここからは完全に死角にあたったが、思い切り伸び上がると、野外劇場の半ドーム状の屋根の一部をどうにか見ることができた。そこには、豪快に焚かれた年ゆずりの炎の揺らめきと、あたりで騒ぐ群衆の影が忙しなく重なったり離れたりする様子が、ぼんやり映って判じられた。

そちらはにぎやかしく、こちらは静かだった。

そこは明るく、ここは薄暗かった。

（年ゆずりの焚き火は、だいじょうぶかしら。ちゃんときれいに燃えてるかしら。

朝まで消えずに保っておけるかしら？）

ルビスの頭にはじめに浮かんだのは、次代の長たるに相応しく、一族のものたちの仕事ぶりについての懸念であった。

が、ドームに映る火影の中に、たっぷりとひるがえる蛮族風のケープや、得意そうに振り回される剣や、不思議な生き物の頭のかたちなどが見分けられると、ルビスの胸は、娘らしい好奇心と嫉妬にじりじりと痛んだ。

（みんな、きっと、とびきり楽しんでるのね。

娘たちは誰もかれも特別のおしゃれをして来る。若者たちはとっておきの技を披露する。そうして、今夜、生涯の伴侶とするに相応しい相手を探すのだわ。

どんなひとがいるかしら。どんな技が見られるのかしら。

一番の美人は誰なんだろう。青鈴蘭の花の精のリルランかな。冬風の主のところの末の娘さんかもしれない。ああ、でも、三星蝶の精のキルケーはあんなにも美しい。とても清楚で、清純だわ。きっと彼女が最高だろう。

あの子たちは、男のひとたちの祭り腕輪を、きっと、たくさんたくさんもらうんだろうな。

一番いっぱい集めることができるのは、今年はどこの誰なんだろう？）

（……いいな。いいな）

（わたしも、あそこに行きたい）

ルビスは小さなこどもっぽい拳をキュッと握りしめた。

（わたしだって、あそこに行きたい。みんなといっしょに踊ったり騒いだりできたらいいのに……！

白斑鹿の腿肉のあぶったのにお転婆っぽくかぶりついてみせてもいいし、スキーノ酒に酔っ払ったふりをして、素敵な誰かさんにしなだれかかるのも面白いわ。ふわふわキャンディの雲を浮かべて、こどものころおかあさまに隠れてやってみたみたいに、ぱくぱくあっちとこっちから齧りっこなんかもしてみたい）

（……ああほんとうに、そうできたら。

あそこに行って、みんなといっしょに楽しめたら、どんなにいいかしら！）

ため息に震えるまつげの先に、この日の夕焼けの最後のひとしずくが宿って燃えあがり、やがて消えた。

炎はすべて、ルビスにうべなう。だから、つい今しがたなどは、このランデールの町の全体がまるで自分の所有であるかのような贅沢な心持ちさえ、していたというのに。

ルビスには何もなかった。

歌も、踊りも、腕輪を捧げてくれる若者もなかった。
何ひとつ、期待してはならなかった。
どんな愉快な騒ぎも、こころ浮き立つ音楽も、馳走の山も、戯れに恋を囁いてくれる夢のような若者も、みんな固く戒められていたのだから。
実は、この高窓から通りに顔を出すことすら、けしてすすめられたことではなかったのである。誰かに見られたら、非難されるだろう。だが今宵は、こんな暗い窓を見上げるものなど、あるはずがない。広場に、年ゆずりの炎に、手を伸ばせば届くところにいる異性に、みな夢中なのだから。
鎖も枷もなかったが、ルビスは囚人だった。古き家柄の因習と、カリクティス家ランデール別邸の美しくはあるが残酷な檻の中に、まるで罪人のように、閉じこめられているのだった。
祭りの風俗など、いっそ何も知らないほうがましだったかもしれない。こんな時ランデールの街に逗留したのが、きっとそもそも間違いだったのだ。
自分と同じほどの年ごろの他のどの少女たちもが、今宵は内気で堅苦しい風情を忘れ、手放しで浮かれ騒ぐのであろうと思ってみれば、歯痒さと妬ましさにくらくらと目の前が霞んだ。
なぜ自分が、自分だけが、こんな古臭い家の中で、ぽつんと座りこんでいなくてはならな

いのか。まったく納得がいかない気持ちだった。

ルビスとて、理屈は、よく知っている。

五大家の当主たるべきものは、よく身を慎まなくてはならない。まして婚礼は、しきたりと神託によって決められなければならない。兄弟のないルビスの場合、十中八九、カリクティス家の近い傍系から婿を取ることになるだろう。一族の血統の特に濃いこどもを生むことが要求される。

本人の気持ちなど問題ではない。定めには従うしかないのだ。

だから、若者たちが恋人を求めて集まるこの収穫祭に、年ゆずりの炎を囲んだ歌と踊りと魔法の集いに出かけて行くなどということは、ルビスには、けしてあるまじき夢なのだった。万一のことがあったならば、火の精霊一族数百名がその支えを失うのみならず、イデーン国全体の秩序すら崩れてしまうかもしれないのだから。

ドォン！

花火が上がった。振りあおぐ濃紺の空に、みごとに大輪の花が浮かんだ。

物思いに浸っているうちに、もう外はとっぷりと暮れている。いよいよ夜通しの宴会がたけなわになるのだ。

花火が上がったということは、そこに、一族の誰かがいるということだった。

誰だろう、とルビスは考えてみた。

（お調子者のエンドリケリィ？
めだちたがりのラプラディー？
あれだけ上手に有翼蘭の形を作ってみせることができるんだもの、ひょっとしたら、ミゾン爺さんまでが、年を忘れてでしゃばっているのかもしれない。
恰好をつけるのはいいけれど、みんなほどほどにしておいて欲しいわ。あまり派手な火を使って、よそのひとを火傷でもさせたら大変だ。
うちの連中は、みんな、すぐに熱くなっちゃう性だから）
ルビスは笑おうとした。
けれども唇は固く結ばれていて、無理に力を加えたとたんに、情けないへの字型に曲がってしまった。胸の奥に、何かコツンとした冷たい塊が生じて、みるみるふくれあがって来る。
泣きたかった。だが、こんなことで手もなく泣いてしまうのは、口惜しかった。
（泣くもんか。わたしは、そんなに弱虫じゃない。
火の種族の女は強いわ。そう簡単には挫けないわ。
誇り高き種族の長の娘だもの、わたしは、もっともっと強くならなくっちゃ……！）
涙をにじませながらも頑固に見開きつづけるルビスの赤い瞳の上に、炎の蘭華がまた咲いて、散った。
シャアン！

ひときわ高く亀甲鼓が鳴る。高らかな乾杯の声と、角盃やひしゃくのぶつかり合う音が湧きあがる。いつしか風が回ったか、何やら美味しそうな匂いまでが遠慮会釈なく漂って来た。

ルビスは空腹を思いだした。

今日は一日気が塞ぎ、まるで食欲がわかなかった。叱責されたが、結局ただの一度も食事に口をつけなかった。こんな気持ちを持ちながら、健康な反応を示す自分の若さが恨めしいような気持ちだったが、飢えていたのだ。

思わず情けない顔になってしゃがみこむルビスの下を、陽気なひとびとを満載した漕ぎ舟が何艘も連なって通ってゆく。アーチ型の橋の上から、果敢に飛び乗る少女たち。櫂を打ちつけて剣術の真似をする若者たち。水をすくって引っかけあうこどもたち。しかめっ面の口許がどうしても笑ってしまうおとなたち。彼等はひとり残された彼女のことなど知る術もなく、曲がりくねった運河を大騒ぎをしながら、広場に向かって急いでいるのだった。

「なんだよ。ちっ！　お高くとまるんじゃねぇや！」

もはや酔いが回ったのか、つぶやいているにしては大きすぎるせりふがひとつ、はっきりと聞きわけられた。ルビスは目をあげて、声の主を探した。

橋一つほど向こうの水路である。

黒装束であることで士の家系の出であることが知られる誰やらが、水色の衣をまとったおとめにしつこく接吻を迫って嫌がられ、仲間たちにあわてて引き離されていた。舟が傾いで、水

路の壁にぶつかり、ひとびとがどよめくと、おとめはつと立って一歩ばかり走り、たちまち空に駆け上がった。その背には、いつしか風を織って作ったかのような優雅な一枚の羽根がきらめいている。逃げるように飛んでゆくおとめの姿に、舟の上のひとびとの間に、ほうっとため息があがった。

（水かげろうの精だ）

ルビスは両手を握りしめた。

（ああ、なんて綺麗な羽根だろう！）

妖精種族の羽根には一種類ある。普段から目に見えるものと、見えないものである。隠れた羽根を持つのは、ほとんどが鳥ではなく蟲たちの種族で、その繊細で透明な飛翔道具は、他部族のものたちに言い尽くせぬあこがれを抱かせた。

「ちっ、べらぼうめ！　飛べるんなら、さっさと空を行きやがれってんだい！」

悔しまぎれの空元気でまだ喚く黒装束の男たちの舟が、ルビスの窓の下を通り過ぎる。

「なー、変じゃやねぇ？　わざわざこんな狭い中に乗りこんで来たんだ、ひっひっひ、案外、スキモノなんじゃねぇかな、あの娘」

「止せよ。変なこというなよ」

「すいません、こいつ、惚れた女に振られたばっかなんで、どーも荒れてんです」

「うるせぇ！　……くそっ、声を出したら寒くなって来やがったぜ」

連れたちは同舟の客たちにぺこぺこ謝ったが、当人はいっこう反省した様子もなく、とうとう懐から酒瓶を出してらっぱ飲みをしはじめ、婦人らの眉を顰めさせた。

真夜中にならぬうちから、そんなふうに無作法になったのでは、まともな精霊ではないという評判が立ってもしかたがない。それでもついついそうせずにいられなくなるのが、祭りの祭りであるところなのだ。

「深夜の鐘までおあずけだとぉ？　へん、笑わせんじゃねぇや。肝心の時に、あぶれちまってあわてるなよぉ！」

忍び笑いが、他の舟のものたちにまでさざなみのように広がる。

ルビスも思わず少女らしい丸い頬を緩めた。

たとえ、いつも淑女らしいふるまいを崩さないので有名な水のおとめたちとても、今宵、深夜の鐘が鳴り響けば、悩ましく媚を含んだ微笑みで男たちを誘惑しはじめるに違いない。

収穫祭の夜に、腕輪を繋ぐ相手を見つけることができない娘ほど、みじめなものはないのだから。

（でも、わたしは……そのみじめな娘のひとり）

（ひとを笑ってなんかいられない。こんな夜をひとりぼっちで過ごすのは、普通は、よほど醜い姿形をしたもの、途方もなく性格の悪い嫌われものでしかないだろう。

わたしは、けして、そのどちらでもないはずなのに！）

（なぜ……？）

答えは、ルビスも知っている。

亡き母のじゅんじゅんと諭す姿が、今もはっきりと目に浮かぶ。

（……おまえは特別な娘なのです。将来、このカリクティス家を背負って立たなくてはならない定めなのだから、誰よりもきちんと身を慎んでいなくてはなりませぬ。

短気を起こしてはだめ。そんな無作法なふるまいはおよしなさい。

ルビスや。何度言ったらわかるの？

若い娘というものは、いつでも自分の気持ちよりも一歩は後を歩くもの。そんな強情な顔をしないで。苦しい時も不安な時も、いつでもやさしく微笑んでいるのが、淑女のたしなみというものです。

忍耐を心がけなさい。カッと血が上って、目の前すらも見えなくなっていることに気がついたならば……おまえはすぐにそうなってしまうけれども……急いでひとりになってどこかに閉じこもり、こころが静まるのを待つのです。いらだっている時には、けしてひと前に姿を見せてはなりません。揺らめく感情を顔に出すようでは、当主などつとまるわけがないではありませんか！

なによりも肝心なのは、けして掟に背かないこと。運命に逆らおうとなど、しないことよ。偉大なるミトラ神さまより、ひと時限りお借りしている尊い生命なのですから、ミトラ神さ

まの御こころに従うのが、唯一の正しい道なのです。
　自分の定めに楯突くということは、パンカックスの滝を泳いで上ろうとするような、無駄で無意味なことなのですよ！）

（でも、ああ、おかあさま……。
　わたしにはわからない。なぜ偉大なミトラさまが、よりによって、このわたしにだけ、こんな運命をお与えになったのですか。どうしていつもいつも、辛い思いを我慢していなければならないのです？）
　悔し涙に、水に映った町の灯りが揺る揺るとにじんだ。

（わたしは行きたい。好きなところに、好きなように。
　もっと自由に生きたいのに……！
　長の娘なんて、誰より恵まれていたっていいのに。偉いはずなのに。特別の娘だから、普通の娘よりももっと不自由だなんて。
　ああ、運命なんて大っきらい！
　運命は、おとうさまとおかあさまを奪った。わたしがまだ、小さな蠟燭に火をつけることさえできないうちに、死者たちの都に、永遠に連れさってしまった。
　いつか遠い将来、わたしもそこに行って、もう一度、おとうさまやおかあさまに逢うことができるのかもしれない。グアモン叔父さまはそう言う。だから我慢しなさいと言う。

でも。

でも、わたしは、わたしが寂しくてこころ細くて泣き虫だったあのころに、あの時にこそ、おとうさまおかあさまに、ずっとそばにいて欲しかったのに……！）

感情が激しくなるにつれて、ルビスの瞳は糸のように細くなった。

もともと赤い豊かな髪が空を孕んでふくれあがり、まばゆい紅蓮の光を発しはじめ、細い爪の先からは鋭い火花がパチパチと爆ぜた。

炎の精霊たちの総領娘は、亡き母の厳しい躾で身につけたはずの上品で淑女らしいふるまいの陰に、まさに、火のように激しい感情と恐るべき力を秘めていたのだ。

2

「ねーえ、ルビス？　もう寝ちゃっ……ひぇえっ！」

突然、無作法にも開けられたドアを、熱風が駆け抜けた。ルビスの周囲の空気がひどく高温になっていたのだ。

「いやぁーん、うそぉーっ。信じらんなぁい」

「え……あ！」

たちまち我にかえったルビスの目に、あわてた仕種で前を払う娘の、派手派手しい祭り装

束が飛びこんだ。
　遠い血族のアリナであった。その衣裳の美しい飾り紐が何本か、熱のためにちりちりと縮んで丸まってしまったのだ。
「ああ、どうしよう？　まずいわ。これ、虹のおばばのとこからわざわざ借りて来たやつよ。ねぇねぇ、これ見て。もうダメ？」
「見せて」
　そっと引っ張りながら、熱くした指先で丁寧に撫でるようにすると、飾り紐は多少は伸びた。けれども、だらしなく縒れてしまって、もとの鮮やかな色には戻らなかった。
「やれやれ……だめか。まいっちったな」
「ごめんなさい、ごめんなさい、アリナ」
　ルビスは息苦しくなって、首や胸許を押さえた。
「おばあさまには、わたしから謝るわ。新しい紐を買ってお返しするわ」
「うーん……まあ、いいよ。このくらい、わかりゃしない」
　アリナはもう機嫌を直して、真っ赤に塗った唇の間から、悪戯っぽい舌の先を覗かせた。
「そう心配しなくってもいいってばさ。婆あは、もうよく目が見えないし。ほんと言って、あたい、あいつがグースカ早寝しちまうまで待って、黙って持ってきちゃったんだからね、謝られても困るんだわ」

「え？」
「あいつ、ケチ臭いこと言っちゃってさ。自分じゃあもう着られるわけないくせに、絶対貸そうとしないんだからねぇ。ま、そのうち、またこっそり返しときゃ、誰のせいかなんて判りやしない。だいじょうぶだいじょうぶ」
「まあ……」
狐火の妖精アリナは、少々手癖が悪いのだった。
「で。こいつって、相当に昔の型でしょう。だから、着かた、これであってるのかどうか、イマイチわかんなくって。ちょいと誰かに見てもらおうと思ったんだけど、みんなもう広場だからさ。あんたなら残ってるって知ってたから。ねぇ、ルビス、ちょっと見てみて、これでいいと思う？」
「回ってみて」
「あいよ」
気取ったポーズを取りながら、アリナがくるくる回転すると、何層も重なった昔風のスカートの裾が翻って、あちこちに小さな夜の虹を作った。おまけにアリナがそのみごとな毛のしなやかな尾を振ると、虹と虹の間に、模様のように規則正しく狐火を飛ばすこともできるのだ。
「きれいねぇ……素敵。とても豪華だわ。あなたの尻尾にも、よく似合う」

「えっへへへへ。そー思ったんだよぉ、あたいも。ねっ、なかなか凝ってるでしょぉ？」
得意そうに鼻に皺を寄せるアリナになんとか微笑み返してみせたが、そこまでだった。
ちりちり嫉つく悔しさと羨ましさは、無理に押し殺すと、たぎる溶岩のような憤慨になって、ルビスの胸を焦がした。
（わたしだって、きれいな服を着て、踊りに行きたいのに。
こんな素敵な夜を、たったひとりぼっちで、おばあさんみたいな恰好をして、閉じこもって過ごさなければならないなんて……！）
ぎこちなく笑ったまま凍りついたルビスの頬に、とうとう、ひと筋の悔し涙が伝って落ちた。
「あれっ。どしたの？」
「ううん、なんでもない」
「だって」
「なんでもないったら。さぁ、早く行きなさいよ。もう踊りがはじまるわよ！」
「泣いてるじゃないさ。どっか痛いの？」
背けるルビスの苦しげな顔を覗きこんで、アリナは眉をしかめ、考え深げに尾を振った。
「……はぁん……」
「いいから。もう、ほうっておいて。行ってってったら！」

「あんた、祭りに行きたいんだね？」

「いいえ！」

弾かれたようにルビスは否定のことばを叫んだが。

「ふうん……？」

アリナは指を噛みながらニヤニヤ笑い、おどけるように眉を動かした。

ルビスは脱力した。いけない望みを知られてしまった恥ずかしさと、何憚ることなく生きている遠い従姉への嫉妬に、胸がむかむかした。

窓辺の椅子に腰をおろすと、外の、いっこうに衰えないにぎやかな騒ぎが、またひとしきり耳に届いた。思わず両手で塞いでみたが、うすら笑いを浮かべたままのアリナの目に出会って、あわてて手をおろした。

「いいよ。いいよ。隠さなくったって」

アリナは、わけ知り顔にうなずいた。

「そんなら、いっしょに行こうじゃないさ！」

「まさか！　そんなことできな」

「あー、そうケンツク怒鳴んないで。頭が痛くなる。だめなことなんかないってば。だいじょうぶだいじょうぶ、あたしに任せな」

ためらうルビスの両手をしっかりと握り、狡そうなうわ目使いになって、アリナは声をひ



そめた。
「あたしだってさぁ、ご本家のかたがたの何かとかたっくるしい決まりは知ってるよ。でも、あんただって、たまには羽目をはずさなくっちゃ。わかるわかる。いくら御跡継ぎさまでも、いつもいつも窮屈してたんじゃあ、窒息しちまうもんねぇ」
ルビスは脅えて頭を振り、食いつくようなアリナの目を必死で避けた。
（見てはだめ。耳を傾けちゃだめ。うなずいたりしちゃいけないわ。
アリナのことばは、わたしが欲しいことば。いつも自分で思ってることばそのまんまだから。
だからこそ、けして、本気にしてはいけないんだ……！）
「だって今夜はお祭りだよ。ルビスさまはそんなにもお美しい、娘ざかりでいらっしゃる。こんなとこでいじけて燻ってるなんて、あ〜あ、なんてもったいない話だろうね？　花の生命は短くて、苦しきことのみ多かりき。青春は楽しまなくっちゃ。無理な我慢は美容と健康にも悪いんだよ、ほっほほほ」
「お願い、アリナ、もうもうやめて」
「なんでそういい子ちゃんぶるのさ？　ねぇ、ルビス。あんた、何も、ほんとうに悪いことしようってんじゃあないんでしょ？　ただ、ほんのちょこっと。ちょっとばかり見学しにいらっしゃるだけなら、全然構わないったら。ああ、そうそう。だってほら、だいたい今の時

期に、次なるご当主さま本人がこの街にいらっしゃってるってーのはさ、あたしら下っぱがバカやんないように、それとなく監督するためなんでしょう？」

そっぽを向いたまま、ルビスは小さくうなずいた。

少なくとも、その名目で来ていることは確かだ。

乳母はその必要はないときっぱり言ったが、現当主である叔父が許してくれたのだった。

（ひょっとすると、グアモン叔父さまは、わたしが最後の自由な季節をできるかぎり楽しみ尽くせるようにと、お考えになってくださったのかもしれない）

だからこそ、やさしい叔父に、心配をかけるような真似をしてはならなかった。

許された範囲を一歩たりとも、踏みだしてはならないはずだった。

「ねぇねぇ、だぁったら。やっぱり、ここは一発、ちゃんと現場に行ってみなくっちゃ。何も遠慮することなんかないよ。さぁさ、行こ行こ、ねっねっ」

「でも、でも……だめ。できない！」

「なんで」

不貞腐れるアリナに、ルビスの胸は冷たくなった。

（苦しい思いをしているのは自分のほうなのに、どうして、こんなにも幸せな従姉に気を使わなくてはならないのだろう。

気紛れで破天荒で、道義だの習慣だのといったややこしいことにこだわらない。

アリナは、自由だ。
その上、こんなに美しい服を着て、踊りに行くのだ……！）
「あなたにはわからない」
よく考えないうちに、ことばがこぼれた。
「わたしの気持ちなんて、誰にもわからないのよ……！」
「あー。そうかもしれないけどさ。ま、そういじけなさんなって、とにかく、あんたに必要なのは気晴らしよ。こんな黴臭い家にとじこめられてたんじゃ」
「声が大きいわ、アリナ！」
供に連れて来た灯心の精マルランドは、ランデールに住む姉の家を訪問しに出かけている。だが、夜半には戻ってくると言っていた。いや、今この瞬間にも、玄関を潜るところかもしれない。
まさかもう帰っていて、どこかでこの罰当たりな相談をこっそり聞いているのではないかと思いつき、ルビスはあたりに目を走らせた。
アリナはそれを見逃さなかった。
形のよい唇の端に、からかうような笑みが浮かんだ。知らぬ間に尾が規則正しく揺れた。ルビスがもう、半分以上、出かけてしまいたい気持ちになっていることが手にとるようにわかったのだ。

王女のように毅然とし、一族の期待を一身に集めて生まじめな暮らしをおくっている年下のこの少女の胸にも、ちゃんと幼い反抗心があることを知って、アリナは満足だった。うまく言いくるめれば、ちょっとした悪事にだって誘いこめそうだ。

（将来この子が力を持って、何か偉そうなことを言いだしたら、今日のことを思いださせてやろうか。きっと融通が効くに違いない）

小狡い計算も働いたが、根は単純な仲間意識、素顔を見せてくれた優等生への素朴な親近感だった。

（族長さまだなんだって言ったって、所詮はガキさ……！）

アリナはできる限り物柔らかに微笑んで、うなだれるルビスの膝をそっと揺すった。

「だからね。要はバレなきゃいいってことでしょう。戸締りの呪文でもかけて、影を一枚置いてくといい。そいつがスヤスヤ眠ってれば、マルランドの婆あだって、安心して高いびき、朝までグッスリだよ。広場のほうじゃあ、そろそろうるさい年寄りどもがみんないなくなるころだ。あんたの顔を知ってるような五大家直系のお偉いかたがたが万一あそこらへんにいらしたとしても、そろそろみなさん、お戻りになるはずだ。けど、ほんとうは、これからが一番いい時なんだよ。ねぇ、あんただって、一生に一度くらい、ほんものの祭りを見たいでしょうが」

「そりゃ……」

一生に一度。

そのことばが、ルビスの胸を突いた。

今年の祭りを逃したら、もう二度とチャンスはない。来年の今ごろ、自分は、山の麓の族長の館の暗い奥座敷に籠って、くる日もくる日も変わりのない退屈なつとめを果たして暮らしていなければならないのだ。

ルビスはゾッとして、ゾッとした自分の幼さに、もう一度、もっと恐ろしい寒気を覚えた。

(たった十六で、わたしは、永久に世間と離れなくてはならない。

娘時代は、もうすぐ終わってしまう。

まだ、何の準備もできてはいないのに……)

揺れる心に、だが、またしても母の幻が浮かんだ。

母は、ルビスがどう取り繕って誤魔化しても、きっと真実を見抜いてしまう。月の巫女のいる山奥の湖のように、いつも静かに澄んだ瞳で、じっとこちらを見つめているのだった。

「……ああ、だめよだめ！　やっぱりだめ！」

ルビスは両手で顔を覆った。

「どうかお願いよ、もう誘惑しないでちょうだい！」

「そんなに深刻になることはないじゃないか。みんな、もうすっかり酔っ払ってるよ。頭に羽が生えてるから、明日になったら何ひとつ覚えてやしない。それでもどうしても気になる

って言うんだったら、そうだ。そうだわ、ちょいと変装すりゃあいい。ルビスがルビスだってことなんか、誰にもわかりゃしませんって」

「変装ですって？」

目をぱちぱちさせるルビスに、アリナは大きくうなずいた。

「そうさ！　ねぇ、いいことを思いだした。あたい、祭り用の服をもう一枚持っているんだ。真っ赤でど派手で、あんたにも、絶対似合うよ。これまであんたが、ただの一度も身につけたことのないような、ご機嫌な服だよ」

「ああ……」

「大事な大事な服だけど、あんたにならば貸してあげる。去年まではえらく気に入って着てたんだけどねぇ、残念ながら、実は、もうここいらへんが、きつくってきつくってさぁ」

アリナが豊かに丸い胸元をことさら突きだして揺すり立てるようにするので、ルビスは思わず、ため息を洩らした。それを借りるとしたら、たっぷり詰め物をしなければならないに違いない。

だが、町娘のように華やかに装ってみたいという欲求は、あまりにも強かった。

五大家全体の正式な集いには、この上もなく上等な服を着たこともある。それらは先祖代々伝えられた重苦しい式典用の衣裳で、何度も裏返し、繕い直し、虫干しをしたものだ。要するに古臭く、美しくなかった。

普段のルビスは、どこの娘より質素で実用本意な恰好をさせられていた。

万事地味を旨とし倹約家でもあった母や、その母の教えに忠実な乳母が作ってくれる服には、いつも余分な飾りなどひとつもなかった。

たいがいは袖も裾もひどく長く、からだ全体を覆い隠してしまうものばかり。夏の盛りにさえそんな衣裳を選ぶのは、里では、もはやひと目にさらせぬような肌を持った老婆ばかりだというのに。

(アリナが気に入る服なら、間違いなく、とんでもない形や色をしてる。おかあさまなら、たぶん、下品だとか汚らわしいとか贅沢だとかおっしゃって、すぐに押しやってしまうような服だろう。

でも、わたしも、一度くらい、そんな恰好をしてみたい。

そんな服を着ると自分がどう見えるのか、試してみたいわ!)

派手な衣裳をまといマスクの下に素顔を隠してしまえば、ひとは自分をアリナだと思ってくれるのではないだろうか、と、ルビスは悪知恵を巡らせた。

(悪戯好きで目立ちたがりのアリナならば、自分がふたりいるような演出をしてもそれほど不思議はない)

(浮かれ女のアリナがふたり。そう、わたしはもうひとりのアリナになるのだ。

今夜はルビスはどこにもいない。

影は、おとなしく眠るだろう。マルランドが目覚めるよりも早く戻ってくれれば、何の問題もない。そう、夜明けの鐘が鳴る前に帰ってくれればいいんだわ。

ふたりのアリナは、きっと、どこの娘たちよりも、男たちの熱い視線を集めるはずだわ……！」

3

年ゆずりの炎を焚いている広場の周りは、国じゅうから今宵の宴会のために集まって来た妖精たちで、ぎっしりと埋め尽くされていた。

地面からはみだしたひとびとのいくらかは、近くの家々にあがりこんで窓から鈴なりになった。特に身軽なものたちは、木の枝や屋根の上の特等席をいち早く手にいれて、ゆったりと見物を決めこんだ。

何百何千という男と女、獣や鳥や蟲たちが、ひとつの生き物のように蠢いていた。天まで焦がそうとするかのように高く巨大に組まれた火やぐらを、幾重にも囲んで、人垣が揺れた。

ここで見かけるものたちの顔は、どれもこれも、興奮し、熱狂し、満足そうだった。

少年たちはそわそわと落ち着きのない様子でおとなぶった挨拶を交わし、少女たちは身を寄せ合ってこそこそ通りすがりの異性や同性の品定めをする。こちらの一角で懐かしい誰か

と再会を果たした乾杯の声がしたかと思うと、あちらでは流行り歌の合唱が調子っぱずれにはじまった。

手作りのお菓子や塗り絵を並べて商才を試すものもあり、竪琴や笛を演奏し踵を踏み鳴らして帽子を回す陽気な連中もあり、みゃあみゃあ甘えた鳴き声をあげる生まれたての青翼竜の子を二十匹もバスケットに詰めてのんびりと貰い手を探して歩く兄弟があり、新しい魔法を発明したと称してなにやら怪しげなその指南書を誰かれ構わず売りつけようとしている巧みに顔を隠した老婆らしい姿もあった。

さまざまな耳や尾や羽根を持つもの、牙や鱗のあるものたちも珍しくはなかったが、山車に大きな玻璃細工の箱を乗せ水を満たしてやって来た半裸の人魚の姉妹は、さすがに注目の的になって、珊瑚樹のベンチに腰をかけ得意そうに長い髪を梳いてみせていた。

それほどまでと言わずとも、娘たちは誰も、それぞれの特徴がことさらに目立つように装い、見覚えのない種類の耳や尾を見かけるたびに、聳やかした肩ごしに挑むような視線を交わし、ツンとすましたり、不服そうに頬をふくらませたりした。実際にはないはずの羽根や触覚を身につけて、あれはいったい何の精だろうと噂の種になるのを面白がるものもあった。若い笑顔の可憐さと、趣向をこらした色とりどりの祭り衣裳は、この場を華やかせ、いかにも特別の夜らしく見せた。

他に何もすることのないものは、とりあえず、飲み食いに興じていれば良かった。収穫の

時を迎え、食べ物や飲み物は非常に豊富だった。あちらこちらに持ちだされたテーブルの上には、地上の畑から奉納された作物、大地の実りや狩りの獲物、薫り高き美酒や薬茶などが、どれも、ふんだんにふるまわれていた。精霊や妖精たちは一般に大喰らいではなかったが、年に一度の祝いの席では、みな遠慮なく味見をして、過ぎ越して来た年月を感謝し、来るべき厳しい季節の息災を祈る習慣だったから、テーブルの周りはどこもにぎやかに込み合ったのである。

ルビスには、何もかもが、珍しく、面白かった。

こんなに快活で気さくな宴にはとんと覚えがなかった。こんなふうに雑多で俗っぽく、解放的でかつ友好的な雰囲気を味わったことは、かつて一度もなかったような気がした。

さまざまな部族のものたちが、みな一堂に会して、親戚同士のように肩と肩をふれあっているのだ。普段は離れて暮らしている習俗の違うものたちが、互いに互いを尊重し、見知らぬ装いや耳慣れぬ訛を、かえって楽しんでいる。

こどものころ、両親に連れられてたびたび出かけた五大家の親睦の集いでも、珍奇なひとびとは多々みかけたが、みな、もっともっと品良くとりすましていて、何もかもが形式的だった。

その上、規模が違う。ともかく、これほど大勢のひとを一度に見ることだけでも、ルビスにとっては、はじめての経験だった。

知り合いがいないか、馴染みのない妖精や精霊たちがどんな変わった様子をしているか。ついキョロキョロそこらじゅうを見回したくなったが、ルビスは我慢をした。ここはアリナを見習って、物慣れた何くわぬ顔つきを保っていなくてはならない。

アリナは、頭をあげ背筋を伸ばして、牙狼のように堂々と歩いた。

道すがら出会ったともだちに挨拶の声をかけ、男たちのひやかしに邪慳そうに手を振り、果物を頬張り、スキーノ酒の杯をあおりながらも、そのゆったりと確信に満ちた歩調はいつも、けして目につくほどには乱れなかった。

邪魔なものは火炎孔雀の羽をつなげた豪華な扇で軽く叩いて追い払い、注意を惹きたい時にはチュチュッと短く唇を鳴らした。その翻る裾の中に時折生ずる鮮やかな虹に目ざとく気づいたひとびとは、誰もかれも、ほうっと目を丸くして賞賛の視線を送って寄越したが、アリナの返事はたいがいの場合、婀娜っぽく揺れるその腰の妖しい曲線と、くねる赤毛の尾ばかりだった。

周囲はこの上もなく混雑し、足許は暗く不確かで、どこかには水路があるはずだった。はじめルビスは歩くのも怖かった。満腹しほろ酔い加減になったものがそこらでいびきをかいていたり、誰かが連れて来たのか馴れた巻蜥蜴の類などが長い尾を揺らめかしていることもある。よく気をつけてから、足をおろす場所を決めなくてはならなかったが、ふたりの行く手はなぜかたいして遮られなかった。

アリナは人込みを読む術を知っていた。少しは遠回りをしているのだろうが、目的の野外劇場のドームに、ちゃんとだんだんに近づいている。

ルビスはほとほと感心してしまった。そして、従姉のその世慣れたものごしと肝の座り具合を、誇らしく思った。

(火の精霊一族の女ですもの、こうでなくっちゃいけない。

わたしにはもっと、学ばなくてはならないことがあるんだわ。

もうすぐ長になる身なのだから)

とはいえ、ルビスをルビスと見抜かれてはならない。幸いにも、というべきだろうが、娘心には不満なほど、誰ひとり気づいた様子はない。ここには、そんな慧眼は、ひとりとしていないのかもしれなかった。

例のアリナの、血のように赤い祭り衣裳は、確かに大いにひと目を惹くものだった。

スカートは膝丈で、前中心に大きく切りこみが入っており、一歩ごとに割れてブーツを履いたルビスののびやかな脚を、大胆にさらけだした。後ろ側には、館の敷物の赤狼の毛皮から切り取った立派な尾が揺れている。身ごろは少しばかり縫い縮めたおかげで、ゆったりと沿い、つややかな胸許をことさらに際立たせるようにできていた。

夜分に外出する際の作法として、ルビスは古びてはいるが豪奢な朱緞子のマントを羽織って出て来ていたのだが、ここはあまりにも暑かった。人いきれと焚き火のせいで、真夏でも

なかなかないほどの熱帯夜である。ルビスはすぐに汗をかいた。アリナがごく薄手の衣裳を選んでいたのも無理のないことなのだと知った。

邪魔な人込みさえなかったならば、しっとりと夜露に濡れたような高価な布片は、その滅多にない上等さの証として、重たげに、しかも優雅に風を孕み、いっそ涼しさを醸しだしたことであろう。だが、ここでは、そのような贅沢は望むべくもなかった。ルビスはマントを畳んで腕にかけた。邪魔臭く、またうっかり汚してしまった場合のあとの面倒を考えれば、持って来ないほうがずっと良かったのだとすっかり後悔したが、大事な家の財産である。どこぞに捨て置くわけにもいかない。

ともあれ、ルビスは満足だった。

『下品で』『無駄の多い』アリナの衣服は、思った通りよく似合った。普段の百倍も魅力的に見えるようだった。

そうして、見知らぬものたちからもじろじろと見つめられるのは、背筋がゾクゾクするような経験だった。

ひとびとの注意は、最初もっぱら、激しく赤い借り着にばかり吸い寄せられて来るかのように思えたが、けしてそれだけではなかった。衣の下の彼女の若々しい肢体を存分に観賞し、その亢ぶったまなざしで、たっぷりと誉めてくれるものも少なくなかった。

残念なのは、素顔をあらわにできぬことだった。

平凡な仮面の代わりに、アリナはどこやらから、闇豹の頭部を模した重たい頭飾りを手に入れて来た。それは、山鴉や黒雉の羽根を繋ぎ、宝珠を塡めこんだ見事なものだったが、それを被ってしまうと、髪も目も頬の大部分までもが、しっかりと覆い隠されてしまうのだった。

だから、ルビスの特徴的な顔立ちのうちで、賞賛の視線を送ってくれる若者たちが実際に見たのは、手強そうにきっちりと真一文字に結んだ真紅の唇だけなのだった。が、その燃えるような唇が、うっそりと微笑みの形を取る時、あるいは、不機嫌そうにへの字に曲がる時さえも、擦れ違う少年や青年や孫のいそうな老人までもが、いとも他愛なく魅了されることを、彼女ははじめて知ったのだった。

嬉しい自覚だった。口笛を吹かれた時、低い囁きの主になっているのを知った時、甘い気恥ずかしさと誇らしさに、ルビスの全身は熱く火照った。

弾んだ足取りで歩けば、これもやはりアリナが調達してくれた祭り腕輪がちゃらちゃら手首に鳴った。

同族の若者たちが、遠くから、あれがアリナであるはずがない、尻尾もどうも贋臭い、いったいどこの誰なんだろうかと首をひねっているのにも、最初はびくびくしてしまったが、しまいに平気になった。

（どうせ、誰にもわかるはずはないのだ……！）

アリナとルビスは、どんどん進んだ。
すると、純朴そうな様子の緑の上着の若者がひとり、人垣の陰から突進して来たのだった。彼は、香りのいいグノリアムの枝を一さし、ルビスの胸に押しつけるように与え、せつなく燃えあがるふたつのエメラルドの瞳で、激しく彼女を見つめ、そのまま逃げて行った。
茫然と立ち尽くすルビスに、アリナは高笑いをしながら教えてくれた。今宵、内気な木の妖精たちが思いをこめて捧げてくれる花や草は、永遠の愛と忠誠の誓いであると。
「あの子、あんたに惚れたのよ。あんたに生命、くれるってさ」
「ええっ」
「あんたが嫁いでやらなければ一生誰も娶らないし、どんな女の子にも手を出さないわ。今晩だって、あんたが構ってやらなかったら、誰とも踊れないのよ。あいつはこの先ずっと、あんたのものなの」
「でも、でも、そんなのって！」
今にも折れてしまいそうな枝を怖々遠ざけて、ルビスは声を潜めた。
「信じられないわ。ずいぶん度胸がいいのね！　だって、あたしこのひと知らないわ。顔も、よく見なかったのよ」
「だから森の連中って、わかんないって言われてんの」
アリナは肩をすくめた。

「だいじょうぶ、どうしても迷惑ならその枝、捨てっちまえばいいのよ。そうして、踊りがはじまっても、腕輪を受け取らなきゃいいわけ。それできっぱりふってやれるの。ま、だいたい、あっちだって、あんたをあんたと知ってたわけじゃないんだしねぇ……森の民のくせして火の一族のものの僕になろうなんてバカだもの。そう気にすることないわ。いい女ならば、この世の中にひとりくらい熱烈な崇拝者を持ってたっていいじゃない？　くれるってもんは、もらっときなさい。ウフフフフ」
「アリナにも、そういうひとがいるの？」
「んー？　ほっほほほ、まぁねー」
　ルビスはグノリアムの枝にそっと顔を寄せてみた。見れば、先に小さな青い芽があって、どこかしら懐かしいような甘酸っぱい匂いがした。
　それをくれた男の風貌は全く印象に残っていなかったが、今にも泣きだしてしまいそうだったふたつの緑の瞳は、ルビスのまぶたに焼きついていた。
（わたしをわたしと知っててくれたわけじゃあない……。
　じゃあ、あのひとは、わたしの何に、これを捧げてくれたのだろう？）
（わたしは踊りがはじまる前には帰らなきゃならない。あのひとは、わたしを探すだろうか。わたしがいなくなっていることを知ったら、どうするんだろうか）
　早く捨ててしまうほうが相手のためにもなるのだろうと知りながら、ルビスは枝を手放せ

なかった。傷めないように気をつけながら畳んだマントの陰に、そっと隠した。

4

「次なるは誰ぞ、次なるは誰ぞ?」

「俺だ!」

「待ってましたぁっ」

「クロミスさまーっ、パピリオクロミスさまーっ」

野外劇場の半ドームにさらに近づくにつれて、あたりの熱気はいっそう激しくなった。

周りのものに担ぎあげられて、こたび舞台に上ったのは、鋼の主パピリオクロミス。陽ざしを浴びた麦畑のような黄金色の髪をした逞しい若者である。歯の白い快活なその笑顔を向けられると、おとめ等は幾人もぽうっと頬を赤らめた。中には、気を失って、ふらふら崩れてしまうものさえもある。

彼は合図をして、赤錆の浮いた広刃を持ってこさせた。気合い一閃、それをたちまち鍛えたばかりのごとく輝く魔剣に変えたかと思うと、空を切り天を突き、見えない敵を何人も倒しながらひと通り力強い型をみせ、さらに、豪快に伸びていた顎髭をユーモアたっぷりに剃り落として、満場の喝采を浴びたのであった。

「いいぞー、大将ーっ」

「さぁ、次なるは誰ぞ、次なるは誰ぞ？」

「よーよー大地の、どーした。出ないか。さては臆したか、腰抜けどもめが！」

「急くでない。最も強きラーミアは最も後から飛び立つもの」

「吹いたな、こわっぱ！」

「ちょっと。ねぇ、押さないでくれません？」

「あっ、あんたはっ！　なによっ、さっき、アンジェリカスさまの髪の毛一本取った子でしょうっ!!」

「きーっ、引っ掻いたわね。わかった、あんた穴猿の精ねっ」

拳を挙げて野次を飛ばすもの、きつい訛でへらず口を叩くもの、肩車をされた上からテープや花びらを投げ飛ばすもの。

あがる歓声ごとに、ひと塊になって人垣が揺れ、まるで波打ち際にでも入ったかのように寄せては返した。

みんながみんな頭に血を上らせ、舞台やらお目当ての誰かれやらに気を取られ、何かあるたびに一斉にそちらに殺到しようとするので、さしものアリナも、なかなか前に出られない。

ルビスには、何がどうなっているのか、さっぱりわからなかった。

今の騒ぎの剣さばきも、生憎ながら、ほとんど見ることができなかった。

みなが一度に話しているのでさっぱり意味が取れないし、背の高い森の民やごつい体形をした土の精霊たちが壁のように立ち塞がっているため、周囲を見回すこともできない。酒と汗の匂い、ひとびとの興奮。空気は、けだるく澱んで、ルビスの思考をも、たちまちのうちに混濁させるかのようであった。

つま立ちになって、少しでも新鮮な空気を吸おうと伸び上がったとたんに、すぐ傍らに野太い声があがった。

「さあ続け、栄光のアヌビアス家に連なる勇敢なる青年諸君よ、来よ！　いでよ！　我が同朋の、無類の力を見せてくれぇぇぇん！」

やんやと囃されて、若ぶった雄たけびをあげる酔っ払った叫びに覚えがあるような気がして、顔を向けたルビスは、よく見知った赤ら顔を発見して、あわてて首をすくめた。それはトリファスキアータ、金の妖精たちの女部族長ペルラの夫。幼いころからの知り合いなのだった。

ただし、ルビスが知っている彼は、いつも皺ひとつないローブを纏い、数々の金銀細工を身につけ、貫禄あるからだを窮屈そうに椅子におさめて、しかつめらしい表情をした偉丈夫であった。寡黙で重厚で、無愛想なほど物に動じないふうに見えたものであった。このように血沸き肉踊らせて、とうとう腰の宝剣を振り回し他部族の娘らを追い回してからかってみせているところなど、昨日までのルビスであれば、想像だにできなかったところである。

（いやだわ、トリファ小父さまったら。みっともない。もう少しお若かったら、きっと、ご自分で飛びだしていってしまいそうだ）

クスクス笑いを押し殺しながら、ルビスは思いだした。

自分とて、とても自分らしいとは言えない恰好をして来ているのではないか。

（そうだ。今宵は祭り。堅苦しいのは似合わない。

このひとときばかりは、思う存分、うつけるが流儀。他人にどう思われるかなど気に病んで、内に籠ってとりすましていれば、臆病者と誹られるばかりだわ！

……よおし……わたしだって）

「ル……おっとっと」

名を呼びかけて辛くも堪えたアリナは、照れ隠しのあまり、かなり乱暴にルビスの腕を取った。ひとりしきりに考えこんでいたルビスは、びっくりして、思わずその手を跳ね除けてしまった。

「無礼者、なに用じゃ！」

「バカ、こんなとこで威張る奴があるかい。だからさ……ち！」

うっかり仮面の豹のとがった耳の中に囁きはじめたアリナは、すぐに誤りに気づいて、ぺ

しゃりと自分の額を打った。たちまち我にかえって笑いころげるルビスの実際の耳のあるあたりになんとか見当をつけて、早口に言う。

「あのねー。笑ってる場合じゃないよ。ボケッとしないで、ちゃんとあたいを見ておくれ。はぐれちまうとこだったじゃないか」

「ごめんごめん」

「さあ行くよ。こっちだ！」

「わかったから、そう引っ張らないでってたら」

「ぐずぐずするんじゃないよ！」

進んでゆくと、やがて、なぜかあたりにひとけが少なくなった。ルビスは頭を巡らしてみて、発見した。このそばには、緑や青の服を来たものがまるで見当たらない。

（何故だろう……？）

先を行くアリナに、怪訝な瞳を戻したルビスは、顔やからだにむうっと吹きつけてくる生き生きとした熱気に、思わず、笑みを洩らした。

これが群衆に自然に発した熱であるはずがない。こんなに熱く、こんなに激しいのは、火の民一族の吐息だけだ。抑えきれない興奮に文字通り身を焼くものが、たぶん近くにいるのだろう。

爆発するでもなく、炎の舌を明々と踊らせるでもなく、熾火のように密やかに燃えるもの

が、最も熱い。
（そういえば、水の精や森の民は暑さには弱い）
（わたしたち火の精霊の仲間が誰か、この祭りに本気で熱中していたら、ううん、ごく軽い騒ぎかたでも、ある程度以上の人数が近くに固まっていたらそれだけで、他の種族は近づけないんだ。
弱い奴らはそばを通るだけでものぼせてしまうだろう。
……いい気味！）
紅蓮の唇を明るく開いたルビスだったが、すぐに、不安になった。
（でも。アリナったら。
身内がいっぱいいるところに行くつもりなのかしら？
わたしの正体は、バレないかしら？
少なくとも、火の種族のものだってことは、すぐにわかっちゃうと思うけど……）
万一バレたらどうするのか、たとえば仮面を外せと言われたらどう誤魔化すつもりなのか。
尋ねておこうと、足を早めかけた、その時。
「よう、来たか」
遅かった。はや、仲間の近くまで来ていたのだ。
星灯りの向こうから、興味津々の顔がいくつもこちらを向く。ルビスはあわてて、乱れた

裾を整えた。

やはり一族のものたちだ。

当歳の火蜥蜴を何匹か、地面に打った杭に繋いで、みなその周りを囲むように、ぐるりと輪をなして、火の酒を汲み交わしている。

（これじゃあ、空気が熱くもなるはずよ）

そこらはわずかに高台になっていて、地面に座してさえドームがよく見える、良い所だった。おそらく込み合わないうちに、抜け目なく目当ての場所を占領してしまっておいたのだろう。

蜥蜴の炎に照らされて明るんだ大勢のほとんどの顔を、ルビスは、見分けた。

きつい隈取りを施しパピル煙草をふかして、ことさらにあばずれぶった様子をしているのは、グアモン叔父のひとり娘、まだ十を越えたばかりのカラである。とっくに灰になってもいいころじゃないかと噂のホマロプテラ家のお爺ぃもいた。が、大半は、妻となる女をまだ決めていない、遊び盛りの男たちだ。

座の中心から、さっそくふたりを迎えに立ち上がっていたのは、逞しい筋肉を誇示するかのように上半身裸体のままの青年である。銅針のごとく剛い髪をたてがみめかして腰まで垂らし、片目の周りには戦と雷鳴の女神キショウンの五芒の入れ墨がくっきりと光っている。

（……クリプトカリオン・レグナス！）

闇豹の仮面の下で、ルビスは赤い瞳を細めた。

（禍つ守、稲妻の主。親戚じゅうの鼻つまみ、生まれた時から人騒がせばかりしている、又従兄のクリプト！

　まあ、驚いた。乱暴が過ぎて港町アクトウスの斜め灯台に追いやられていたはずなのに……こっそり戻ったのね！　この祭りのために）

「どうした、狐火の。遅かったじゃねぇか」

　クリプトカリオンは、その太い腕で無雑作にアリナのからだを引き寄せると、いきなり、噛みつくように接吻した。

「あん……待って、よしてよ」

　はしゃいだ様子に身をくねらせ、尾をうねらせて、逆らうふりをしながらすかさず力強く応えるアリナのつま先は、軽々と宙に浮いていた。

　衝撃と嫌悪のあまり、ルビスは脚が震えた。

（こんなにいっぱいのひとが見ている前で、あんなことをしてみせるなんて！

　まあ、知らなかったわ。このふたりは、結婚を誓った仲なんだろうか。

　それにしても、あんなに長々としてみせるなんて。まるで見せびらかそうとでもしてるみたい。いやらしいったらありゃしない。

　なんて恥知らずなのかしら！

あんな奴が親戚だなんて、ひどい屈辱だ。
アリナとクリプトなら、ふん、不良同士で、とってもお似合いだわ）

ドキドキ激しく高まる鼓動に、頭が痛くなりそうだった。頬も目もカッカとして、仮面がなければ、ひとに笑われてしまいそうなほど、赤くなっているに違いなかった。

あんな廉恥心のない行いをした当事者たちは、いとも平然とすましているのに。

「心配したぜ？　美人さんよ」

「いろいろ事情があってねぇ。わかるでしょう？」

アリナはその媚を含んだまなざしを、輪をなす他の男たちにも満遍なく投げかける。男たちはみなだらしなく弛緩した表情で、ひやかし混じりにうなずいた。それでも、クリプトカリオンときたら、構わずニヤニヤしているのだ。

ルビスは憤慨を覚えた。ひどく侮辱されているように感じた。

彼等はみな、わずか後には、自分の責任下に入るべき連中である。こんなに不道徳で無作法だとは、まったく心外だ。すっかり騙されていた自分が、腹立たしい。

（みんな、叔父さまのところに相談ごとや願いごとに来る時には、生まれたての蜜雀や内気な大耳砂狐よりももっとびくびくしてるくせに。害のなさそうな、おとなしそうな顔をしてみせるくせに……！）

こやつらをうまくまとめていかなくてはならないのだ。来年の今ごろは、きっと、気が気


MUTSUMI

ではない日々が続いているに違いない。

ルビスは、見咎められぬよう、そっとため息をついた。

「あ、そうだそうだ！　ねぇお兄ぃさんたち、もうひとつ席をあけてちょうだいな。連れがあるのよ」

アリナが言うと、男たちはたちまち身軽に立って、ルビスを迎えた。女であるからなのか、この場のリーダーの愛人の連れであるからなのか、舞台を見やすいかなりの上席に案内してくれた。

ルビスは無言のまま緊張した会釈をしたのみで、すぐに舞台に向いて、みなに背を見せた。

一族の男たちは、その冷たく取りすました様子に、拍子抜けし、首をひねった。

「なんだい、変な女」

「きっと、田舎もんなんだよ。緊張してんじゃないかな」

「何か、飲みますか」

「食い物取りにいくけど、いらない？」

怖々と丁重に、あるいは、快活に親しみを持って声をかけられても、じろじろ無遠慮に見つめても、ニヤニヤ笑って囁きあっても、ルビスは聞こえないふりをした。遠いドームのほうを見つめたまま、身動きひとつしない彼女に、男たちはやがて飽きて、肩をすくめ、彼女等の登場でとぎれていたらしい話の続きをはじめた。

「なぁ、やっぱ、フェナコグラムスじゃねーかな」
「いや、レスティクローサどのだべさ」
「賭けるか？」
「違う違う。バカめ、みんな、肝心なひとを忘れてるよ。スクレロパゲスさんだよ、おいら確かな筋から聞いたんだ。絶対だぜ！」
親しい名前にドキッとして、ルビスは耳を欹てた。
（……何の話だろう……？
何がスクレロパゲスなんだろう？）
「そうか。そうか。忘れてた」
「なるほど。あのへなちょこ野郎だってぇのは、いかにもありそうな話だな」
「しっ、止せよ、そばに弟君がいるんだから」
「ほんとにあの腰抜けなのかい？　やだなぁ、どう考えたって役不足じゃないか。ルビスさまのほうが、百倍も強かだぜ」
「ま、冬にはわかるって。長になってからじゃあ、披露宴だって立派にしなきゃならなくって大変だろ。氷山が流れて来るよりはだいぶ前に、やっちまうって話だったぜ」
「確かな筋がそう言ったのか？」
「ああ。なぁ、そいつは筋も確かだが、尻のでかさもすごくてよぉ」

「わぁ、誰だ誰だ」

男たちは肩を寄せあって囁き声になり、時折大声をあげて笑うばかりになってしまった。時々無礼にもこちらを見つめて、何やら言ったが、ルビスは、膝を摑んでいた拳にギュッと力をこめて、叫びたいのを堪えていたので気づかなかった。

（ああ……やはり、わたしの結婚相手のことだったのか……！）

スクレロパゲスの白い指を飾った火の紋章の指環を、刺繡のある衿許を上品に縁取った絹布を、仕立のいいジュポンを、ルビスはありありと思いだすことができた。彼は先日、彼女の生家である煉瓦城にやって来たばかりだったのだ。

弟クリプトカリオンの常識外れな風体とは対照的に、彼はほんものの紳士で、風采のいい好青年だった。色白の広い額に明るい海老茶色の巻毛を垂らし、いつもはにかんだように静かに笑っている。気性の荒い火の一族には珍しく、内気で遠慮がちな、見るからに純情な若者であった。

彼女は彼には何の興味もなかったから、その日も、たぶん叔父グァモンに何か用事でもあったのであろうと、そっけなく考えただけだった。

スクレロパゲスが顔を見せた時、彼女は、おのれの影を相手に剣の稽古をしていた。彼が、邪魔をしてはいけないと自らを厳しく戒めているような顔つきで、そばまで来てわざわざ立ち尽くしてこちらを眺めている様子は、まるでよく慣れた牧犬のようだった。招いてやるま

では、いくらでもその場で待ちつづけただろう。虹色のボンボンを詰めた美しい瓶を土産だと言って差しだした手に、彼女がなにげなく触れてしまったその時にも、彼はたちまち頬を赤らめ手を引っこめた。そして、咄嗟にそんな失礼な仕種をしてしまった自分に驚愕し、茫然とし、許しを乞うようにルビスを見つめたのだ。

だから、ルビスは、ついその腕を軽く叩いて、無邪気を装った甘え口をきいてやらずにいられなかった。

「まあ、レグナスのお兄さま、ご親切ね、どうもありがとう。わたくしの欲しいものを、ほんとうによく御存知なのね。お元気でした？」

「ええ、ルビス。お気に召し……」

（『て、幸いです』。『たなら、光栄です』、かな？）

ことばの続きをルビスは、頭の中で、自分で補わなくてはならなかった。若い娘に対してはことに臆病で、およそ五語以上連続した会話を口にすることのできないスクレロパゲスは、声が上擦りだし喉が震えると、まるでそれで誤魔化しおおせるとでも思っているかのように、ルビスの手の甲に短く慇懃な接吻をしたからである。

「ねぇ、お兄さま、少し剣のお相手を願えませんか？　……ああ、だめね、美しいお洋服が汚れてしまいますわ。……いいえ、もちろんお兄さまのことを、わたくしが負かせるはずはないし、服を惜しむようなかただと思っているのではないのよ。けれども、あなたはやさし

いかただから、小娘相手に、けして本気をお出しになってはくださいませんでしょう？　わざと負けていただいても、ルビス、面白くないわ」
「そんな、ぼくは」
「ねぇ、それより、どうかランデールのことを話してくださいな！　もうすぐお祭りなんでしょう？　わたくし、行ってみたいわぁ。お兄さまも、おいでになる？　力比べに出場なさるの？　……ああ、そんなことはなさらないわね、とっても遠慮深いかたなんですものね」
満足に口を挟むこともできず、困ったり、喜んだり、くるくる目まぐるしく変わる彼の表情が可笑しくて、ルビスはひとりにぎやかにしゃべりつづけた。質問も答えも引き受けてやると、彼は動揺しながらも、ホッとした様子だった。こわばった笑いのかたちにしたまま、ぽかんと口をあけて、ばかのようにうなずいて、いちいち感心するのだ。
ルビスは、わざと大袈裟に全身で喜怒哀楽を表現してみせ、あるいはふたつの瞳に悪戯っぽく炎をきらめかせて、彼の当惑がちな顔の奥に、静かな興奮と、熱狂的な崇拝を見てとって、ひそかにいい気分を味わった。
（そのあいつが、わたしと、結婚するですって？　お婿さんの、最有力候補になってるんですって？
ああ、では、わたしは来年の今ごろ、あの牙を抜かれた男のこどもを孕まされているのだろうか。そうして、あんな意気地なしの血を引くこどもたちが、火の一族の次の次の長の座

を受け継ぐんだろうか？
そんなの、いやなのに。御免なのに……！）
ルビスはしっかりと歯を噛みしめようとしたが、怒りのあまりがくがくと震える顎を止めることはできなかった。胸の奥に生まれた嵐に、からだの内側から、今にも飲みこまれてしまいそうだった。

クリプトカリオンは首をひねった。
「誰だ、あの豹面は？　なんで顔を隠してる？」
「野暮なこと言わないの！」
「痛てててっ、くそ、思い切り抓りやがったな」
「他の女に色目使ったりするからだよ。あたいがいりゃあ充分だろう？　あん？」
「そ、そりゃあ……まぁ」
怒ったように腕組みをするアリナのむっちりと張り詰めた胸許に、思わず視線を引きつけられながらも、クリプトカリオンのニヤニヤ笑いは、今はどこかしら半端であった。
（……妙だな。あの女、あの雰囲気。なんとなく、どっかで……）
「なんだいなんだい、浮気者。知らない女とみると、鼻の下伸ばしやがって。おまえなんか、港の灯台で、ひとりぼっちで干からびちまやいいんだい！」

「おいおい。アリナ。そう、尾をふくらますな。……なんだ、いい服着てんじゃねぇか」
「あんたの興味は、どーせ中身のほうだけだろ。離せよ、いいから、離せったら」
「はははは。相変わらず活きがいいな、ようし、暴れろ暴れろ！」
むずかる愛人のふくれっ面を、横ざまに抱きしめることで誤魔化しながら、クリプトはまた、そっとルビスのほうをうかがった。
ルビスをルビスと知ったわけではなかったが、微動だにせず舞台を向いたままの豹頭の後ろ姿には、どこかしら背筋の寒くなるような気魄があった。
火の酒の入った皮袋をむんずと掴むと、彼はそれを唇にあてて、飲んだ。

5

「さぁさぁ、みなさんお待ちかね!!」
ちょうどその時、うまい具合に、クリプトカリオンの疑問さえも吹き飛ばすような、甲高い作り声が響いたのだった。
「祭り名物技くらべ、いよいよもって、はじまりはじまりぃ！」
「おお。やっとか」
「わぁ、良かった。うまく間に合っちゃった」

　クリプトカリオンも、アリナも、そして、豹面に素顔を隠したままのルビスも、思わず前のほうに身を乗りだした。
　広場じゅうの誰もが争って注目する舞台の上には、いつの間にか、道化姿の司会役が登場していた。色とりどりの衣裳をつけたおどけものは、ドーム内部に吊るした長いブランコに片手倒立して、盛んに行ったり来たりしながら、高らかに呼ばわった。
「どちらさんもどちらさんも、応援ばかりじゃ芸がないよ。力だめしに肝だめし、魔法の技の見せどころ。我と思わん阿呆ども、さぁ遠慮なくあがってらっしゃいらっしゃい！」
　紐に繋がれてそのブランコの周りをたどたどしく飛び回る鳴き竜のこどもたちが、悲鳴なのか訓練の成果か、次々に調子っぱずれの喇叭のような音をたて、会場じゅうの笑いと拍手を受けた。
「どーもどーも。……やっ！」
　森猫のように身軽にブランコから飛び降りながら、司会は、ドームの奥を覆っていた布を、サッと落とした。現れたのは、おとなが四、五人でも囲めるかどうかというほどの大岩である。
　会場じゅうを、驚愕のどよめきが走る。
「さてさてご覧のこの岩塊。ちょいと叩いてみますれば、ガンガンガガンと鳴り響く。おお痛たた、打てば響くたぁこのことだね」

「わははは」
「ふざけた野郎だぜ、誰だありゃ？」
「知りませんねぇ……」
「さっきの逆立ちなんか、ずいぶん上手だったわよ。度胸はあるわ。きっと素敵なひとよ」
「あんたまたひと目惚れ？　ま、道化なら、競争相手は少ないだろうけど」
噂の的になっていることになど気づかないほどあがっているのか、あるいは、知りながらわざと焦らしているのか。司会役は、いつまでたっても、みずからの名乗りをあげはしなかった。
「えーこれなるは、なんと、魔峰オーブ山系は三の谷よりこの日のために特に取り寄せたる、この世にふたつとなき魔岩」
「嘘つけ」
「そんなもの、どうやって持って来たんだ」
「さあて、どうしたんでしょう。あたしは申し訳ないが不勉強にして存じません。おおかたミトラ神さまのご家庭で夫婦喧嘩でもあったんでしょうよ。ここはまあ、どうかひとつ、黙って信じてやってください。さあて、どちらさまも、どちらさまもおたちあい……こら。おい、ここだよ、ここだと言うに。バカだね、鳴けったら、この間抜けども」
司会が三日月型にとがった沓を片方脱いで投げあげると、鳴き竜たちはお互いにぶつかり

あって必死でそれを避けながら、大あわてでファンファーレを作る。観客たちはやんやの喝采で大喜びをした。

司会は汗を拭き拭き、あちらこちらにぺこぺこ頭をさげる。

「さぁ、賢いみなさんは、もうおわかりだね。今年の課題はこの巨岩だ。すぱりと割ってみせるのは、どちらの賢者か力持ち。さぁさぁさぁ、まず最初に舞台においでくださる勇気ある殿方、あるいは、凛々しき令婦人は、どちらのどなたさまでしょうか？　……どうぞーっ！」

鳴き竜たちは、今度はうまいこと声をそろえたが。

「え」

「おい、まさか」

観客席では、はしゃいだ笑いが既に重たく凍りついていた。

「あれ……？　どうしました。……どうぞーっ!!」

司会役がさらに陽気に煽っても、みなざわざわと身動きし、互いの顔色を見交わして、困ったような笑い顔を作るばかり。毎年恒例の、我先に立ち上がろうとする騒ぎもない。

「あれを、割るって？」

崖兎の精の耳がぺしょりと折れる。

「ひとりで、だろう？　そりゃ無理だ」

角亀の精が首をすくめる。
「俺があんたと駆けっくらするほうが、まだ望みがある」
「のう、楡どの。今年は、ちと、厳しすぎるのではなかろうかな、御同輩。昨年など、大樽から麦藁をもって幻の名酒『羽猿』を飲み干さんとす速度を競ったのみであったと聞いておるが、まことか？」
「うむ、しかと確かじゃ、樫どの。せがれが出場したので、よく覚えておる」
樹木の老人ふたりが、皺だらけの顔をつきあわせて囁き交わす。
「いや、案外あれも見掛け倒しかもしれないよ」
「うん、もろい岩なら簡単だ」
「そう思うんなら、おまえ行けよ」
「そういうおまえこそ」
ざわざわとつぶやく声はあちこちでするが、出場しようというものは、ひとりとしていないのだった。
「えー、困りましたね。きっと、誰かまず、やってみてくだされば、次々に挑戦者が出てくださると思うんですが」
とうとう司会役が、なきべそ声になった。
「ねぇ、お願いしますよ。森のかたがた。水のみなさん。トリを狙ってらっしゃる、そこの

あなた、誰かに先に割られちゃったらもともも子もありませんぜ？　火の親分さんたちに、地に満てるかたがた。どなたも出ないんじゃあ、伝統行事がだいなしだ。誇り高き金の精霊一族はどうなりました？　一番乗りじゃあ、気が進みませんか？　ああ……やれやれ……どうしよう？」

司会がいじけてしゃがみこんだ時。

「しかたない。助けて進ぜよう」

黄金の髪の青年が、ゆらりと立ち上がった。

「きゃあーっ、パピリオクロミスさまよーっ」

「うっそぉ、またぁ」

「あ、さっきの！」

「いいのよ、あのかたなら何度でも、あたし、アンコールしちゃうっ!!」

おとめたちの上擦った声援に、男たちは不快そうな顔を見交わした。

壇上に進みくるりと客席側に向き直った鋼の主は、不敵に笑いながら、さっきの剣を掲げてみせた。

「みなに聞く。ほんとうに俺がやってもよいのか？　こいつはもっと頑丈な岩を切りだすこともできるのだぞ」

「そりゃあいい。さっさとこいつが片づけば、あたしはさっさと酒が飲めます」

「では、よいな？」
採み手で迎える司会役をうるさそうにうっちゃって、パピリオクロミスは、肩を聳やかした。
「恨むなよ。何度も場をさらわせてもらっちゃあ全く悪いが。実は、今日は偶然、妻の誕生日なのだ」
「う、うそ、あのひと奥さんいるの？？？」
「いやーん、信じらんなぁい」
「最愛の美女、玻璃のおとめムルチプンクよ、この一撃をそなたのつややかなる肌に捧げん。……行くぞ。……イヤアアアアアッ!!……」
キィーン！
黄金色の髪のつわものは、あんぐりと口を開けた。
そして、会場の一角は、折れて飛んだ彼の魔剣のきっ先に万々にも当たってはならじと逃げ惑うひとびとで、大混乱になった。
「離婚だな」
盃をあおりながら、クリプトカリオンが深刻そうにつぶやいたので、ルビスは思わず吹きだしてしまった。
暴れん坊の又従兄はそんな彼女に一瞬チラリと目を向けたが、黙って肩をすくめ、自らの

盃にまた、火の酒を注ぎ足した。その入れ墨のある瞳はまた、かすり傷ひとつつかなかった舞台上の大岩に、じっと向けられるのだった。

　真面目な顔を保っていられたものは、他にそう多くはなかった。広場じゅうのほとんどが、今は腹を抱えていた。つい今しがたのおとめらの熱狂に、不快さを隠せなかった者たちは、この喜びをもまた隠し得なかったし、妻なる女があるのにもかかわらず、キヤアキヤア言われていい気になっていた男に、既に敵愾心すら覚えていた無垢にして残酷な少女らもまた、両手を打って喝采せずにはいなかった。

　多かれ少なかれパピリオクロミスの係累であるはずの、金の精霊たちさえもが、必ずしも味方ではなかった。

「ひとりでしゃばって恥をかきおって」

「種族の迷惑も考えてないんだから」

　渋い顔でぶつぶつ文句を言うものもあったが、ほとんどは、ただ、堪え切れずに、クックツ笑いを洩らしてしまった。

　が。

　どんなに手放しで笑っているものも、思わず憎まれ口をきくものも、実はこころの底からではなかった。ともかくみなが尻ごみするあんな巨岩に挑戦しようと思いたち、最初に舞台に登ってみせるだけの勇気が、彼にはあったのだ、ということを、認めないものではなかっ

た。

　だから、すっかりしょげこんですごすごと舞台を降りるパピノオクロミスには、登場する時以上と言えぬこともないほどの盛大な拍手と賞賛の声もまた、聞かれたのである。

「だいたいあいつは三枚目が似合うのじゃ。なまじ色気を出して、二の線を狙ったりするからいかんのじゃ！」

「まぁいいじゃありませんか、おとうさん。とにかく、これだけ大勢のひとに、喜んでいただけたんですから」

　ひと目を避けるようにうつむいて密かにつぶやき合う、破れたヒーローの年老いた両親の声を聞いたものたちは、互いの無責任と身勝手さを恥じて、深く瞑目したのであった。

　さて。

　岩はまだ、ぴくともせずに立っていた。

　司会役の懸命の嘆願を聞き入れて次に登場したのが、あまりにほっそりとした少年であったので、ひとびとはみな驚き騒いだ。そして少年の三歩ばかり後から、いっそう可憐なたおやかな姿の少女がおずおずと付き従って来るのを見ても、あまりの意外さのために、ひどい野次を飛ばすものもなかった。

「ぼくらは、森の民の長オトシンクルス家に連なるもので、雪木犀と風木犀を守る仕事についています。名乗りを許していただけば、ぼくがピライーバ・オルナ・オトシンクルス、あ

ちらは、双子の妹の、ピラムターバです」
萌黄色のローブの少年は緊張した顔つきのまま細いがよく通る声を響かせ、枯れ葉色のローブの妹とうち揃って、観衆たちに深々と頭を下げた。
「ひとりで割らなきゃならない約束なのは知っていますが、ぼくらは、今申し上げたように、双子であります。生まれてから今日までずっと、いつでも、何でも、妹とふたりで協力してまたは分担して、やってきました。だから、今宵も……もし、みなさんのお許しがあればですが、ふたりいっしょに挑戦してみたいと思うのですが、いかがでしょうか」
少年が、励ましか同意を求めるように傍らの妹を見やると、少女も兄の瞳を見つめ返して、大きくうなずいた。
ふたりは元気づけあうように微笑みを交わし、それから、揃って、裁きを待つかのような生まじめな顔つきになって、広場側にまっすぐに向き直った。
その互いによく似た派手ではないが上品に整った顔立ちに、客席にいるものの幾らかは、せつない吐息を洩らし、あるいは、結んだ唇の隙間からそっと唸った。美しい少年をことのほか愛する男たちや無垢なる少女を求めずにいられぬ女たちは、特にそうだった。森の種族の双子は、ある種彼等の憧れる完璧さを具現する一対だったのである。
やがて会場いっぱいに、温かい拍手と声援があふれた。
そうして、双子は果敢に挑戦した。

大岩に登り、わずかな裂け目をみつけて、そこに、自分たちの司っている植物の小さな苗を植えたのである。繋いだ手と手の輪の中に囲いこんで、静かな声で祈りを唱えると、苗はみるみる成長しはじめた。新しい葉が次々に芽吹き、枝が伸び、幹はどっしりと太くなって来た。

だが、根は、どうにもならなかった。

分かれ分かれて広がった根は、岩の内部に食いこもうと何度ものたうつようなもがきを見せたが、果たせず、虚しく岩肌を撫でながら結局は宙に散開した。危うい支えに疲弊した樹木はやがて力なく萎れはじめ、夢のような儚い花を二つ三つつけたところで、とうとう崩れるように倒れて、大岩の上から、ひとりでに転がり落ちてしまった。

静まりかえった広場に、木犀の甘い気配が、馥郁と薫った。

ほの白い頬をそれぞれ紅潮させながらも、礼儀正しく会釈をして、手に手を取って去ってゆく双子たちに、ひとびとは感動を覚え、ひとしく胸に痛みを覚えた。

（いとも地味に見える森のものたちの中に、これほど賢く戦い、潔く退却する若者たちがあったとは……）

多くのものは意外に思い、そして、みずからの偏見を密かに恥じた。

次に、大地の精霊たちの期待を、身に背負って舞台に登った穴掘り鼠の精は、数千匹の家来どもを動員して婦人等の悲鳴と顰蹙を浴びたが、やはりあえなく失敗した。

そして、女たちの懇願にも頑として動かないクリプトカリオンに業を煮やし、代理と称して出て行った火蜥蜴の精ラプラディーの激しい火炎噴射も、彼の大岩を溶かすには至らなかったのである……。

アリナやカラはひどく悔しがった。稲妻を落とせば、いかな大岩とて割れぬはずはないではないかと、唾を飛ばして説教をした。だが、クリプトカリオンは、皮肉な微笑みの形に唇を歪めたのみで、ただ酒ばかりをあおりつづけた。戻って来た蜥蜴の主をも責めはせず、黙って盃を差しだしてやるのだった。

悪評高い又従兄の、どうも不可解な態度を肩ごしにうかがいながら、ルビスは眉をひそめた。

クリプトカリオンが何を考えているのか、見当がつかなかった。

（ひょっとしたら、ここにいることを大っぴらにしたくないのかしら？

誰かに見つかると、すごくまずいことになるのかもしれないわ。

ならば、わたしと、同じなのね……）

ふと、ふたりの視線が交わった。

杯を干したままの姿勢で止まった男の瞳も、作りものの豹の仮面に隠された少女の瞳も、同じひとつの血の赤に燦然ときらめいた。ふたつの頭は、疲れた火蜥蜴の発するやや紫を帯

びた体光にぼんやりと照らされて、生命を賭けた勝負の最初の攻撃のきっかけでも探しているかのように緊張を含み、どちらからも動かなかった。

(……ルビス……!?)

唐突に、従兄の入れ墨のある顔全体に現れた理解と困惑の光に、ルビスはぎくりとした。

(気取られた……!)

無言のまま、ルビスはマントを取って立ち上がり、ひらりと身をかわしてその場を逃げだした。

力の限りに駆けた。

アリナにひとこと礼と詫びを言うべきであったということも失念していた。一刻も早くこの場を去らねばならぬという焦りばかりが頭にあった。

たちまち、肺が沸騰し、胸がはち切れそうになった。仮面は重く、ひと足ごとにガクガクと揺れ前がさだかではなくなり、ブーツの革は伸びて素足を傷つけた。急に目の前を横切った誰かに驚いてこれを避けようとしたとたん、踵ががくりと尋常ならぬ形に踏み惑って、地面に投げ出された。膝も、掌も、豪華なマントも土にまみれ、赤狼の尾は取れてしまった。全身の筋肉が手もなく緩み、喉があえいで、くるぶしがズキズキした。

(降参しよう、もう観念しよう)

が、周囲のひとびとが助け起こそうと差し伸べてくれる手を見て、何かが爆ぜた。ルビス

は、それをふり払って、また駆けた。駆けて駆けて、駆けつづけた。
　とうとう息が切れて走ることができなくなった時にも、よろめきながら、足を前に出した。止まることはできなかった。
（弱味を握られてはならない）
（あんな奴に情をかけられてはならない）
（まだ、わたしをわたしと確認されたわけではない。逃げきれば誤魔化せる……！）
　クリプトカリオンの獲物を追う剣鷹の目がどこまでも自分を追って来るような気がして、背筋が凍った。背後を確かめたい気持ちを、必死で堪えた。
　このままなんとか人込みに溶けこまなくてはならない。なにげなくふるまって、誰にも注目されぬまま、この場を抜けださなくてはならない。
　だが、その赤い衣裳と、みごとな仮面は、残酷にも目立った。あまりにもひと目を惹いた。
　おまけに、舞台などまるで見えないこの水路沿いの、段低くなった道に佇するを選んだものたちは、ひと夜の恋の思い出を共有する相手のみを探し求めているらしい。ひとり歩きの娘と見れば、毛並みのよい熊栗鼠がのこのこやって来たとばかり、あるいはとにかく声をかけてやるのが礼儀とばかりに、たちまち愛想良く近づいて来る若者たちでいっぱいなのだ……！
「どうしたの？　だいじょうぶ？」

「きみ、怪我をしてるじゃないか。手当てをしなくちゃ」
「誰かとはぐれたの、お嬢ちゃん？　彼氏と喧嘩でもしたのかい？」
「それともいまだにあぶれてるのか」
「おいでよ、ぼくらと遊ぼうよ」
　行く手を邪魔するものたちに負けずと足を早め、それでもついてくるものが諦めるまで、無言のまま豹頭を振りつづけていると、だんだん血が巡らなくなって、胸がむかむかし、他愛もなく涙が滲んできた。
　際限もなく寄ってくる下心剝きだしの男たちを、転んだ時に血の滲んだ掌で、果物蠅でも追い払うような邪慳な手つきで退けながら、ルビスは唇を嚙みしめた。
（ひとりになりたい。ここから出たい。もういやだ！）
　やっと石段を見つけて水路から離れたが、それが街のどのあたりであるのか、ルビスにはまったくわからなかった。前方はいずれ広場に通じるとみえてにぎわしく、左右の路地は古道具や手作り品を並べた臨時のマーケットにぎっしり埋め尽くされ、背後は水。どちらを向いて歩こうとも、また雑多な人込みの中を抜けて行かなくてはならないのだった。
　路傍の石にくたくたと座りこむルビスを、山蜘蛛の糸のショールや、飴を絡めた木の実や、麗豹の牙をつなげたペンダントを売りつけたがるものたちがわらわらと取り囲んだ。無言で頭をうち振って、みな穏便に引き取らせたが、我がカリクティス家の至宝炎十字の剣を模し


Mutsumi

たちゃちな段平をことさらに秘密めかして見せられた時には、とうとう癇癪を起こしてしまった。一見すこぶる興味を持ったごとくに装い、愛想よく微笑んで受け取り、軽く試し振りをすると見せかけて、傍らの屋台の柱を横ざまに薙ぎ払ってやった。贋の剣は一撃で曲がってしまったが、魔文字代書のけちな店もその隣の氷海鯰や斑海蛇を並べた乾物屋も、みながらがらと崩れ去った。怒って追いかけてくる商人たちから、生命からがら逃げだしながら、なぜわたしはこんなにバカなんだろうとルビスは涙まじりに考えた。

あまりにも疲れすぎていて、何もかもうっとおしく、憎らしかった。こんなに捨て鉢な気持ちでいるのでは、またどんなざまをしでかしてしまうやら、自分で自分が恐ろしかった。

一刻も早く、ちゃんと自分の顔をしていても構わない場所に戻りたかった。頭など使わずに、思うさまにふるまいたかった。

（ああ、もっと早く席を立てば良かったわ。

クリプトカリオンの姿を見つけたとたんに、さっさと帰ってれば良かった。ううん、ほんとうは、すべて最初から間違っていたのよ。はじめから、こんなところには来ちゃいけなかったんだ。

なのに、どうしてあんなに来たかったのだろう。こんな場所の、どこがそんなに素晴らしく思えたのだろう。とても不思議だ。

ああ、帰りたい。わたしのおうちに。わたしのベッドに。

もう何も考えずに、眠りたい……！）

6

このころ、より舞台に近いほうでは、ひとびとがみな動揺していた。
恒例の年ゆずりの焚き火に、大勢の群衆の熱狂に、すっかり温められているはずの空気が、今は誰にとっても、ひどく冷たく息苦しく感じられた。
五大家直系のものたちが次々に虚しく散ったのだ。いまだに残るのは水の長ポリプテルス家に従うもの等、唯ひと種族。
だが、あのおとなしく、万事のんびりしたひとびとに、いったい何ができるのか？　海そのもの、あるいは巨大な河川を動かしでもするというのならばともかく、ひとりの精霊に与えられた力はごく限定されている。
その証拠に水のものたちは、なんぴとたりとも立ち上がろうともしないではないか。
岩は割れない。
今年の祭りには、英雄が出ないのだ。
（こんなことではいけない。偉大なるミトラの神が、われらに失望するかもしれぬ）
（不吉だ。凶兆だ）

（何ものかの呪いが、われらに向けられているのではないか？）
幾人かがなにげなく発した無責任なつぶやきが、あたかも枯れ野に落ちた小さな種火のように、不安なひとびとの間にパッと広がった。
（バカなことを言うものではない！）
低く咎め窘めるものもあったが、囁きは種族の垣根を越えて伝わり、誰もが途方に暮れたような顔を見交わして、ざわざわと身動きした。
今こそ、英雄が望まれている。ほんとうに強いものが待たれている。
そのものはきっと、この時を狙っていたのだ。みなの熱狂を浴びることができそうな最後の最後の瞬間まで、いやらしくももったいぶって、われらを焦らして楽しんでいたのだ。だが、もう出て来てくれてもいいころではないか？
もう一度期待をこめて舞台のほうを見上げたひとびとは、壇の端に腰をおろして捨て鉢に足をぶらぶらさせるばかりの道化を見つけて、思わず舌打ちをした。
（あの陽気な男さえもが、絶望のあまり放心してしまったのか……！）
その時である。
「静まりなさい。いったいどうしたと言うのだ？」
天の上から、ひどく落ち着いた声がしたのは。
気の弱いものたちは心臓が止まりそうになった。威き神々のいずれかが、力無き我ら、役

立たずの精霊どもを罰したもうべく、いよいよ降臨したもうたかと、あわてて地面に頭を擦りつけた。

だが、素早く見上げたものは、すぐに納得して胸を撫で下ろした。台詞の主は、ドームの頂上に立っていたのである。

それは、踝までも届くかと思われる直な銀髪を夜風になぶらせ、額に飾った聖なる石よりもなお青い涼しげな瞳を穏やかに笑わせた、美しい青年であった。

「族長！」

「殿！」

「シフィルさま！」

この上もない安堵と敬愛の念のこもった叫びが、青き衣のひとびとの間から次々にあがった。よって、他のものたちもその素性を知った。

ルビスは心底疲れきっていた。

もはや、方角も距離もなにもわからない。さっきから何度も何度も同じところをぐるぐる回っているような気もする。緊張を維持することにもとっくに飽きて、すっかり投げ遣りな気持ちになっていた。行きあたりばったりに、ひとの隙間を縫ってだらだらと歩いてみたら、なんと、ドームの袖の裏のほうに通じてしまった。

来た道とは、およそ反対の方角である。もう一度広場をつっきるか、さもなければ、町の東側をうんと迂回する以外には、帰りつく方法はないのだった。迂回路のほうは、いたって不案内である。運河の街は、橋の位置を正しく知らなければ目的地になどけして辿りつけぬ迷路である。見通しもきかず、舟もない。このような月の暗い夜には、手もなく迷ってしまう可能性があった。朝にならなければ、歩けない。

(ああ……わたしにも羽根があったら良かったのに)

ルビスは、何もかもに、すっかりうんざりしてしまった。はやく、この窮屈な仮面を外したかった。いつもの粗末で質素な服に着替えて、ぐっすりと昼までも眠りたかった。

そうして、その耳に、ふいに騒ぎが届いたのだった。

(シフィルですって……?)

思わず立ち止まったルビスの頰は、いきいきと輝いた。

目をぱちぱちさせると、まぶたが腫れぼったく熱を持っているのがわかった。

(水の精霊たちの若長の、あのシフィル・ロリクタス・ポリプテルスのこと?

まあ、懐かしい!

それにしても、あの控え目……というより、軟弱なかたまでが御みずからおでましになるなんて、ほんとうに今夜はどうかしているわ!)

そのシフィルに向かって、こともあろうに、剝きだしの忿怒の声をあげたものがあった。
「わが君！」
「おお、アンジェリカス。そこにおったか」
「おったかではありませぬ。疾く、お戻りなされませ！」
眠り蛾の触覚のごとき優雅な眉を逆立てて怒るアンジェリカスは、その体形・面立ち・声色の、どれを取っても、自ら叱責している年若き主君によく似ていた。髪ばかりはシフィルほど長くはなく、肩にあふれてキラキラと渦巻いており、また、族長なる青年の悠揚迫らぬ表情に対し、こなたには、薄く張った川面の氷か、はたまた、ひと雨ごとに目まぐるしく流れを変えてみせる山のせせらぎのごとくかと思われるようなところがあった。並べて見れば、なるほど、このふたりは、ごく近い血縁ではあろうが、生まれつき定められた器が大きく違っているのだなと、見てとれぬものはなかった。
「世継ぎの御子を授かられし後のことならばまだしもとて……ここはあなたさまのお立場でおいでになられて宜しい場にはござりませぬぞ！　いと卑しきものたち、他族のものたちもおりまする。御身が汚れてはなりませぬ、どうか」
「すまぬがよく聞こえない」
たゆたうように微笑むと、シフィルはその両手を軽く上げて、何か物を投げるような動作

をした。
と、十の指先のそれぞれから、十も二十ものきらめく水糸が飛びだして、一面に広がったのだ。ドームのすぐ下にいたものたちは濡れるのではないかとあわてて首を引っこめたが、地面に届くころ、それは既にまろやかな霧となっていた。
魔法のヴェールの表面を、シフィルは、滑り台遊びをすることものように楽しげに降りて来て、アンジェリカスのすぐ傍らに立った。
「何か言うたか？　従兄どの」
「……いいえ！　別に。もう、ようございますっ！」
あたりのものはくすくす笑ったが、腕組みをしたアンジェリカスにギロリと睨まれて、あわてて黙った。
「では、言い訳を聞いてくれるがよかろう」
シフィルは広場の群衆にまっすぐに向き直って、静かにことばを続けた。
「わが城の青の水鏡には、イデーン国全体の様子を映すことができる。詳しくは言わぬが、このところある一点に、どうも何やら尋常ではない気配が見られる」
たちまちざわりと蠢く一同に、シフィルは片手を上げた。その静かな姿に、ひとびとは気圧されて口をつぐみ、おとなしく耳を欹てた。
「よってわたしは、せんに使者をたてた。岬の神殿サラマクセンシスにおわす陽の神官どのの、

湖の神殿ラルバタスにおられる月の巫女どのに、それぞれ疑問を書き送ったのだが、いらえはまだない。このような時期に年ゆずりの祭りがあろうとは、いささか気病みに思わぬでもなかった。が、みなが揃って心待ちにしておる事柄だ。単なる疑念や不安のために、けちをつけ、咎め立てするも酷であろうと、わが胸に秘めて言うを憚っておったのだ。されど、忍びて様子を見に来れば、案に違わずこの騒ぎではないか」

シフィルはあくまで穏やかな調子であり、声音も静かにやさしくあらげることはなかったが、そのことばには、骨身にこたえる厳しさがあった。群衆のほとんどは、恥じて、首をうなだれずにいられなかった。

「わたしは悲しく思う。なぜ、あのように手もなくうろたえるのだ。この大岩が割れぬと、実際誰かが困るとでも言うのか？　どうか、やくたいもないことに恐れ惑わないで欲しい。この程度のことに動ずるようでは、真の困難に直面した時にはなんとするのだ。みな、毅くあれ。安んじて、各々のつとめを果たせ」

水に属するものたちをはじめとして、多くの精霊たちは、感じ入ったようにうなずいた。その様子に、シフィルは晴ればれと微笑みながら納得して、引き下がろうとした。

そこに、遠くからしゃがれた声がかかったのだった。

「へっ。そういうおまえにも、割れねぇだろう！」

「誰かな？」

さすがに軽く眉をひそめたシフィルの視線の先を、精霊たちが揃って振り向いた。
のそりと立ち上がったのは、禍々しい五芒の徴を身につけた男である。クリプトカリオンを知っていたものたちは、いやな予感に身をすくめた。
(まずいな)
(ありゃあ、短気で強情な火の種族一門の中でも、最もやっかいな男だぞ!)
(水の長も、なめられたものよ!)
騒く群衆ごしにクリプトカリオンを見つめながら、シフィルはため息まじりに頭を振った。
銀の髪がさらさらと鳴った。
「稲妻の主どのか。そなたこそ、なぜ割ってみせてやらなかったのだ? これは皮肉で言うのではない。そなたの剛技をもってすれば、なんでもないことであろうに」
「ああ、できる。そんなことはわかっているから、試してみるまでもない。だが、おまえは違う。おまえは口ばっかりだ」
たちまち殺気だって飛びだそうとするアンジェリカスを、柔らかに、しかし鋭く、シフィルが止めた。口許は、しょうがないな、と言うように微笑んでいるが、美しい瞳はかすかに曇っている。
「そなた何故あってかくも意味のない喧嘩を売るのだ? われらには争う理由などないはずだ」

「理由がない？　何故だと？　笑わせるな！　俺は、おまえが、その女みてえな顔で、偉そうなことを言うのが気にくわねぇのだ。その価もねぇのに、五大家のひとつでございと踏ん反り返ってみせる青っちい連中がみな、笑止なのだ」
「わたしを怒らせようとしても無駄だぞ。知っておろう。大海パンガシアノドン・ギガスを溶かすには、魔峰オーブの熱をもってしてもまだ足りぬ」
　クリプトカリオンはあおっていた酒を、あたり一面に吹きだしてみせた。
「ぶわははははは、大きく出たな！　いかさま師めが」
「……どうか……どうかお許しを……！」
　再び引き止められたアンジェリカスは、食い縛った歯の間から、シフィルに懇願した。
「ならぬ。捨て置け」
「では、せめて、せめて、ひとこと言わせてくださいませ！」
「何をだ？」
　戸惑うシフィルが力を緩めた隙に、アンジェリカスは機敏に舞台を飛び降りた。手近に控えていた青の衣の若者たちがすかさず集まり、それぞれの身をもってやぐらとなるのに、身軽に飛び上がると、大声で呼ばわった。
「こころあらば聞いてくれ！　森の民よ、大地の精霊よ、金銀鉱物を守りし者たちよ。今宵は祭り、年ゆずりの炎を囲む時ではないか。そう、炎だ！　われらは控えて、わが水の種族

の偉大なる力を発揮することを堪えた。なぜなら、われらのうちの誰かが、その岩を割らんと欲して天地の種々の水を操れば、やがては聖なる炎が弱まり、火の一族は面目を失することになるからだ」

「なにぃっ」

「そのくらいのことで、俺たちの火が消えるものかっ!!」

鋭い野次が火つぶてとなって飛んで来たが、アンジェリカスは肩のケープを翻して避け、ひるまなかった。

「情をかけられていることも知らず、いい気になるにも程があろう。慎ましき心根を持つものたちに乗じて、手前勝手のしたい放題。廉恥心を欠いたその驕り。野鼬のごとき蛮民めが！　盗っ人猛々しいとは、まさに貴様ら火の一族のことだあっ！」

「こ……この野郎っ」

「おい鼬には罪はあるまい、貴公、われら大地の種族までもバカにするのならば、許さぬぞ！」

「よおし、そのチャラチャラした頭を燃やしてやるべっ」

「来るか」

「行くぞ」

「望むところだ」

「ええい、止めんか！」

シフィルの発した裂帛の気合いに、女たちなどは震え上がったが、既に憤怒に身を投じ攻撃の間合いに入っていたものたちの、上った血に固く塞がった耳には、さほどの効果は得られなかった。

広場じゅうがいさかうひとびとであふれ返った。あちらに雹が降り注いだかと思うと、こちらでは鬼火が湧き上がる。水蛇と火蜥蜴が睨み合い、吹雪が唸り火柱が踊った。水と火の争いは、たちまち、嵐を呼び、竜巻を起こし、おごそかなる年ゆずりの焚き火の周囲を囲んだ善良なるひとびとをも巻きこんで、荒れ狂った。喧嘩早くないものたち、無関係であると思い定めた他種族のものたちは、はじめ当惑し、なんとかこの場を逃げようとした。が、とばっちりを防ぐためだけにも、やがては、否応なしに自らの技をもって応戦せずにいられぬ騒ぎになって来た。誇りのために、あるいは恐怖のために、みなが戦った。男も女も、おとなもこどもも、必死で力を振り絞った。狂気に駆られて襲いかかってくるものたちを単に避けているのか、自らを守るため手当たり次第に攻撃をしかけているのか、あるいは、暴力的な衝動そのものに憑かれてしまったか、みな、興奮のあまり、次第にわけがわからなくなった。この機に乗じて日ごろの恨みを晴らそうとするものさえもあったので、誰ひとり、無事ですまされる保証はなかった。

「静まれ！　ええい、静まれ！」

「わははは、よーし、行けっ。暴れろ暴れろっ！」

シフィルの必死の声に、どこにいるやら、クリプトカリオンの危険な高笑いが重なった。

（ああ……わたしはこのようなことを恐れていたのに……！）

噛みしめる青い唇から、ひと筋の血が流れた。

「燃やせ、燃やせ！　何もかも焼き尽くしてしまえ。俺たちの力を、見せてやるのだ！」

どこかにボッとまた稲妻が落ちた。恐れ戦いて逃げ惑う無辜のひとびとをからかうように、あちらこちらに火が踊って壁を作り、邪魔をした。こどもの泣く声、傷ついた者のうめき、そして、いやな匂いが広場に充満して来た。

（……ちょこざいな……火の輩め……！）

シフィルはカッと瞳を上げた。

（思い上がりも甚だしいクリプトカリオン！　誰かがその傲慢な炎を消し止めてやらねば、おまえはますます増長し、このイデーン全体の脅威ともなろう。

誰かが……

では、わたしが……！）

青い瞳が冬の月のように冷たく煌めいたかと思うと、銀の髪がざわざわとのたうちながら立ち上がり、薄い衣が吹いてもいない風にはためいた。シフィルの気合いは、ちょうど、大海の最も深いところにひそんだ大海蛇が天を駆け上がるかのような姿になって、まばゆく輝



いた。
「雨よ……!!」
たちまち、雲が走り、風が巻いた。星も覆われ、あたりがとっぷりと暗くなった。空の水盆をひっくり返したかのような凄まじい勢いで降り注ぎだした強烈な土砂降りに、争っていたひとびとは、みな打たれてハッと我にかえった。ひとを愚弄するように跳梁していたそこかしこの嫌らしい炎は、たちまち弱って消えてしまい、ぶすぶすとみじめに燻ったが。
「……ああ、火が……」
「年ゆずりの炎が……!」
篠つく雨に、尊き焚き火までもが、今にも生命を消されかけているのだった……!

7

「……よくも……!」
ドームの礎石に隠れるようにして事態から逃れていたルビスは、この時はじめて激しい怒りを感じて、ざりざりと歯噛みした。
(シフィルの奴め!
なんだかんだ言って、せっかくの祭りを台なしにしたのは自分じゃあないの。子飼いのア

ンジェリカスさえ、ちゃんと押さえておくことができなかった。

あいつはバカだ。無能だ。顔がいいばかりの男女だ……！

こんな雨なんか降らせて、自分が一番力があるようなふりをしてみせやがって、あの罰当たり野郎めが……！）

怒りに駆られたものだとはいえ、その思いは、あまりにも淑女らしくなかったので、ルビスはひとり首をすくめた。

（こんなわたしを母が知ったら、どう思うだろう）

（いいや。

たとえおかあさまだって、ちゃらちゃらした青服のやつらに、大事な祭りの炎が蹂躙されたら、黙ってみていろとはおっしゃるまい！

シフィルは腰抜けだ。クリプトの言う通り、口達者の臆病者だ。

あんなやつ、一番なんかじゃない。一番であるものか。

他の五大家の家長たちがいる。みんな、あいつみたいに、もったいぶって文句をつけたり、ずうずうしくでしゃばって来ないだけだ。

そうだ。ここにだって、わたしがいる！

わたしはまだ長じゃないけど、そのわたしだって、本気になったなら、あんな奴よりも絶対に強い。こんな霧雨ごとき、たちまち吹き飛ばしてみせる！

あぁ……でも。

でも……!)

ルビスは拳を開いたり閉じたりした。掌には、既に、半月型の跡がいくつも、くっきりとついていた。

(行ってはなりません!

今はまずい。こんなところでおまえが姿を見せたならば、取り返しのつかないことになりますよ!)

母の諭す姿が、まぶたをちらつく。ナスタチウムの丘にあるカリクティス家の城砦の、重々しくはあるが質素な執務室の赤い天鵞絨の家紋の旗の前に立って、心配そうに眉をひそめながらも、母はかすかに微笑んでいる。

(落ち着いて、よく考えて。けして激情に身を任せてはならない。娘なのだから、いつでも花のように笑っていなければいけない)

(ああ、じゃあ、誰か代わりになんとかして!)

ルビスはいらいらと身もだえした。じっとり汗をかいた掌をアリナの服にこすりつけて、焚き火を、群衆の興奮を、舞台上のシフィルを見守った。

(クリプトカリオン、いったい何をしてるのよ?

早くあいつをやっつけるんだ……!)

「うっ！」
右の脛に急に痛みと重みを感じ、振り向いてルビスはギョッとした。濡れそぼってぺしゃりと痩せてしまった砂漠鼠が一匹、ルビスの革のブーツの上に取りついて、巨大な二本の前歯を剝きだして唸っているのだ。本来、攻撃されそうな時には砂地を掘って隠れるほどの臆病な性質を持つ生き物が、この炎にこの雨に動転して、薄闇の中らんらんと輝く金色の瞳に狂気を宿し、今にも再びルビスの柔肌を傷つけんと企てているのであった。
（近くにこやつの飼い主がいるのに違いない、今しがた自分が匂わせてしまった殺気に反応して、わけもわからぬまま、主人を守ろうとして、飛びかかって来たのかもしれない）
とは思ったが、ルビスの興奮もまた、長く抑えつけられて憤慨し、沸騰点を待っていた。
「畏れを知るがいい、身の程知らずめっ！」
（このわたしのからだに触れるとは……！）
蹴り上げたブーツから軽々と鼠が飛んだ。大事なマントを放りだして、迸る気合いのまま振り下ろした腕から、鋭い電雷が闇を裂いて走った。打たれた鼠の物悲しい悲鳴が、やがてゆっくりと耳に届くと、ルビスはニタリと微笑した。緋の唇が、この上もなく愉快そうなかたちに広がった。
広場の敷石の間から生えてでていたひそやかな草花たちが、彼女のまわりに急激に生じた熱波に薙ぎ倒されるようにして縮こまり、たちまちぼっと炎上した。

尋常ではない気配に、いさかいを中断してこちらを振り向いた何人かの目に、驚愕が走った。

燃え立つ地面のその上に、少女がひとり立っていた。猛々しい闇豹の仮面から紅蓮に輝くふたつの星をのぞかせ、血のように赤い衣裳を翩翻と風になぶらせ、華奢なからだの全体から太陽のごとき光芒を幾筋も立ち上らせながら、少女は、ゆらりと歩きだした。

激しい雨も彼女には全く当たらなかった。触れる前に、その熱にあって蒸気となり、宙にかき消えてしまうのだ。

見たものは、ヒッと喉の奥で叫んで、へたりこんだ。今の今まで争っていたもの同士が、思わず抱きあって震えずにいられなかった。

（おのれ、水蟲め……！

年ゆずりの尊き炎、泥足にて踏みにじるここな奸物めが！

天なる神々もご照覧。わが名わが命に賭けても、おぬしの一族、根絶やしにしてくれん!!）

「シフィル！　引け！　雨を納めよ!!」

乱暴にも五大家のひとつの長ともあろうものを呼び捨てにし、赤い炎の尾を彗星のように引きながら、まっすぐ向かって来る仮面の少女に、シフィルは切れ長の瞳がまん丸になるほど目を開いた。

「……ル……!?」

「あっ！」

遠巻きに見ていたものたちには、何が起こったのかわからなかった。

くぐもった音をたてて大地が盛り上がり、彼の大岩がふくれあがって、ついに爆発したのだ！

そのあまりの勢いに、近くにいたものはみな吹き飛ばされた。何かにしがみついて辛うじて残ったものたちも、土煙の厚い幕がたちこめ、次に、割れた敷石やら湿った土砂やらがどさどさと降り注ぐので、顔をあげることもできなかった。

8

ルビスはもがいた。

誰かが、今しもシフィルのローブに手が届きそうだったルビスのからだを、横ざまにさらい、そのまま抱きすくめるようにして揺れる地面を駆け抜け、連れ去ったのだ。地に放りだされた時、ルビスは腰を打って、痛みのあまり気が遠くなった。轟音の衝撃に鼓膜がおかしくなった。覆い被さられているのを知った時には、娘らしい恐怖のあまり、からだが凍った。

が、そのものは、彼女になにをしようというのでもなく、ただ降って来る大量の土くれから、身を守ってくれたのだった。
安堵しながら、ルビスは薄く目を開いた。
見れば、それは、黒きマントに衣裳こそ隠しているが、あの道化者の司会役ではないか。突拍子もない化粧が、汗に溶けてひどい斑になっている。
ルビスが気づいたのを知ると、彼は静かに笑って、言った。
「辛いだろうが、今は堪えなさい。彼と戦ってはならない」
「何を言う!」
ルビスは上体を起こそうとして、振盪を起こした。歯を喰い縛ってそれに耐え、心配そうに差し出す相手の手を振り払って、噛みつかんばかりに言った。
「離せ! 触れるな! おまえは水の味方だろう!」
「俺が?」
薄く笑う道化に、ルビスの胸はサッと冷えた。いやな予感がした。
「何者……?」
目はまだ霞んでいる。改めて尋ねる声が震えてしまうのを、どうしようもない。
「おまえ、ただものではないな? あのような岩を運び入れたとは……まさか、まさか、天の……?」

「違う」
道化はおどろに溶けた化粧の口許を歪めて笑い、身を起こして、いぶかるルビスをもゆっくりと座り直させてくれた。その手が差し出したものは、今は土にまみれたルビスのマントだった。なんとか視界をはっきりさせようとして擦るルビスの目の前に、彼はマントの衿飾りの真紅の宝石飾りを示してみせた。
「これは、カリクティス家に伝わる『火炎孔雀の涙』じゃあないか。こんなものをぶら下げて歩いてたのに、誰もきみに気がつかなかったのかい、ルビス？」
（わたしを知っている……！）
ゾッとしてルビスは髪が逆立った。
「いったいどうしたんだい。きみとシフィルが本気で戦ったら、みんな巻きこまれて死んでしまいかねないじゃないか」
「…………」
「だいたい、なぜ、きみがこんなところにいる。確か禁じられているんじゃなかったかな。まあ、もっとも、きみは、いにしえより尊ばれし掟だからって、諾々と縛られているような女の子じゃあないけどね」
どこか皮肉を含みながらも、親しそうな言い方に、ルビスはひっかかった。
（誰だろう、うちの一族じゃないと思うんだけど）

(みんな、この男の言うとおりだ。カッとなって、とんでもないことになるところだったわ。うまく止めてもらって、ほんとうに良かった)

(でも……いったい誰かしら。この声には、なんとなく覚えがあるような気もするけど……)

「そろそろ、そのうっとおしい仮面を取って、素顔をみせてくれないかな、ルビス? そのままじゃあ暑いだろう」

「……でも……」

「きみの正体は既にわかっているからといって、口外はしないよ。誓う」

重たく息をつきながら、ルビスは観念してうなずいた。

他言するかどうかなど、問題ではなかった。何か、理屈のつけられない思いに、この男には、ぜひ素顔を見せなくてはならないような気がしたのだ。

ルビスははじめ、自分でそれを取ろうとして、やめた。それは重すぎて、アリナとふたり苦労してやっと身につけたのだ。ひとりで外そうとすれば、首の骨をおかしくしかねない。

ルビスが肩の力を抜いておとなしく立っていると、道化は、両手を頑丈な闇豹の仮面にかけ、留め具を外して、楽々と持ち上げた。

久々に爽やかな外気に頬を撫でられて、思わずうっとりするルビスの肩に、薔薇色の髪が

炎の滝のようにこぼれ落ちた。

「……きれいだ……相変わらず、いや、前よりもいっそう美しくなったね」

その声にこめられた、懐かしさとも寂しさともつかぬ不思議な響きに、ルビスは恐る恐るまつげをあげ、そっと相手の表情を窺ってみた。ふざけた化粧の奥の素顔をなんとか見極めようと、瞳をさまよわせた。

そんなルビスをまっすぐにみつめ返しながら、道化は微笑んだ。すると、何とも言いようのない感情が、ルビスの胸に生まれたのだ。

（ああ……まさか……？

でも。

だとしたら。

ならば、今の土砂も、あの瞳も説明がつくけど……）

ドキドキと不規則に打ちだした心臓に急かされて、切羽詰まったように彼女は囁いた。

「ディ……ディアルト!?　あなたね？　あなたなのね？」

秘められた名を口にしてしまうと、いともあっけなく涙がこぼれた。

絞められてでもいるかのように苦しい喉許を、ルビスは押さえた。そうしていなければ、彼の首に腕を投げかけ、その頬をやさしく愛撫したい気持ちを、堪えられなくなりそうだったから。

「ああ、夢かしら。なんて長いこと逢えなかったんでしょう？　あなたはもういなくなってしまったのだと思っていた。あちらに……その……地上に、行ってしまったのだと聞かされたのよ！　イデーンにいたのなら、どうしてこっそり訪ねて来てくれなかったの。なぜ便りさえもくださらなかったの……！」
「…………」
「……違うの？　あなたじゃないの？」
「…………」
「ああ！」
（他人に喋ってしまったのだろうか？
わたしがディアルトと親しかったことを、知られてしまったの……？）
石像のように表情を凍らせて黙りこくる道化に、ふいに心底そら恐ろしくなって、ルビスは胸いっぱいに苦しい息を吸いこんだ。そのままならば、かよわい花の妖精たちのように、悲鳴をあげていただろう。
その赤い唇を、大きな力強い掌が覆った。
「ルビス、ルビス、落ち着け。俺だ、確かに俺だ。いい子だから、叫ぶんじゃない！」
「う」
「頼むから、怒るな。火傷しちまう」


MITSUMI

残った片腕だけでも、男は力強かった。抵抗する隙もないほどきつく抱きすくめられ、口を塞がれた苦しさに、ルビスは赤い瞳に挑戦的な光を踊らせて、きっちりと男を見上げた。

そのまなざしに出会うと、彼は急に、ああ、と低く唸るように言って、腕にまたいっそうの力をこめた。そうして息もつけなくなった彼女のまぶたに、鼻に、やさしい口づけの雨を降らせたのである。

その唇のたどった部分には、まさしく火がつきそうだった。地面が回り、天地が混乱した。クリプトカリオンとアリナのみだらな接吻を、ルビスは思いだした。これは唇と唇の接吻でもないのに、あれよりも数段素晴らしいに違いなく、彼女はそれを得意に思った。男にこんな口づけを受けることのできる自分を、幸福に、自慢に、思った。

めくるめく陶酔と満足感に、とうとうルビスがぐったりすると、ようやく彼は掌を外し、腕の力を緩めた。

ルビスは言った。

「思いだしたわ。あなたは、意地悪で、皮肉屋で、しかも誰よりもいやらしい恥知らずだったわね」

口調は平気を装っていたが、声はしゃがれて、低くなってしまっていた。

「生まれが生まれだから無理もないって、みんな我慢してたけど、内心、あなたのことを軽蔑しないひとはいなかったわ。みんな嘘つきで、ことなかれ主義だから。あなたのいやしさ

も、見てみぬふりしてたわ」
「そうして、俺はきみのそのこどもっぽい正義感と、下品なほどの率直さが、たまらなく好きなんだ」
道化はニヤリと笑った。ルビスの憎まれ口を、平然と面白がっているのだった。
「みんな、なかなかほんとうの気持ちを言わないからな。焦れったくってしょうがない。いや、嬉しいよ。今でもきみがバカでお転婆で口が悪くて、ほんとうに良かったと思っているんだよ、ルビス。もうじき族長さまにおなりなのだから、すっかりお淑やかになっちまってるんじゃないかと、俺はひどく心配してたんだ」
「まぁ……」
「きみが万一こどものできた雪猫みたいにおとなしぶって媚を売るような女になっちまったら、イデーンはもっとも偉大なじゃじゃ馬記録を更新するのにあと八千年は待たなきゃならないだろうからな」
「おおげさなひとね！」
ルビスは声をたてて笑い、道化の首ねっこにかじりついた。
「ああ、ディアルト、ディアルト。逢えて嬉しいわ！」
「じゃあ、きみもまだ俺を愛してるって言うのかい？　ふたりで家を捨て、道ならぬ恋に落ちる決心でもついたのか」

ルビスは一瞬びくりと震えて足を下ろしたが、間近にディアルトの道化顔を見とると、思わずプッと吹きだした。
「止してよ。そんな顔で言われたんじゃ、まるで侮辱されてるみたい」
「顔のことは勘弁してくれよ。わが魂にいつわりはない。……いや、いつもはいつわりばかりだが、きみに対する気持ちばかりはほんとうだ。華麗なるルビスよ、そなたがあくまで世間体を煩ってわが望みに抗うならば、ただ力ずくで奪うまで」
道化は優雅に会釈をし、ぴくぴく冗談めかして眉を動かしてみせた。
ルビスは憤慨した顔を作ろうとしたが、唇が言うことを聞かなかった。どうしても笑いの形になってしまうのだ。
「お覚悟めされい、汚れなきおとめごよ。わが欲望はそなたの火よりもなお熱く、わが決心はわが種族の最も堅固なる巌よりもまだ固きゆえ」
「とってもいい気持ちだけど、どうせならばねぇ、お化粧を落としてから、もう一度はじめからやり直してくれないかしら」
「俺の素顔が見たいなら、舐めるがいい。犬のようにぺろぺろやれば、取れるぞ」
「まあ……いやらしい！」
「何を言う。きみは、キスされたくってたまらないって顔をしてるぜ。そうもったいぶらずに、たまには自分から努力したらどうなんだ」

ルビスはふくれたが、その前に、確かに自分の唇がいかにも薄く開かれ、まつげが軽く伏せられ、顔全体が上向きになって、いかにも接吻を待つ風情の顔になっていたことを自覚したので、ひどく頬が熱かった。

「……意地悪……」

ふうっと息をついて、ルビスは頭を振った。

(そうだ。わたしは彼が好きだ。どうしようもなく好きだ)

(こんな変な化粧をしていたからといって、どうして彼を彼とすぐに気づかなかったのだろう?)

ディアルトのまつげの濃い黒い瞳と癖のない黒髪、ほんのすこしだけ張った顎と、異国風のすっきりと高い鼻の形を、ルビスは思い描いた。

(そうだ。ディアルトの顔を思いだそうとする時、わたしの頭に浮かんだのは、いつもやさしい笑い顔だった。穏やかで、温かくて、はにかみ屋で。少し田舎臭いけれど、とても頼もしい彼の顔。見てるだけで、もう何も心配いらないと、信じられる顔)

(もう二度と逢えないと思っていても、たびたび彼の夢を見たっけ。

夢の中で、わたしは彼をどこまでもどこまでも追いかけたわ。みつけられなくて、不安になって、こどものように泣いたわ。

その彼が、今ここに……わたしの前にいる。

でも……ああ、でも！）

「寒いのか？」

ゾクリと震えるルビスに気づいて、ディアルトは素早く彼女の真紅のマントを着せかけ、きちんと喉許の紋章の宝石で留めつけてくれた。

（ディアルトはわたしのことをよくわかっている。わたしのして欲しいことに誰よりも鋭く気づいて、可能ならばすぐにやさしく叶えてくれる。

彼もわたしを愛しているのだ。

他の誰よりも、彼といる時わたしは幸福になれるのだ。

でも……でも、でも！）

「もう夜が明ける。宿はどこなの？　送って行こう。舟が隠してあるんだ」

うなずきながら、ルビスは胸いっぱいに広がる黒い気持ちに、固く唇を戒めていた。

（だめ。絶対に、だめよ、ルビス。

おまえは間もなく嫁がなくてはならないのよ。スクレロパゲスであるかそうでないかはともかく、いずれ、わが炎の種族の内から婿を取ることに決まっているのよ。

それに、やがては長になるべき身、汚れを祓い、迷いをなくして、誰はばかるところのない身でいなくてはならないんだ。

こどものころとは違うわ。もう、他種族のものとなど、あまり親しくしてはいけない。あ

んなふうに接吻させてはいけないし、ともだちづきあいだって、慎まなくてはならないわ。
なんと言っても、彼は、誰よりも卑しい！
大地の種族コリドラス家の直系の血を引きながら、彼を生んだおかあさまは、このイデーンの娘ではない。
塵芥のごとき、地上の人間の女なのだから……!!）

そんなルビスのこころも知らず、ディアルトは気軽に彼女の肩を抱き寄せて、歩きだしている。振り払わなくてはならないと思いながら、その手がルビスには嬉しかった。その手のぬくもりを、失いたくはなかった。

（ああ……どうして戻って来たの……！
どうしてわたしのこころを、放っておいてくれなかったの……！）

身悶えしたいような思いを秘めて、ルビスはただそっとまつげを伏せ、愛する男の触れている肩の一点から圧倒的な幸福感がからだじゅうに広がりその熱い血をいっそう沸騰させるのを感じながら、夜明けの街を歩いたのだった……。

9

カリクティス家別邸の周囲に高々と張り巡らされた煉瓦塀の一部が見えるところまで来る

と、ルビスは舟を降りた。その真紅のマントの後ろ姿を見送りながら、ディアルト・ケントロピーゲは、舟の上にじっと立って待った。が、ルビスは振り返らなかった。結局、ただの一度も振り返らなかった。そうしてしまいに朝靄に溶けるようにして、見えなくなってしまった。

（相変わらず気が強いな）

舫い綱を解きながら、ディアルトは小さく笑った。

（でもルビス、きみに逢えてよかった。それが今日のなによりの収穫。わざわざ山越えをして来た甲斐があったよ）

ひとりになったディアルトは静かに慎重に舟を進めた。角ごとに舟を寄せて先を窺ってみる。早朝の街はいまだひっそりと眠りこみ、誰ひとり彼に気づくものはないようであった。入り組んだ運河のところどころに朝の日がさしこみ、小波に金色の縁取りをしてはにぎやかしく揺れた。彼の小舟の跡に生ずる緩やかな波紋も、つぶやくように輝いては消えた。

とある橋の下方まで来ると、ディアルトは舟を止めた。水際の叢の暗がりを探って、布袋を取りだす。中には、頑丈な作りではあるが洒落っ気ひとつない風変わりな衣服と、革紐で腰に吊るように作られた小さな短剣が隠してあるのだった。

（どうやら見つからなかったらしい）

彼は手早く道化衣裳を脱ぎ、石の重しを利用して水に沈め、着慣れた服装に改めた。運河

の水で顔や髪を洗い、化粧が完全に落ちたかどうか短剣を抜いて刃鏡に確かめた。満足すると、彼は剣を佩き布袋を背負い、もう一度油断なくあたりを窺ってから、音もなく運河の石垣を登っていった。

そこは使われなくなって久しい大きな蔵の裏手の庭で、朽ちるまま放置された道具の間に腰までもある草が茂って覆い尽くしていた。ひび割れた建物の壁の遥か彼方に、遠く連なるヴェリダヌス山脈の輪郭が朧に霞んで見えていた。山々はちょうど寝そべった竜の背のような恰好に続き、その向こうに、雲を突いて聳えるかの魔峰オーブを隠しているのであった。

ディアルトは、なおも音をさせぬよう細心の注意をしたまま、重い蔵の戸を開けた。古びた干し草の匂いのする暗闇の中で、何か大きなものが身動きをする気配がした。かと思うと、蔵の真ん中あたりに、突然、ふたつ並んだ灯りが生じ、警戒をこめて素早く点滅した。

「しっ、俺だ。騒ぐなよ」

言いながらディアルトは、仕掛け綱を引き、ゆっくりと天窓を開いた。ぎい、と錆びた音を伴って、窓は僅かずつ空に開いた。浮かぶ埃に光の帯となった朝の光が、やがて、七色にきらめく巨大な翼を、たくましい爪足を、そして賢そうに瞬く瞳を彩った。それは鳥だった。頭は小さく、首は細く、尾羽根の一本一本がひとの背丈よりもなおたっぷりと長い、美しい鳥であった。

伝説の不死鳥ラーミアは、ディアルトを認めると、かすかにはしゃぐような身振りをした。

彼がその首に腕を投げかけるようにして頭やからだを満遍なく撫でてやると、鳥は干し草の上におとなしく座ったまま、くうくう、と甘え声に喉を鳴らした。

「待ちくたびれたか。悪かったな、遅くなって」

鳥の顔にかかった干し草を取ってやりながら、ディアルトは微笑んだ。

「さぁ帰ろう。お爺いがきっとおカンムリだ」

「ちくしょう……もう少しだったのに！」

悔しげにテーブルを叩いたのはエンドリケリィ。ラプラティーやビタエニアータが赤ら顔でうなずく。火狼の精や、煙突の守り主の顔も見える。火の一族の若者たちの溜まり場のひとつである終夜営業の酒場であった。彼等は騒乱の広場からそれぞれに退散し、誰が決めたわけでもないままに、次第にこの場に集まって来ていたのだった。

はや朝の日がさしはじめているというのに、未練たらしく酒瓶を放さぬ輩がほとんどだったが、いびきをかいているものも少なくなかった。ルビスの従妹である幼いカラ・セミアクイルスは、隅の席に丸くなって眠りこんでいた。その顔は、きつい化粧を落としていないのに、今はなおあどけなくこどもっぽく見えるのだった。

「だいたいよ、あんなとこまでしゃしゃり出て来やがるなんて……シフィルの奴、当主の立場ってもんを考えてねぇのかよ！」

「なにしろ若僧だからなぁ」
「よせよせ。あいつの悪口言うと、女どもに殺されるぞ」
「しかし、その御当主さまだって、うちの大将にはきりきり舞いしてたろ。いやー、気持ち良かった」
「まったく！」
「なんたって火の一族が一番よ。イデーンきっての勇者揃いときたもんだ！　ねぇ」
「おっと。そーいや、たいしょーはどこだ？」
「あっちあっち」
「およ」
男たちが首を向けた先に、クリプトカリオンがいた。汚れた窓の外を見つめながら、眉間に皺を寄せて、黙ってなにか考えているらしく見えた。その片手の中には酒があったが、稲妻の主には全く動く気配がなかった。酔いの回っている様子はまして窺えなかったのである。
「なんだ？」
「悩んじゃって」
「あれで、彼も難しい年ごろだからなぁ」
「ぶっ」
酔いにまかせてみなそれぞれ勝手なことを言ったが、その実また心配そうに、慕っている

五芒星を持つ男の憂える横顔を窺うのだった。
「ちっ」
　とうとう立ち上がったのは、いつでも腰の軽いエンドリケリィである。みなが止めるのを手で払って、まっすぐ稲妻の主のテーブルに歩いて行った。
「ねーねーねー、惜しかったっすね？」
　陽気に携えた酒瓶を勧める仕種をしながら、クリプトカリオンの向かい側に座る。クリプトカリオンは目を細めながら、こちらを向いた。そのために、五芒星の徽が露になった。
「何か言ったか？」
　稲妻の主の声の地獄の底から響いてくるような無表情さに、エンドリケリィは早速後悔をしたが、ここまで来ては引き下がれない。持ち前の愛想で、早口に告げる。
「いえね、今あっちでも言ってたんですけど。水の奴らってばもともと俺たちを僻んでたんじゃないんですかねぇ？　なんたって、年ゆずりの炎は祭りの花だ。いいとこ俺たち火の種族に持ってかれて、内心チクショウってなもんで、あんな騒ぎになったんじゃないっすか。いくら祭りでも、当主自らが、まさかにでしゃばっ……」
　エンドリケリィはあわてて残りのせりふを飲みこんだ。なぜか突然にクリプトカリオンが、唇を割り、にたりと不気味に笑ったからである。
「な……なんです？」

「いや、たいしたことじゃない」
（たいしたことじゃあないがよ、なぁルビス）
途方にくれるエンドリケリィから、また窓の外に視線を移しながら、クリプトカリオンはひとり笑った。
（どう考えても、あれは、おまえだった。確かに、おまえだったな）
（いったい、なんだって祭りになんか来やがったんだろう。おまけに、あんなことぐらいで熱くなって、小娘の分際でほいほい出て来やがるなんて……なんて無茶なんだ！
あれが俺たちの次期当主さまか。こいつは当分退屈しねぇな。まったく、ハラハラさせてくれそうだぜ……）
にやにやし続けるクリプトカリオンに、エンドリケリィは気味が悪くなった。肩をすくめて、その場を辞そうとした、その時である。
「……ん……？」
稲妻の主が、急に顔をあげたのである。
「えっ？」
「いや……いま、やけにでかい鳥が見えたと思ったが、見なかったか？」
エンドリケリィは窓の染みを擦ってみたが、目を惹くようなものは何も見つけられなかった。変わりばえのしないランデールの街がただ眠っているだけ、夜の店の立ち並ぶこのあた

りでは、それはあまり美しいとは言いがたい様相を呈していた。

「鳥、ですかぁ？」

エンドリケリィは眉尻を下げて、大袈裟に肩をすくめた。

「やれやれ、そいつは、そんなに美味そうだったんですかい？」

「いや……そうではないんだが……うーむ。美味そうと言えば、なんだか腹が減ったな。ひとつ飯でも探して来ないか」

「はいはいはいっ、そうこなくっちゃ！」

はしゃぐエンドリケリィに革財布を放ってやりながら、クリプトカリオンはもう一度、曇った窓を振り向いた。

幼馴染みのいる煉瓦の館が眼下に見えて来た。ディアルトはゆっくりと鳥を旋回させ、その家の窓をうかがったが、どこもみな鎧戸が閉まっていた。

「つれないな、ルビス」

見下ろしながら、ディアルトはつぶやいた。

「確か、俺の花嫁になるんだとだだを捏ねた日もあったような気がするが……とっくに忘れてしまったのだろうな、おまえは」

「くう！」

非難するように、ラーミアが鳴いた。
「ああ、わかったわかった。急ぐよ」
頸(くび)を上げ、ひときわ強く羽ばたくと、大鳥は山の彼方の空を目指して、まっすぐに飛んで行った。

第二章　高き血の五大家

1

祭りがまだたけなわであったころ、ランデールよりつのぶえ座の方角に二十里あまり離れたナスタチウムの丘の麓附近に、星闇をついて密かに疾走する蒼毛の一騎があった。闇の使いのごとき妖馬の鞍上に座した乗り手もまた、最も暗き影よりもなお黒い装束に頭からつま先まですっぽりとくるまっていたので、彼等の姿は容易く闇に溶けた。よく夜目のきく獣たちさえも、何が駆け抜けたか、しかとは知りえなかった。ただ、夜を切り取る一陣の風が吹き抜けたかと見るほどの素早さであった。

木立を縫い、岩肌の滑りやすいところを避けて、黒き人馬は、ぐんぐんと丘を登って行った。

覚束ない足場に躊躇う馬を励ますように、時折短く気合いを発するほかは、乗り手はずっ

と無言だった。枯れきった小枝を踏みつけるぴしりという音以外に、深夜の森の、訪う者の耳を打つほどの静けさをかすかに騒がせたのは、躍動する馬のあえぎと、蹄、轡、輪拍、それに鞍を成す革と革とが擦れ合ってきしるぎしぎしと言う音等の、密やかな合奏ばかりであった。

やがて切り立った岩と岩に挟まれた天然の回廊が、星灯りに霞んでおぼろげに見えてきた。乗り手はその中に、注意深く馬を歩み入れた。細い通路はぐるりと回ってきざはしになり、天蓋が生じて迷路となり、さらに続く。今や星灯りとて届かず、前後共に鼻をつままれてもわからぬほどの漆黒の闇であったが、妖馬の瞳には行く手が見えているのか、あるいは手綱裁きがそれほどに鮮やかであるのか、騎馬は平然と歩を進める。空気がかすかにぬくもりを持ちはじめたのを馭するものが知るころ、馬は耳を小さくぴくりとさせた。乗り手は無言のままに馬の背を降り、その鼻面を安心させるように撫でてやりながら、引いて進んだ。

幾たびか角を折れると、迷宮は、唐突に終焉を迎えた。

あたりは繋がれた火竜の発する光熱に明々と照らされ、過度に温められた蒸気風呂のように蒸し暑かった。それは、既に到着し、手近な岩の塊に豪華な食器を並べて待っていた密談相手の乗り物であった。

「すみません。遅れました」

と、馬を連れた者は言った。

「いや、わたしが早すぎたのだ」

「失礼します」

火竜から遠く離れた位置に轡を外して馬を繋ぎ、しゃがみこんで脚に傷がないのをよく確かめてから、遅れた男は、ようやく自分の被りものを外し、無雑作にローブを脱いだ。

下は、腰布と黒い革細工の武具を纏ったばかりの裸体であった。顎や頬の骨があまり目立たず、露花稟の実のごとき漆黒の瞳が表情豊かなので、彼は、衣をつけているうちには、どちらかというとあどけなく見えた。が、裸になってみると、その筋肉は均等によく締まり、歩むにつれてひとつひとつが見分けられるほどであった。

「見苦しいものをお見せしてまことに申し訳ないが、ここは俺には暑すぎるのです」

「構わぬ。なんなら、そやつを、今少し遠ざけようか」

「竜のことですか？」

凛々しい眉の目立つ陽気な横顔が、自分のことが話題になっていると知ってことさらシュウシュウ唸る竜の発した赤みを帯びた光に照らされて、無邪気に笑った。

「いや、結構です。このような珍しい物を間近に見ることができるよい機会だ。観賞させていただきましょう」

待っていた男は表情を変えずにうなずくと、豪華な宝石飾りを施したゴブレットを持ち上げた。

「火の酒だ。これも珍しかろう」
「いただきましょう」
男たちは腕を絡めて酒を汲み交わした。それは、イデーンでは、結束を誓い、互いの裏切りやふたごころを禁ずる、無言の呪なのだった。
先に来ていた男は火の種族の現族長、グァモン・セミアクィルス・カリクティス、後から来た男は地の精霊たちの頭、ダトニオイデス・バコバ・コリドラス。
炎と大地が、なぜか、ここに密かに手を握っていたのである……。
グァモンはダトニオイデスよりも十ばかり上、種族の特徴である赤い髪の鬢のあたりにかすかに白いものの混じった年ごろであった。五大家の古き血を色濃くひいたものが誰しもそうであるように、彼もまた整った顔立ちの男だった。同族の他のものに比べると、ことさらに背が高く、手足も長い。若かりしころはさぞや甘い美青年であったろうと思われたが、刻まれた皺のためにいつも眩しそうに細められているように見える瞳や、一方に歪んだ薄い唇、かすかに後退した額などは、彼に、そのころにはなかったであろう枯淡の魅力を加えていた。血気さかんな火の種族のものたちを、おとなしくつき従えるに足る風格を備えていたのである。
グァモンは、若いダトニオイデスにあぶり肉や珍奇な干し果実をすすめた。ダトニオイデスは礼儀正しく盛んな食欲を見せ、それから思いだしたように立ち上がって、馬から荷を取

って来た。

「対抗するわけではないが、俺も酒肴を持って来た。銀松露です。われら土の恵みに負いたる一族の中でも、特に鼻のきくものだけが探りあてることのできる大地の秘宝です。泥臭い鄙びたものではありますが……裕福なるカリクティス家の殿がたでも、これぱっかりは、けしてたらふく召し上がったことがおありにならぬと存じまして、特に、持ってまいりました」

「生憎、噂に聞いたことしかない。おお、これは見事なものだ。どのようにして食す」

「少し焼くと、いっそう薫り高くなります」

「左様か」

赤子の拳ほどもある茸を受け取ると、グァモンはいっそう目を細めて、広げた掌の上にかざした。たちまち灼熱する掌の上空に、薄く煙が立ちはじめ、馬がぶるるっと頭を振った。

「ああ、そのへんがいいところです」

「なるほど、よい薫りだ。では、いただこう」

男たちは、しばらく飲み、食べた。竜も馬もおとなしく待った。ちょうど同じ時分に、首都ランデールの広場で行われている収穫祭そのものに比べれば、ずいぶんと静かで無骨な宴であった。

食事の区切りの太いパピル煙草に指先で火をつけると、グァモンは岩壁に凭れてゆったりと姿勢を弛緩させた。

「貴公も楽にすればよい」
「では遠慮なく」
ダトニオイデスは頑是ないこどものように笑窪を作ったが、実際はあぐらを崩し、片膝を立てた。その様子を左右不揃いにした物憂げな瞳で見守ったグァモンは、かすかに笑った。
「長幼の序など気にすることはないぞ、ダトニオ。そなたは、そなたの嫌う年寄りどもと、同じことをしていはせぬか」
「俺は、グァモンどのが年上だからこうしているのではありません」
濃い眉の下で瞳をキラキラさせながら、ダトニオイデスは言った。
「あなたを尊敬しているからでもあり、あなたが油断ならぬおひとだと知っているからでもあるのです。この姿勢ならば、あなたが急に、あの蜥蜴のばけものに命じて俺を殺そうとした時にも、とっさに避ける自信がありますからね」
グァモンは、深い笑い皺に囲まれた目をいっそう細めた。
「呪の効果など、微塵も信じておらぬな」
「あの乾杯ですか？　ええ、そうです。俺は神や魔法や呪術の類は、崇めますが頼りにはしません。頼れるのはこいつと」
ダトニオイデスは笑窪を作ったまま、自分の腕を叩き、
「あいつだけです」

黒き妖馬のほうに顎をしゃくった。馬は、何もかも聞き逃すまいとするかのように耳を立てて、何か強いものを秘めた賢そうなまなざしを、じっとグァモンのほうに投げ返した。

グァモンは端に煙草を挟んだままの唇を薄くこじあけるようにして息を吸いこんだ。

「そなたの従弟は、信用がおけるもののうちには入らんのか」

「ディアルト？……ああ。ディアルト、ディアルト」

かすかに頭をうつむけ、飴玉でもしゃぶるように甘やかに名前をつぶやき繰り返してから、ダトニオイデスはふいに真剣な顔になって、グァモンを見つめた。

「ある意味では確かに信用していますね。あいつには誰にも真似できない能力があるし、何を為し、何をしないでおくかは、よく心得ているほうでしょう。けれども、あれが何を考えているかまでは、俺にはわかりません……」

ふいに両手を振ると、ダトニオイデスはまた無邪気そうに笑ってみせた。

「あなたは質問ばかりだ。一方的にこちらの内情を暴露させられるのは、気にいりませんね」

「そうか」

「たまにはこちらからもうかがいましょう。ルビスはどうなのです？ 彼女はあなたの、いや、われわれの、と言い換えましょうか、われわれの、味方になってくれそうなのですか？」

「ルビスか……」

紫煙をくゆらせて、今度はグァモンが照れ臭そうに頭を振る番だった。


MiTsUMi

「難しい。あれはまだこどもだ」
「だが、強い」
ダトニオイデスの黒い瞳がキラリと光った。
「途方もなく強い。あなたは彼女が嫌いなのですか？」
「そのようなことはない」
「良かった。俺も好きです。ほとんど惚れてます、できることなら、一度やってみたいです」
グァモンは岩の床に煙草を吐き出した。
「いけませんか？」
「ダトニオ……」
肩をすくめる若者のあまりにも野放図な態度に、思い切り見開いたグァモンの赤い目が、やれやれとまた細くなった。
「姪を傷物になどしたら、ただではおかぬぞ」
「どうします」
「奥方に言いつけてやる」
ダトニオイデスは大声で笑い、笑いすぎてむせ、酒をあおった。
「あなたの冗談が聞けたんだから、言ってみただけのことはありましたね」
グァモンは横を向き、まぶたを伏せて、知らん顔をした。

「では、そろそろ、本題に移りましょうか」
まだクスクス笑いながらダトニオイデスは言い、意識して、ムッと真面目な顔を作った。
そして、盃を持ったまま、岩の床を伝って、年上の男のそばに来た。グアモンは乗り気のしないような顔で、新しい煙草を取り出した。
「まずは、懸案の水の長シフィルのことですが」
「うむ」
「予想通り、ふたつの神殿に使者を放ちました。われらが既に聴いた、かの神託を得ることになるでしょう。彼の選択が第一の焦点となりましょう」
「われらにつくか、われらに背くか……どうするかな」
「予想は難しいですね。シフィルはまだ若すぎます。そのために却って、年功者を尊び、長き五大家の伝統を守って行くことに固着しないとも限りません。つまり、われら改革を求めるものをミトラ神に対する反逆者と捉えてしまう可能性もあるということです」
軽い口調で言いながら、ダトニオイデスは油断なくグアモンの顔色をうかがったが、そこには何も読めなかった。諦めて、彼は続けた。
「実はですね」
「ぬ」
「俺は本日、ひとつ仕掛けを施しました。恒例の力試しの題材に……少々工夫を凝らしまし

て。今ごろ、ランデールでは騒ぎが持ち上がっているはずです」

得意のあまりにやけがちな顔をせいいっぱいひきしめながら、ダトニオイデスは瞳を輝かせた。

「おそらく、民草は動揺します。イデーンの将来を不安に思うでしょう。そこを叩くのです。好機というものは、待っていても訪れぬ。俺はそいつを作りだしたつもりですよ、グアモンどの……！」

2

……神話は語る。

五大家とは、イデーンの誕生と同時に存在した五人の精霊をそれぞれ祖とする五つの家系を差す。

始祖である五人の精霊とは、以下の通りである。

木の精霊、緑の瞳のオトシンクルス。

火の精霊、赤い瞳のカリクティス。

土の精霊、黒い瞳のコリドラス。

金の精霊、黄色い瞳のアヌビアス。

水の精霊、青い瞳のポリプテルス。

先の二人が女性的の特質をもった精霊であり、後のふたりは、男性的の特質をもった精霊であった。彼等はみな、肉の契りによって生まれたのではなく、絶対で永遠で完全であるミトラ神そのもののことばと意志によって誕生した。ほぼ地上の人間と変わりのない姿をした妖精たちである。

後、イデーンがより複雑になり広くなるにつれて生まれた諸精霊は、このようではなかった。

まず、恋の守護神オルナティピンニスが、男女の数が合致せぬ世界は不完全で不幸であると感じ、その真白き翼の羽根を一本抜いて、この地に投げたのである。羽根は、この上もなく見目麗しい少年の姿となって、イデーンじゅうに恋惑いの薫りを漂わせた。しかし、五始祖である精霊たちは、父なるミトラに任されたそれぞれの事象をうまく整えることに精根を傾けていたので、徒なる恋に振り向きはしなかった。かの妖しき少年の魅力も、全く虚しかったのである。

不愉快になったオルナティピンニスの機嫌をとろうと、福の神カラバリクスが、イデーンに向けて唾を吐いた。唾は幾多の花の精・蝶や蜂の主・愛らしい小動物や風のシルフ等となって、謹厳なるイデーンをおとぎの国のように色づけた。オルナティピンニスは慰められたが、今度は別の神々が目くじらを立てた。かくして、知恵なる神キリアータと雷と戦の神キ

ショウンの兄妹、大海を統べるネガイホリア、太陽神ジェオファーグス、月の女神コムブラエをはじめとする、その名を知られる神という神が、競うように、種々の精霊を創造し、イデーンに住まわせ、さまざまな騒動を起こしたのである。

が、それはまた別のものがたりである。

精霊同士は婚姻を結び、多くの子孫を作った。

始祖なる五人も、尊き使命をその寿命を越えて完遂せんと欲し、ミトラに伺いをたてて許されたので、夫あるいは妻を娶り、子を為した。

さてこのようにして、ミトラ神ご自身をはじめとして、天の神々が手づからこの世になした精霊たちは、出自によりさまざまな性格を有していたとは言え、概して穏やかで気品と慎ましさにあふれ、佳くその使命を果たした。が、尊き血も歳月を経るうちには、混じりあい薄まって、誉れを失い、さまざまな悪しき結果を生じた。ひねこびた意地の悪い目つきをしたもの、醜悪な角や尾を持つもの、定まった形を持たず知性も低すぎてことばを交わすこともできぬものさえが、世々にあふれた。かくも雑駁なる低級霊、無形の生命たちの数があまりにも多くなると、つまらないことがらについて、しばしば対立が起こった。

低劣なるものたちは、生まれつき偏狭で、それぞれ自らの使命をのみ不可侵のものと頑迷に思いなしていたので、煩わしき他者に脅かされたと感じては、ありとあらゆる手段を使っ

て我を通し、それも叶わぬと、父または母である天なる神々に、切々と不満を訴えた。そのあまりの独善・無謀・瑣末に、神々は眉をひそめた。しかし、素性卑しき精霊等ほど、利害を一にするもの同士狡賢くも結託をして、敵なると思い定めたものたちに戦をしかけ、ついには傲慢にもその力もてこの国の覇権を握らんと欲する集団になり果てたのである。

　さしもの威き神々も、これには困惑した。もともとイデーンを誕生せしめた偉大なるミトラ神の意図は、地上の事物を管理する役目を種々の精霊たちに任せ、天のつとめを幾分かなりとも肩代わりさせることにあった。そのような道具であるものたちが、与えられし本分に甘んずることを拒み、天の意図に謀叛を企てようとは、俄には信じがたかったのである。

　このような事態を招いたのは、数多の神々が、ミトラ神ほどには絶対で永遠で完全でないからである。神々は、好奇心のために、面白半分に、あるいは、他の神への対立感情のためにまで、手当たり次第に精霊を増やし、増長させた。

　このように、生まれが尊く良いものであっても、世々を経、世代が移るうちには、恐ろしい怪物に成長することもある。

　数多の神々は、おのが失敗を明らかにして、すべての父なるミトラ神の逆鱗に触れることを畏れた。ミトラ神の目には、何びとも隠れることなどできぬと知りながらも、なお愚かしくも、責めを負おうとしなかったのである。また、神々は、自らの生んだ精霊等が、他の神々の憤慨や軽蔑を買うことをも恐れた。

それゆえに、神々はそれぞれひどくいらだちながらも、出来損ないの精霊等に手を差し伸べてやらずにはおかなんだのである。今いちど少しの援助をすることで、彼等を、なんとか、よきものに、あるいは、せめてましなものにしようとした。

が、これは虚しかった。ひとつ誰かの願いごとを叶えると、他の精霊が羨んで、自らにもと、新たに求め訴えるのである。

そのあまりの煩雑さ頻繁さに音を上げた神々は、ついに集って降参し、ミトラ神の決裁を求めた。

ミトラ神はイデーンに降臨し、精霊等の中の悪しきものたちを退け、最も救いようのないものは根絶させせしめた。そして、その後のイデーンの安寧のために、始祖なる五家を特殊な地位に推し、その平等会議にこの世の政を、任したのである。

このようにして、いと高き家系と、それに従う種族、さらにその他の種々雑多な精霊たちの階級的な世界が誕生した。

また、賢明なるミトラ神はこの時、御自らの左右の拇指を折り取って、投げたと言われている。

右の指は、イデーンの西のはずれ、凍てる大海パンガシアノドン・ギガスと生命の揺籃メガロドラスを隔てた細い岬アガマの先端に落ちた。精霊等は、この地に神殿を興し、陽であり右である意味を持つ神々のことばに因んで、サラマクセンシスと名付けた。この地を預か

る男の神官は、生まれつきミトラの右拇指であり、額にジェオファーグスの太陽印を持つものであった。ゆえに、サラマクセンシスは、岬の神殿とも、太陽の神殿とも呼ばれる。

左の指は、神秘の霧に包まれたレピディオ湖の中ほどにただひとつ浮かんだ小さな島に落ちた。ひとびとはこちらにも神殿を興し、陰であり左である意味をこめて、ラルバタスと名付けた。この地を預かる巫女は、生まれつきミトラの左拇指であり、額にはコムブラエの細き月の印を有した。ゆえに、ラルバタスは、湖の神殿とも、月の神殿とも呼ばれる。

このようなわけで、神殿を預かるものは、ミトラに準じて永遠であった。神官と巫女とは五大家の統治を助け、その紛糾する時には天の意志を代弁してこれをまとめた。だが、神官や巫女の肉体には脆き精霊の限られし寿命があった。交替の時期が近づくと、左右の拇指の魂は、新たにどこかの女の腹の内なるみどり児に宿った。嬰児の小さき額に、黄金の太陽または三日月型の痣があれば、親である精霊はみな畏まってこれを受け入れ、赤子を、イデーン歴にして三歳ほどになるまで、大切に育てた。やがて神殿から迎えが来れば、幼児は引き取られてゆく定めであった。

徴持つ幼児はかならず、左右いずれかの拇指の知識や記憶を受け継いでいた。ある時コウデマ山麓に庵する不埒な老夫婦が、罪なき拾い子に手描きの徴をつけて国じゅうを騙そうと企て、あえなく失敗した。

が、それはまた別のものがたりである。

五大家は栄え、代々の家長はよくつとめを果たした。

家長の位を継ぐのは、男女を問わずその長子であると定められている。ただし、家長夫婦に子がなかった場合は、弟あるいは妹が次の長の座につき、また、跡継ぎがあっても成人に達さぬうちに家長が倒れし場合には、叔父・伯母が歳月を限って摂政役をこれつとめ、同時に、正統なる後継者を後見した。

今のルビスのありようは、この後者の事例にあたる。

火の一族のものたちは、概して短命であった。前の家長であったルビスの母エスメセス・アピストが、中でもひどく若くして冥府に招かれたおり、ルビスはまだ幼かったゆえに、母の弟であるグァモンが、一時カリクティス家を預かることになったのである。グァモンのふたつ名セミアクィルスは、彼が、カリクティス家の正統なる直系アピストほどには高い家系でないことを、如実に示している。

さらに、恐るべき例外もある。ダトニオイデス・バコバやディアルトの属する、大地の精霊コリドラス家の場合である。

一代前の族長アカントホプス・バコバ・コリドラスには、ふたりの男児があった。兄がインテルプタス、弟がビスピノススである。インテルプタスがバコバの名を継いでコリドラス

一族を率い、ビスピノススはケントロピーゲの名を受けて傍系に甘んじることになるのが、自然の成行きのはずであった。

運命の出逢いは、インテルプタス二十歳の春に、密かに待ち受けていた。何の手づるがあったやら、地上から人間のおとめが首都ランデールに、ひとり迷いこんで来たのである。おとめの名および容貌等は、既に歴史に埋れて定かではない。ともかく、地上の人間が彼の地を訪れるのは、イデーン歴にしておよそ二百六十年ぶりであった。

精霊たちはみな、対応に窮した。

大地に住む獣等は、おおむねコリドラス家の庇護の許にあるとされる。人間は獣のうちに入れるか入れざるか、天の神々に直に委ねるか、我等の内にて歓待するか。五大家会議は荒れに荒れ、ふたつの神殿に判断が委ねられたが、なかなか結論はでなかった。その間おとめは、かりそめの客人として、コリドラス家の預かりとなった。誰もが尻込みする、そのやっかいな役目を進んで引き受けたのが、好奇心旺盛な若き次期当主インテルプタスであったのが、大地の種族の不幸であった。

ふたりは恋に落ち、おとめは、いと尊き血を引く子を宿した。

精霊と人間の夫婦は、一族の反対と怒りを恐れて、遁走した。ナスタチウムの丘を越え、魔峰オーブの麓を経て、ヴェリダヌス山脈を縦断し、宝石砂漠アンブリアに至った。アンブリアは広大で苛酷で無慈悲な砂漠である。かつてミトラ神によって退けられた悪しきものた

ちの生き残りばかりが住まうとされ、精霊たちの勢力もほとんど及んでいなかった。わずかに森の一族の剣鷹の精のみが、険しい山々を越えてその様子を伝えることができた。その鷹使いが、ここでふたりの足跡を見失ったのである。

ふたりとも、死んだものと思われた。

コリドラス家は、家のミトラ聖書からインテルプタスの名を消し、ビスピノススを次期家長に据えることを決定した。ビスピノススは虚弱であったが、既に一族の傍系大角鹿の精ライティによって健康な男児ダトニオイデスを得ており、後の憂いはないものと思われた。

イデーンじゅうがあっと驚いたのは、それから八年の後のことであった。

ある日、テネルス草原の一端に聳えたつコリドラス家の岩城に、巨大な影がさした。魔峰オーブの奥深くにのみ生息するはずの伝説の不死鳥ラーミアが、その大いなる翼をゆったりと羽ばたかせながら、探るように城の周囲を旋回し続けていたのだ。男たちはまなじりを決して空を睨み、女こどもは屋敷の奥深くにそっと隠れた。

不死鳥の背にはじめに人影を見つけたのは、おもてに残った男たちの中では最も幼い少年であった。族長の孫、十歳になるダトニオイデス・バコバである。

おとなたちが止めるのも聞かず、ダトニオイデスは不死鳥の乗り手に勇敢に名乗りをあげ、意外にも返答を得た。乗り手は、ダトニオイデスの勧めに応じて、怪鳥ラーミアを草原に降り立たせ、高らかに告げた。自分こそは、今は亡きインテルプタスと人間の女の間に生まれ

た唯一の子ディアルト・バコバ・コリドラスであると。そして、幼いながら鋭い語調で、この家の内に自分を家族として迎え入れてくれるか否かを問うた。否と言われたならば、魔峰オーブの懐の養い親である川辺の民等のもとにこのまま帰るが、さすればかの地にて、イデーン五大家のひとつともあろうコリドラス家は、実は血族の嘆願をも聞かぬ偏狭千万の家系であり、頑迷な輩揃いであるゆえ軽蔑に価すると評されるであろうと、いとも巧みに皮肉も言った。

　男たちが嘲笑まじりにその尊き血の証を要求すると、少年は、父の形見である剣を、高々とかざして見せた。剣は、まばゆい陽光の中でも黒く重たげに輝き、柄には、コリドラス家の実りの紋章があった。まごうかたなき、大地の剣であった。

　家長アカントホプスは、返答に窮した。名高き不死鳥を自在に操る少年は身内としていかにも頼もしいが、それゆえになまじ迎え入れれば他種族の不興を買う恐れもあった。地上の人間などを娶って奔走し家名を汚した我が長子は、けして許す気持ちにはなれぬし、バコバの名は今はビスピノススが継いでいる。が、憎い子とても既に死者となっていては咎める術もなく、はじめて見るこの孫に、自らの罪はないと言えぬものでもなかった。

　アカントホプスの妻カカトゥオイデスは、知らせを聞いて館の奥から出て来ると、必死に夫を執り成した。もともと彼女は、第二子であるインテルプタスを贔屓し、病弱なビスピノススを疎んじていたので、自慢の息子の忘れ形見である異国風の少年を得られるのならば、

けして手放したくはなかった。自らのそばに置いて慈しみ、イデーン内のどの少年にも劣らぬほどに、立派に育ててやりたいと願ったのである。

　幼いダトニオイデスもまた、年齢の近い親族が増えることに興奮し、素直に歓迎した。兄弟のいない自分には従弟でも嬉しい、共に暮らせば、遊ぶにつけ技を磨くにつけなにかと励みになるだろうと、祖父の袖を掴んで愛らしくせがんだ。

　最も親しきふたりに強く懇願され、アカントホプスは、ついに混血の少年を受け入れても良いかもしれぬとこころを動かした。ただし、彼は少年に、ふたつのことを要求した。

　今日を境に、バコバおよびコリドラスの名を返上し、ディアルト・ケントロピーゲを名乗ること。

　次期家長をビスピノススが、さらにその後にダトニオイデスが務める時、これに反逆せず、どちらをも力及ぶ限り佐けること。

　このふたつである。

　しばらく考えて、少年が承諾すると、頬を紅潮させたダトニオイデスが人垣をかきわけるようにして前に出た。

「もうひとつあるぞ！　俺もその鳥に乗ってみたい。乗せて、飛んでみせてくれ！」

「きみを前にして、ぼくが後になる」

と、従弟（ディアルト）は言った。

「一つのスプーンみたいに重なって乗るよ。ぼくのほうが小さいからちょっと辛（つら）い感じだけど、それが一番安全だと思う」

「わかった。はやく乗せろ―」

「待って」

ダトニオイデスはすぐにも鳥に手をかけようとしたが、か細く見えた従弟の腕（うで）の思いもかけぬ強さでしっかりと阻（はば）まれてしまった。

「ねぇ、きみはすごく力がありそうだけど、この鳥は腕力（わんりょく）では言うことを聞かないよ。けして乱暴にしないと約束してくれなきゃ、乗せてあげられないな。空から落ちて死ぬのはきみの勝手だけど、ぼくも、わざわざイヤな思いをしたくはないからね」

草地の向こう側ではらはら見守っているおとなたちのほうに顎（あご）をしゃくると、ディアルトはにっこりと笑った。

（ちぇっ、生意気な奴（やつ）！）

ダトニオイデスは腹を立てたが、ここではおとなしくうなずいておいた。

「わかった。おまえに任せる。でも、力で従わせるんじゃないんなら、どうやってこいつを飛ばせるんだ？」

「うん……まぁね。ちょっとしたコツがあるんだ。さぁ、乗るよ」

　従弟の手を借りてやっと跨ってみると、ラーミアの背は暖かで上等の蒲団のようにふかふかだった。鞍らしきものはあったが貧弱でふたり分には足りない。さっさと占有したつもりだったが、如何せん尻が落ち着かなかった。羽根の端が短い衣服からこぼれた裸の腿をくすぐるし、鳥が身動きをするたびにつるつると動かされてしまうのである。背を伸ばし、背を丸め、腰を落とし、腰を浮かし、なんとか安定していられる微妙な恰好を発見して安堵し、ふとあたりをみまわしたとたん、ダトニオイデスの首筋の毛はすべて逆立った。鳥の背は、既に充分高さを持っていた。景色はいつもとはまるで違っていた。妖馬に乗ったことはあったが、その遥かに二倍は高い。まるで身長が一気に四、五倍になってしまったかのような位置からの視界に、ダトニオイデスは不本意ながらめまいを覚え、そのまま滑り落ちそうになった。

「おっと……！　気をつけて」

　従弟に抱きかかえられて、ダトニオイデスは軽い失神から覚めた。

「うう、変なとこ、触るな！」

「ごめんごめん」

　従弟は笑って、姿勢を変えた。従弟に支えてもらうと、からだは信じられないほど安定し、よほど不注意な動きをしなければ落ちることはないと信じられた。

「いいかい、腕や腰をできるだけ柔らかくして、ぼくがどっちかに傾いたら抵抗せずにいっ

しょに傾いてね。でないと、ラーミアが飛びにくいから」
「いいからさっさと飛べ！」
「もし気分が悪くなったら、すぐに言ってくれよ？」
「気分なんか悪くならない」
「ふふふ、わかった。じゃあ、いいね。……行くよ……！」
鳥が脚を伸ばし、少しばかり地を蹴ったかと思うと、少年たちはもう大空に舞い上がっていた。
はじめダトニオイデスは吹きつける風のために息ができず、自分を前にした従弟の狡猾を無言で呪った。急な上昇に血が逆流して、頭が痛く、鼓動が乱れ、吐き気がした。肩や腕がこわばり、食い縛った奥歯からうめき声が漏れた。
「ほんとうに、だいじょうぶかい？」
耳元で心配そうな声がした。
「もう、降りる？」
「ううう、まだだあっ！　何のこれしき」
気力を振り絞って、ダトニオイデスは、自然に固く閉じてしまっていたまぶたを抉じ開けた。
「……う……ああ……！」

鳥はいつの間にか水平飛行に移っていた。目の下に、空の下に、広がるイデーンがあった。テネルスの草原が、森が、荒野が、そしてパンガシアノドン・ギガスの氷原が、どこまでもどこまでも輝いて見えるのだった。

「す……すげえ……みんな見えるんだなあっ！」

風に逆らっているので、どんなに怒鳴っても声は吹き飛ばされてしまいそうだったが、従弟には聞こえたらしい。

「そうさ。今日はよく晴れているから、特にね」

「なぁー、これじゃ、どんな高い塀を作っても、無駄だなあ！　空の上からじゃ、すっかりまる見えだ。なんか、天の神々になったみたいな気分だ。いきなり覗いてやったら、みんなぶったまげるぞぉ。なぁなぁ、おまえ、うんと覗いたんだろう！」

「……そんなに何度も来てないよ」

答える前に従弟が僅かに逡巡したことに、ダトニオイデスはするどく気づいた。その言い訳ぶりの女々しさも、同族たるに相応しくないと気に触った。だが、彼は今背後の操縦士と仲違いするのはあまりにも不利であることを膚身に感じている。だから、あえて無邪気そうに言ってのけてみせた。

「いいなあ、おまえ、すっげえなあ。もう世界の果てまで、行ってみたのか？」

「まさか。そんなの無理だよ」



「あははは、なーんだ。そうか。つまんねぇの」

もはや気分は悪くはなかった。風を浴びて飛んでいるのは、とてもいい気持ちだった。空の上から、世界じゅうを見下ろしているのは、すこぶるいい気持ちだった。

ダトニオイデスは得意だった。満足だった。自分ひとりでないのが、少しばかり癪に触りはしたが。

いったん落ち着いてしまうと、怖いもの知らずのダトニオイデスである。背後の従弟が焦るほど急に大きく伸び上がって、今度は鳥の全身を眺めた。

「うひょー。でっかい翼だなぁ」

「わぁ、気をつけて！　……だからね、川辺では、風がなくって困ってる時、ラーミアたちにちょっと風を起こしてもらうんだよ。風車が回らないと、粉がひけなくて、パンができないからね」

「へぇ、こいつ、そんなくだらねぇことまでさせられてるのか？」

「くだらなくなんかないよ。大切なことだよ」

従弟が少しムッとしたようだったので、ダトニオイデスは言い換えた。

「だってよ、そんなことしたら、へたばっちまうだろ。こんな立派な鳥なのに、好きに飛べなかったら、怒りゃしないかい」

「だいじょうぶ。ラーミアはぼくたちの仲間なんだもの。利口だし、強いし、やさしいんだ。

ぼくたちの役にたつことなら、よろこんでしてくれるんだよ」

「ずいぶん便利なもんだなぁ。でも……なぁ、強いって、どのくらいさ？　俺はこれでも、もう魔力だけで、こーんな大岩を砕くことができるぞ。おととし、大雨でランデールの運河が詰まって大変だった時、爺さんと一緒にずいぶん働いたんだ。もう一人前なんだぞ」

挑むように言うと、従弟は腕に力をこめた。

「……じゃあ、見せてやる。落ちるなよ！」

「へ？　……うっ、うわあああっ！」

急降下した先には、切り立った岩山があった。ダトニオイデスは真っ青になったが、飛びはじめのころと違って、ラーミアとその使い手の力量を信頼しきっていたため、ほんとうの恐慌はきたさなかった。案の定不死鳥は器用に斜めになって岩を擦り抜け、今にもぶつかりそうに見えた壁の直前で直角に方向転換をしてみせさえした。

そして、風唸るダトニオイデスの耳に従弟が口笛のような音をたてて鳥に何かを指示するのが聞こえた。いったい何が起こるのだろうとダトニオイデスがいぶかしんだとたん、鳥はその鉤爪の間に傍らの巨大な岩を掴みあげた。それは、ダトニオイデス自身がかつて砕いたことのあるどんな岩よりも十倍は大きかった。それをなんなく持ったまま、鳥はぐんぐん虚空の高みに飛んで行った。そうして、狙いを定め、落とすと、岩はちょうどぴったりもとあった場所に当たって、幾千万の石になって散ったのであった。

「……す、すげぇ……」
「まぁね」
得意そうに肩をすくめたディアルトだったが、振り向いたダトニオイデスの興奮のあまり限界まで見開いた瞳に気づくと、急に照れたような困った顔になった。
「わぁ、ごめん。思わず本気になっちゃった。ねぇ、でも、頼むからこんなこと誰にも内緒だよ？」
「なんでさ？」
余人には叶わぬ従弟の能力を秘密にしておくと言うことには全く吝かではなかったが、相手があまりにも真剣に頼むので、ダトニオイデスは追及した。
「うん。ほんとうは、よっぽどの時じゃないと、ラーミアに今みたいなことさせちゃいけないんだ。こいつはやさしくって、物を壊したりすること、嫌いだからね。お爺になんども言い聞かされていたのに、ああ、ついやっちゃった。できるだけめだたないようにさせとけって言われてたのに……まずったなぁ」
「お爺ってなんだ」
「賢者だよ。川辺の民の中で、一番の年寄りなんだ。ぼくに、いろんなことを教えてくれたひとでね。すっごくこころが寛くって、なんでも詳しく知っているんだ。でも、もしも間違ったことをしちゃった時には、それはそれは厳しいんだよ」

（ふん、川辺の野蛮人の大将か。要するにそこらの田舎爺だろう。今はうんと遠くにいるそんな奴を怖がるなんて、こいつバカじゃないか？　バレなきゃ、関係ないじゃないか）
ダトニオイデスはこころの中で嘲笑ったが、顔には表さなかった。口に出したのは、この上もない猫撫で声だった。
「なぁ、ディアルト？」
腹に回された従弟の手をぎゅっと握り、肩越しに、にやりと笑いかける。
「それは秘密にしておいてやるからさぁ。この鳥、くれ。俺の、一番いい鎧をやるから」
「ええっ！　だめだよ」
「けち。なぜだよっ」
「なぜって……だって、これ、ぼくんじゃないもん。自由な鳥なんだよ」
「じゃあ、こいつじゃなくてもいいや。こいつと同じくらいのラーミアをもう一匹、連れてこいよ」
「だから、そういうわけにはいかないんだってば」
「これ、そんなに高いのか？　じゃあ、爺さんに金をもらおう。そうして、俺もいっしょに川辺に行く！　行って一番いいラーミアを買って来る！」
「……もう、帰るよ」
「えーっ、なんでだよ。まだいいじゃないか。もっとあっちのほうまで行ってみようよ」

「だめ。ぼく、疲れちゃった」
確かに、ディアルトの声には張りがなくなった。腹を支えてくれている腕も、だらりとして、時折神経質そうにぴくついた。
(弱虫め!)
と、ダトニオイデスは思った。
(臆病者め! このくらいのことでへばるなんて、女みたいな奴だな! おまえなんか、嫌いだ。おまえなんか、従弟にしてやるの、もったいないや!)
「おいっ! おいったら、ディアルト! 今日のところはこれで許すけど、またすぐ乗せろよ、な?」
「…………」
「おい。返事をしろ! いいか、俺は諦めないぞ。俺も絶対、ラーミアに乗れるようになってみせる。おまえのよりもっともっといいラーミアに乗るんだ。乗って、イデーンじゅうを飛び回るのさ! おまえ、ちゃんと手を貸せよな。分け前は回してやるからよ」
「……少し黙っててくれないか」
「なんだよ、すかすんじゃないよ。だって、当然だろ、俺たち従兄弟同士なんだから。な、いいな? 手を貸すな。男と男の約束だぞ!」
ダトニオイデスは腹にかかったディアルトの手を取って、血の止まるほどきつく握りしめ

た。返事が来るまで、長い間があった。抓(つね)ってやろうかと思ったころ、やっと、押(お)し殺したような声がした。

「いやだ。約束なんかしない」

「おいっ、おいっ、待てよっ。そんなら言いつけてやる。爺さんに言って、家においてやらないようにするぞ、絶対いっしょになんか遊んでやら……うわぁっ、止めてくれ、揺(ゆ)らさないでくれ」

「ちゃんと前を見てないと、落ちるよ」

……かくて、混血のディアルトは、父の生家コリドラス家に迎えられた。カカトウオイデスの庇護(ひご)のもと、少年はたちまちたくましく成長した。山育ちの無骨さや田舎臭さ、礼儀(れいぎ)に欠けるきらいはあったが、大地の長直系の尊き血を引くものにふさわしく、さまざまの能力を顕(あらわ)して祖母を喜ばせた。

が、祖父である家長は、突然(とつぜん)現れた内孫に、あくまでも冷やかにふるまい続けたのである。

その原因の最大は、かの不死鳥ラーミアが自由にならなかったことである。

ディアルトは、わざわざ自在に乗りこなしてみせた鳥を、血族がじっくりと見る暇(ひま)もないうちにさっさと山の養家に帰してしまった。オーブ山麓の気候を長く離(はな)れることは鳥にとって楽なことではないというのが表にしたその理由だったが、ダトニオイデスは納得しなかっ

た。ただ一度といえどもかの雄々しき鳥の翼に身を委ねて空を駆けた経験を持ってしまった彼は、今やかの鳥なしでの生涯など考えることができなかった。あれを所有し従えることができなければ、けしてほんとうの男にはなれぬ、ディアルトがあれを帰したのはただ自分に取られたくなかったからに違いない、あの素晴らしい宝を吝嗇にもひとりじめにして見せびらかして得意がっているのだ、と彼は思った。所有できぬ宝は渇望される。宴の美味なる匂いばかりを嗅がされて席に招いてもらえぬもののように、彼は密かに歯噛みして悔しがった。同時にまた、彼は誰よりもディアルトを恐れた。一見おとなしく内気そうな彼が、実はあのような攻撃力を占有していること、いつ何時それを行使して自分たちをその支配下に収めようとするやもしれぬと、疑心暗鬼せずにいられぬのであった。鳥の爪にかかって砕け散った大岩は、堅牢であるはずのコリドラス要塞のあえない最期の幻になった。その鋭い蹴爪にひきさかれ五臓六腑をまき散らしてのたうち回るみじめな自分の姿が、ダトニオイデスの脳裏を片時も去らなかった。彼はなんとかディアルトを翻意させようと奮闘したが、従弟がついに鳥を呼び戻す気はないことを悟ると、もはや堪忍しきれなかった。彼は祖父アカントホプスの許に行き、かの鳥の恐ろしいまでの力について詳細に語ったのである。そしてまた、きっと秘密にしておいてくれと言われたことがらをあえなく洩らしてしまった自分の裏切りが、彼に小暗い罪悪感と焦燥を植えつけ、前にもまして従弟の復讐を予感せずにいられなくさせたのであった。

アカントホプスは離れて育った幼い孫を呼びつけ、尋ねてみた。彼の不死鳥は、魔峰オーブを軽々と飛び越え、神います天も卑しき地上も、自由に行来することができると言われているが、これは真実なのか。また川辺の民とはどのようなものたちなのか。どの精霊にも属さぬあの誇り高き鳥を、その民が自由に従え得るには、何か秘訣があるのではないかと思われるが、それは何かと。ディアルトは祖父がことのほか真剣なのを知ると、こどもらしく頬を赤らめてもじもじしたが、けして答えなかった。育ちざかりの食事を断つぞと脅しても、館のどんな宝物を与えてやろうと申し出ても、頑固に頭を振って唇を結びきり、何ひとつ洩らしはしなかった。聞き分けのない孫を、アカントホプスは小面憎く疎ましく思った。しかもこの孫は、ダトニオイデスから伝え聞いたところによれば『川辺の賢者』なる老人をひどく慕っているらしいのだ、肉親の自分よりもずっと強く！　アカントホプスの矜持は傷つけられた。彼はディアルトの前では、ことさらにダトニオイデスを用い、誉め、寵愛せずにいられなくなった。

アカントホプスがディアルトを嫌った理由の今ひとつは、孫の血の半分に流れる卑しい人間の匂いであり、また、それゆえに生ずる抑えることのできない不安と疑いのためであった。その子の周りに、彼はたとえようもなく不吉な翳を感じた。ある日浅い眠りの中に彼が見た夢では、ディアルトは禍々しい雲を従えて天を横切る黒き竜の姿をしていたのである。

偶然か、またほんとうにディアルトが遠因となっていたのかはさておき、アカントホプス

の悪い予感は当たってしまったのである。
次ぐる年、生まれつき傴い定めであったビスピノススが死に、さらに翌年アカントホプス自身が原因不明の熱病に倒れたのだ。頑健なる老人は、数年間業病と戦ったが、次第に弱っていった。

ある時、その病の床にダトニオイデスがひとり付き添っていると、熱にうかされた祖父は、混血の少年に対して天の神々も目を覆わんばかりの凄まじい呪いのことばを吐いた。聞きかねてダトニオイデスが寝所を去ろうとすると、祖父は急に正気に返ったかのように起き上がり、孫の手を固く握りしめ、血走った黒い瞳をギラギラとさせて、これはみんな言いがかりではない、嘘ではない、全くほんとうのことなのだと、秘めた声に力をこめた。
……よう聞け、聞いておくのだ、ダトニオ！
次の長であるおまえにだけは言うておくが、まもなく死を迎える今になって、儂はようよう悟った。ディアルトは、まごうかたなき禍つ児であった。あれを、わが屋敷の内に引き入れてはならなかったのじゃ！
そなたの父の兄である我が子インテルプタスが、地上より来たる卑しい牝人間を選びしが、そもそもイデーンはじまって以来の禍兆の芽吹きであった。だがそれはもう言ってもせんかたがないことだ。問題は未来だ。先々のことだ。

ダトニオよ、今はもはやおまえだけが頼りじゃ。油断するな、あれに心を許すな。あれはけして、招き入れてはならぬ子じゃった。このまま我等が内に奴を生かしておけば、あれは我等を殺しかねん。駿（しゅん）なる妖馬も身中の螺旋虫（らせんちゅう）に喰（く）われて衰（おとろ）えるがごとく、我が偉大なるコリドラス家が、ひいてはこのイデーン全体が、あやつのために滅亡（めつぼう）せぬとも限らぬぞ……！

ダトニオイデスが震（ふる）え上がるを見ると、祖父は、不意に肩の力を抜（ぬ）いて、うっすらと笑い、言った。

だが、すべては、このことすらも、けして逃れることのできぬ運命のうちであるのやも知れぬよのう……。

それからアカントホプスは寝所に妻カカトゥオイデスの弟で肥沃土（ひよくど）の主であるプレコトムスを招き入れさせると、義弟と孫の無骨な手と手を繋（つな）がせて並べ、血を吐くような顔つきで非情なる命を下した。

ディアルトに土蜘蛛（つちぐも）の秘酒を与えてこれを酔（よ）わせ、大地の剣を奪（うば）い、メガロドラスの離れ小島ゴスリニアに追放すること。彼（か）の地の波荒（あら）う大岩に繋げて、今ひとたび、不死鳥ラーミアと川辺の民についての種々の秘密を問い正すこと。何も答えなければ、答えるまで、そのまま捨て置け。

それでは、ディアルトは死んでしまいます……！

ふたりが蒼白（そうはく）になると、アカントホプスは言った。

死んだら死んだで構わぬ。そのくらいのことで死んでくれるのならばありがたい。他家はむろんとて、血族内の他の者たちにもこのことは秘め、彼が自ら母の出し卑しき地上に去ったのだと思わせておけ。うまくやるのだ。そうでなければ、我が血族は真っ先に滅びの道を歩むことになるだろう……。

ここにおいて、ダトニオイデスとプレコトムスは覚悟を決め、諾を誓った。アカントホプスは分厚い唇をめくりあげてニタリと笑い、皺だらけのまぶたを閉じた。

それがこの老長の、末期であった……。

3

「……肝心なのは、やはりラーミアです」

ダトニオイデス・バコバは言った。

祖父の死を看取った時よりはや十年を越える歳月が流れている。少年のひょろひょろと不均衡な骨や肉づきは、がっしりとした若者の重たげな肢体に変わっていたが、一見無邪気な人好きのする笑顔の中にしかし常に油断なく光る黒い瞳があるは、今も同じであった。

彼の丘の麓なる岩窟迷宮に入りしよりもまた、既に一刻あまりが過ぎている。

　洞内には、引切りなしに炎の当主の吹かす紫煙が充満していて、馬はしきりに瞬きをした。が、ダトニオイデスは、こどものように両手で代わる代わるまぶたを擦りながらも、その痛みを自覚さえせず、夢中で喋りつづけている。
「川辺の民とかいう者たちの間には、あの怪鳥ラーミアを操る秘法が何かしら伝わっているに違いないのです。その秘密さえ手に入れることができれば、俺たちにだって、あの不死鳥が使えるに決まってます！」
「他所には洩らさぬ由、秘法と言うのであろう」
　グァモンは肩をすくめた。
「川辺の民とは、昔々イデーンを追われ、地上に逃げようとして道を誤った禍つ精霊どもの末裔のことであろう。そのようなものたちとうまく渡りあえると判ずるは、少し軽率ではないか。どのように懐柔する気なのだ？」
「禍つ精霊と言っても、もはや数十世代を経ています」
　間髪を入れずに、答えが返った。
「ミトラより来たる高き血も、やがては薄まり鈍るように、悪しき血もまたついには衰えるものでしょう。彼等はわれわれと実際そうひどく違ってはいないのではないかと、俺は考えます。なぜならば、駆け落ちをした我が恥辱なる叔父インテルプタスと仮の名さえも知られぬ人間の女を匿い、幼いディアルトを育ててくれたのは、他でもないその連中なんですよ。

けっこう親切だとはお思いになりませんか？」

「なるほど」

「この谷には、その、ディアルトの養い親がいるはずです。『賢者』と呼ばれる彼の師もあるはずです。もしそのものたちが死んでいたとしても、その家族か友人は残っているでしょう。その縁を礎石とすれば、道理を悟らせるに何の不自由がありましょう。われらに協力するならば、彼等は辺境に追いやられとじこめられた暮らしから救われ、再びイデーンに返り咲くことができると説くのです。お考えください、いかに長き年月を彼等は忍んできたことか！今のように爛熟したランデールなど、そのものたちは、想像だにできぬに相違ありませんよ！」

グアモンはダトニオイデスの熱っぽい口調にチラリと皮肉っぽく目をくれて、もう何十本めになるかのパピル煙草に、またしても火をつけた。

「では、我々は、そなたの悪名高き従弟どのを急ぎ救出せねばならぬな」

「ディアルトを？」

ダトニオイデスは目をぱちぱちさせた。

「救出するって……地上からですか？」

「いいや」

煙の彼方で、グアモンは笑った。

「恍けることはない。そなたらが前の族長どのの命に従って、かの哀れな混血の少年をゴスリニア島の囚人として隔離したことなど、既に知っておる。……そんな顔をするな、ダトニオ。我等は血盟を結びしものではないか、コリドラスのお家事情に口を挟む気もあらぬ。が、川辺の民なるものたちを我等の身内として迎えるためには、そなたの従弟どのに、尽力してもらうが良かろう。ここは是非、鋭い槍先となって働いていただかねば」

「槍先は……」

ダトニオイデスはまつげを伏せて、しばらくの間考えたが、やがて小さく吐息を洩らして、囁いた。

「折れますか？」

「折れる。いや、折らねばならぬ」

指先に挟んだ煙草の先からうっすらと立ち昇る煙を見つめながら、グァモンは感情をこめずに淡々と述懐した。

「艱難の時代に待たれるは賢者・名君よりもまず英雄だ。英雄は、爛れた平和を嫌い、澱む日用を引っ掻き回して、戦を起こすもの。禍つ神、荒ぶる神であるゆえ、争乱の中にしか生きられぬ。英雄がひとりおれば世界を一新するは容易いが、一度戦乱が治まって世が新しい秩序を手に入れた際には、そのようなものはもはや役に立たぬ。いや、真実を言うならば、むしろ邪魔だ。ひとたび英雄たる味をしめたものが国主の座につけば、怒濤の時代が続くのみ。

戦の根は断てぬ。古来、英雄がそのまま王となった世が長く栄えた試しはない」
「王たらば名君、名君になるは賢者」
ダトニオイデスはニッと笑窪を作った。
「禍つ英雄等を乗りこなせしもの。言わば、グアモンどののようなかたでしょうか」
「世辞など言うな、気色悪い。そなたの思いは他にあろう」
深い笑窪を消さぬまま、ダトニオイデスは瞳をきらめかせた。
「捨石になるを望むほど覇気に乏しいものであれば、捨石としての価値もそうはございますまい？」
眉根を寄せてまだ若い大地の長の表情をじっとうかがったグアモンであったが、やがて、赤い頭髪を揺すりたて、長い手足を持て余すようにして立ち上がった。
「そろそろ夜が明けよう。戻らねば」
「次の手は」
「追って連絡する」
うなずいて、馬のそばに数歩歩みかけてから、ダトニオイデスはふと思い当たったように振り向いた。
「いつ、ルビスを連れて来てくれます」
「まだだ」

火竜の首枷を塩梅するために広い背をこちらに見せていたグアモンは、からだをそのまま、顔だけをかすかに横に向けた。
「なぜ」
「ラーミアを見せてやりたいのです。ルビスはきっと気に入ります。あのお転婆は、我が自慢の妖馬たちをも、大地のものたちよりもなお上手く乗り熟す。だが、馬より、その蜥蜴よりも、彼の不死鳥に乗ったら一番似合うと思いませんか」
グアモンは竜の背に跨って、その長い首を叩いてやりながら、ゆっくりとこちらを向いた。
「蜥蜴ではない。これは立派な竜だ」
「同じでしょう？」
「そなたとわたしが同じである程度にはな。表まで共に行くか？　こいつがいれば道は明るいぞ」
「それだけに、万、ひと目についてはおしまいです。どうぞお先に」
「では」
きえええん！　火竜が鳴いて伸びをするように翼を広げると、そのからだはひときわ明るみ、洞を囲む岩肌に含まれた玻璃の結晶が呼応して幾千万の星となった。
グアモンが片手を上げ、ダトニオイデスが笑窪を作って答えた。狭そうに首をかがめて、竜は洞を抜けて行った。あたりが暗くなると、ダトニオイデスの馬は、緊張を解いたように、

低く鼻息を洩らした。
「よしよし。さあ、帰ろうな」
たっぷりしたたてがみの垂れかかる首筋をごしごしと擦ってやりながら、ダトニオイデスは暗闇の中でクスクス笑ったが、すぐに顔をしかめた。
「ここは煙臭くてたまらんよ……」

4

五大家会議はイデーンに長き平和をもたらした。そのことは前に述べた通りである。だがしかし、澱む水にどこからともなく生ずる羽蟲のごとく、安定は停滞を発生させ、また怠惰や腐敗をも育まずにはおかぬものなのかもしれぬ。
ダトニオイデスにとって、今のイデーンは、惰眠を貪る竜のようなものに思えてならなかった。本来の恐ろしく美しい姿を見せてもくれずに弛緩して、ただ無駄に齢を重ねるばかりなのだ。五大家会議に至っては、その眠れる竜の見ている夢よりもなお意味がなかった。ダトニオイデスはいらだった。なんとかしなければならぬと焦燥し、当主となってからは、けしてこころの休まることはなかった。
彼の真情を看破したものは、まず目の前の埃を払えと言ったかもしれぬ。

生まれ落ちたその時から既に、家族の争いごとのただ中に投じられた子である。父も母も弱々しく、周囲の顔色ばかりをうかがって、頼りにならなかった。祖父は感情の起伏が激しすぎ、幼児の彼がその思い通りになっていればひどく喜んで甘やかしてくれたが、ひとたび自分の望みに逆らうことがらを見つけると、爆発的な怒りと厳しい処罰をもって接した。世継ぎとして相応しくない行いをした時には、死んだほうがましだとまで思わされた。そして幼い少年期に突如横槍を入れるように出現した従弟ディアルトとその乗って来た怪鳥には、生涯一番の衝撃を受け、その幻影にいつまでも脅かされつづけてきたのである。

無条件に愛された経験をもたぬダトニオイデスにとって、生きることは飽くことのない挑戦と競争の連鎖であり、現世は能力あるものの天下であった。自分以外の精霊はすべて敵か味方であり、自分に何かを押しつけて来るものか、または自分が踏みつけにしてもいいもののどちらかであった。体力、魔力、魅力、あるいはどのような力でもよい、ともかく何等かの才覚を持ち、それを伸ばして来たものたちだけが、生き残っていくべき定めである、と彼は信じた。この世はより強いものの都合に従って動いてゆくものであって、弱さを庇い守る愚を犯せば、高きものもついには足を引っ張られ、共に落ちてゆくばかり。そのような『やさしい』ばかばかしい行いを為して、ミトラの神から預かった尊い生命を無駄に費やすものは、自己満足を求めるこころを罵られ咎められるべきでこそあれ、少しも誉められるいわれはない。所詮足手まといにしかならぬ有象無象は、いずれ淘汰され滅びるべき定めなのだ。

自分は、より強いものとなって、より早く、そのような不要なものたちのいなくなった素晴らしい世界を現出させよう……ダトニオイデスの決意は固かった。だから、彼はいつでも率先して努力をした。心身を鍛え、知識を求め、処世術を学んだ。どんなに疲れている時にも、瑣末な用事をも、けして他人に任せなかった。誰も信じず、誰も頼らず、誰もほんとうには愛さなかった。そして、激しい気性がけして顔に出ぬよう、他人に悪感情を抱かれぬよう、いつも笑窪を刻んでおいた。

だが、現実は、あくまで彼に冷たかった。彼の道は、少しも楽ではなかった。

(最もぐうたらなものたちが、最も安寧に生きているのはなぜだ？ 最も単純で愚かなものが、最も幸福そうに見えるのは、どうしてなのだ？

どんなにとりえのないものたちをも、みなが喜んで尊重する。そうして、こころのやさしいひとだと言われていい気になるのだ。そうしてみなが揃って愚鈍になっていくのだ。愚鈍であるから、やつらには何の心配もない。ものごとをまっとうに考える頭を持たぬから、どんな凶兆にも気づかず、不安にならぬ。幼稚で感傷的な感情を剝きだしにしていても、恵まれた生涯を送ることができるらしい。

なぜだ？

なぜ神は、あのようなものたちを許しているのだ？

ああ、なんという不公平、なんという不条理なのだ！)

ダトニオイデスは憤慨した。それは嫉妬であり、存在不安であり、必要のない劣等感だったが、彼はそうは思わなかった。

彼にとって、この世はあからさまに有限なものであった。誰かが勝てば、誰かが負ける。誰かが幸福であれば、誰かが不幸だ。今、イデーンでは、劣悪なるものたちがずうずうしく栄えている。だから、優秀にして駿敏なるものたちが、その本来持つべき高き座を追われているのだ、と考えたのである。

さて、かのごとき視線を持って五大家会議を眺めれば、それは正しく、ダトニオイデスの嫌悪する悪平等の権化なのであった。彼自身と、もうじきにその役目からはずされることになっているかりそめの炎の当主グアモン・セミアクィルスを除くならば、その最高機関に集っているのは主人たるべき資質などないものばかり、なんと、女こどもと老人なのであった。何か新しいことをはじめようとすれば、いつもこの二者の邪魔にあった。提案がどんなに現実的で前向きであっても、慣例にないということ、ただそれだけで、ろくに話を進めることもできぬまま反対され却下されてしまう。そうして、いったん退けられた議題は、二度と顧みられることはなかった。

たとえば、かの川辺の民らに使者を放ち、和睦をなし、怪鳥ラーミアの操作法を聞いて、それをイデーン全体の財産と為すべきだという彼の斬新で画期的な意見に対しても、連中の反応はやはり、そのようなものであったのだ。

「そのことについては、いにしえの昔に、既に決定がなされておりましょう？」

金の当主ペルラの宝飾品に飾られた顔が、ダトニオイデスを嘲笑った。

「ミトラ神御自身が彼等を追放したのです。われら天にあらぬものが、その決定を覆すなど、もっての外。勇み足はおやめになるがよろしいわね、ダトニオどの」

「なぜ、そんなことを思いついたのです」

水の種族を代表する青一才は、嫌味なほど落ち着いた声で質問した。

「あるいは、従弟どのの行く末が気になっていらっしゃるのではありませんか。お気持ちはわかりますが、御家内の騒動をわれらが会議にまで持ちこまれては困りますね」

「ラーミアは、魔峰オーブの生き物」

そしてオトシンクルス家の森の死に損ないが、もったいぶった口調でまとめあげた。

「そっとしておくがよい。空にあるものは空に置け、地上にあるものは地上に置けと言うではないか」

（くそっ。わからず屋どもめ！　臆病者どもめ！）

（そんな呑気な調子でいたんじゃあ今にこのイデーンが腐ってしまうのが、なぜわからないのだ。川辺の連中は危険だ。恐ろしい。一刻も早く懐柔し併合しなければ、背中から刺されるかもしれぬではないか。何と言っても、奴らには、ラーミアがある。その気になれば、奴らはいつでもわれらを攻撃することができる。そうして、われらの豊かなる土地を奪回し得

るのだと言うに……!)

せっかくの提唱を鼻先であしらわれ、屈辱のあまり反論をする気力をなくしたダトニオイデスの瞳を、意味ありげに見つめたのは、この間じゅうひとことも口を利かなかったグァモン・セミアクィルスであった。

(そうだ……グァモンがいる。彼を味方につけることはできないか?)

が、カリクティス家の預り手は、刻限を限られた摂政にすぎぬ。やがては、ルビス・アピスト・カリクティスにその正統を譲らねばならない。グァモンがルビスに取って変わられれば、新たに加わるはまたしても女、しかもまだ乳臭い、威勢はいいが知恵が回るわけではないやっかいな娘だ。そうして、この場には、まともな男は、ダトニオイデス自身以外、ただのひとりもいなくなってしまうのだ。

(掟がいかん。なんでも伝統通りが一番と決めつける風潮がいかんのだ)

ダトニオイデスは思った。

(ミトラから出たものであるからこそ、五大家会議は、もはや古すぎる。ものの役にたたぬ。充分な血が巡らなくなって、腐臭を発しはじめている。ならば、切って捨てるがよい。さもなければ、体毒が他にまで回ってしまうのだから……!)

新しい思いつきに鼓舞されるのを感じて、ダトニオイデスはにやりと微笑んだ。その笑みに気づいたのは、またしてもグァモンのみ。

（そうだ。彼を誘いいれよう。彼ならば俺の話をわかってくれる。きっと、力を貸してくれる。彼とても、せっかくの地位をルビスごときに追われるのは我慢ならぬことであろうから。ふたりで、イデーンの改革を進めよう！）

それが、ひとつの契機であった。

5

うっすらと明けはじめる地平線を目指し、神秘の湖の霧の中を密やかに飛んで、グアモンがカリクティス家の無骨なる煉瓦城に帰りつくと、妻である雪蛍の精アミアカルバが厩に続いた玄関の間のあたりまで迎えに出て来た。

「お戻りなされませ」

どこに行っていたのだなどと、余計なことは、けして聞かない妻であった。

「なんだ。構わず先に眠んでおればよいに」

「眠みましたが。夜中に、目を覚ましましたので……」

グアモンは乗って来た火竜の首枷を手綱から外すのに忙しかったが、その言い方は何とはなしに胸にひっかかった。そっと横目にうかがってみると、妻は、細い頸まできっちりと留めた寝間着の釦をもじもじと弄りながら、うつむきがちに傍に控え、何か言いたそうだった。

グァモンは、かすかに顔をしかめて、咥え煙草を捨てた。
「どうした。何という顔色をしておる。この世の終わりでも見たか」
「……世の終わり……」
アミアカルバは肉づきの薄い幼顔をあげ、脅えきった狂気のようなまなざしで夫を見上げた。
グァモンはハッとしたが、できる限りやさしく笑って、両手を広げてみせた。妻は身を投げかけて来て、彼の胸で啜り泣いた。
妻は彼の乳ほどまでしか背がなかった。その肩は折れんばかりに細く、その腕はこどものように弱々しく、今は隠されたその翅は繊細に透明でわずかの風にも破れてしまいそうだった。寝乱れたか、少し解けて絡まった銅色の編み髪をグァモンが大きな手で撫でつけてやると、雪蛍の精は、鼻を啜りながら泣き濡れた顔をあげた。
「見たのです、旦那さま。わたくしは、見たのです……！」
戦きながら訴える妻を、グァモンは手近な長椅子にかけさせた。
「闇の中に、火の柱があがりました。大きな大きな焚き火の中に、ひとが、生きたまま投げこまれました。家が……大きな木の家のような物もありました。そこには、森の古老どのがおられ、金の精霊らの女主人どのがおられました。ひとびとは争いました。大勢が……大勢が死にました……」

「悪夢だ、アミア」
震えつづける小さな頭を庇うように自らの胸に押しつけながら、グアモンは平静に言った。
「それは、夢だ」
「でも……でも、わたくしは、あなたさまのご無事なお姿を見ぬうちは、とても眠るなど……！」
「恐ろしがることはない。わたしはここにいる。もうだいじょうぶだ」
が、グアモンもまた、我知らず背筋が冷たくなっていた。
雪蛍たちはその短い生命の代償に、一生に一度、時の壁を越えると言われている。妻は時折、無意識のうちに、自らに属するものたちの刹那の時移りを捕らえて、真実のまぼろしを見る。
（アミアが見たのは、このイデーンの行く末では……？）
「何か飲むかね。落ち着くぞ」
「いいえ、いいえ。何もいただけません」
「なあ、アミア？」
急きこんだ調子にならぬよう気をつけながら、グアモンは、尋ねた。
「その……夢では、そなたはどこにおったのだ？」
「わたくしは」

両手を覆った指の隙間から覗く砂苺色の瞳を宙に彷徨わせて、妻は記憶の絵巻を探り、感情のない声で告げた。

「ええ。わたくしは、飛びました……夜に……赤い……赤い雨が降っていました……わたくしはひとりでした。とても、寂しうございました。悲しうございました」

その時の感情が蘇って来たかのようにまた涙をあふれさせがくがくと震える妻のからだに、そっと腕を回してぬくめてやりながら、なお鋭く、グアモンは聞いた。

「ダトニオイデスは？」

「七の頭領どのは……いいえ、見えませなんだ」

「シフィルは」

アミアカルバは瞬かない瞳を宙に据えたまま、眉間に薄い皺を寄せてしばし考えこんだが、やがて、諦めたように首を振った。

グアモンは唇を結んだまま、幼けなき妻の様子を掌を通じて伺っていたが、やがて、そっと囁くように言った。

「では、ルビスは？」

「はい。ルビスさまは……」

不意に、アミアカルバはぴくりとからだを固くした。戸惑うグアモンが宥める間もなく、急激にもがいて、腕を抜け出すと、おとなしい顔をせいいっぱい悪意に歪めて叫んだ。

「ほんとうはそれがお聞きになりたかったのでしょう！　わたくしのことなど、案じてくださってらっしゃるようなふりをして……でも、あなたさまは、誰よりもルビスさまのことを考えておいでなんだわ。いつだって、いつだって！」

「アミア！」

「なぜ、カラ・セミアクィルスの消息をお聞きになりませぬ？　なぜあなたさまの血を分けた娘のことを、真っ先にお尋ねになりませぬ？」

「これ、静まりなさい、みなが起きる」

「なぜでございますか！　実の娘よりもあのルビスのほうが大事だからですか？　お答えくださりませ！」

しゃくりあげながらも激しく、妻は言った。そのからだから発する熱のない光が表まで漏れ、叫ぶような声のこだまは、館の半地下の長い廊下にいつまでも響き渡った。

グアモンは椅子にかけたまま、両手を固く握りしめ、また開いた。

「……尋ねたかったが、尋ねられなかったのだ」

そのそっけなく冷たい口調と顔つきに、妻は憎々しげに唇を噛んだが、グアモンは薄く開いた瞳を妻の肩ごしの対面の壁に据えて、続けた。

「そなたがそのように神経を立てておるからだ。幻想とはいえ、カラの災難の模様をありありと思い描けば、そなたは、ますます取り乱すに決まっておるではないか。森の長の話が出、

金の女主人が出た。他の族長たちのそれぞれの様子も聞くとなれば、順序として、いずれはルビスにも話が及ぶが自然であろうが」

「……族長たちの、順序……」

アミアカルバは笑った。

「なるほど左様でございますわね。……もう下がらせていただいてようございますか。朝までに、少しは眠みとう存じます」

「ああ……行くがよい。わたしも間もなく参る」

「では」

優雅すぎてほとんど慇懃と言ってもいいほどの会釈をして歩き出した妻は、数歩向こうで、つと立ち止まった。

「巨きな、鳥」

つぶやいた幼女のような声が、グアモンの耳を打った。

思わず青ざめて顔をあげるグアモンを振り返ると、妻は歌うように言った。

「とても巨きな鳥が、空一面に、たくさん舞っておりました。はじめわたくしには、なんともそら恐ろしく思えましたが、よく見ると、それらはとても美しくやさしい感じでした。ですからわたくしは、彼等について行くを望んだのです。力の限り、彼等と共に飛んだのです」

「どこに……」

喉の奥から、嗄れた声が押し出された。
「どこに向かって、飛んだのだ⁉」
「さあ、どちらでしょう」
気色ばんで立ち上がるグァモンに、妻は、目鼻の何もかもが小作りな童顔をころころと笑わせながら、首を振った。
「ただ、ついて行けば良いと思っていたのです。ねぇ、旦那さま、あれは音に聞くラーミアなる不死鳥たちだったのではないかしら。わたくしは、生憎と、絵ものがたりでしか見たことがありませんけれども。そんな気がしてなりませぬ。……では、遠慮なく、お先に失礼させていただきますわ」
淑女らしく足音も立てずに、妻の背が歩み去った。暗い廊下の端にそれが見えなくなってからも、まだしばらく立ち尽くすグァモンのさつくしかめた横顔に、眠りこんだ火竜のうっすらとした灯りが、不安の色濃い影をなして、揺らめいた……。

6

ダトニオイデスの妻、豊満なるノーザンバラムンディは、片腕を耳から上に伸ばしたしどけない恰好で太平楽に眠りこんでいたが、夫がうっかり寝室の床をきしませると、垂たげな

まぶたをどうにかこじ開け、両腕を広げて、口づけを乞うた。

「まあ、どちらの美姫に誘惑されたの？」

「なんのことだ」

「うちの色男さまは、お吸いにならない煙草の匂いをさせてらっしゃる。是非、その冒険譚を聞かせていただこうと……ふわあああ……」

言い終わらないうちから、彼女は大欠伸をした。

ダトニオイデスは快活に笑い、妻の、ツンととがった鼻先をつまんで扱った。ノーザンバラムンディはたちまち目覚めて、脳天から喚声をあげ、掛け物を剝ぎ、みごとな脚を勢いよく振り上げて夫を蹴りつけた。ダトニオイデスの太い腕にあえなく押さえこまれると、妻はやみくもにあがいて枕元の水差しやら置物やらを床に叩き落とし、息を弾ませた。石の寝台は、ふたり分の体重に、ぎしぎしと激しく鳴った。

次の間でおとなしくダトニオイデスを待っていたプレコトムスは、これらの一連の物音がはじまると、ギクリと困ったような顔をした。無骨な頬にみるみる血がのぼる。窪んだ目はおどおどと壁をさまよい、市松模様に黒白の石を納めた床を経巡り、とうとう自分の膝に落ちた。

「……すまん。手間取った」

「あいや、とんでもございませぬ！」

プレコトムスは弾かれたように立ち上がった。だが、ダトニオイデスが通り抜けたために、一瞬いっぱいに開いた扉から、ぐったりした美しい女の寝姿が覗けてしまったので、あわてて明後日の方角を向いた。

（たいへんお早いことでした、もっとゆっくりなさっても構いませんでした、と言ったならば、この場合、もしやひどい侮辱になってしまうだろうか？……）

真っ赤になって悩む忠臣の下手糞な惚け顔を見て、その愚かな誤解を感じとったダトニオイデスは、片眉を掲げて悪そうにニヤニヤした。

プレコトムスは主君の視線から逃げるように歩みだすと、きびきびと扉に錠を下ろしてまわり、その間にようやく気を取り直した。改めてダトニオイデスの前に進み出、無言のまま掌を取って、うやうやしく唇をつける。

「勇気、正義、勝利が、いつもあなたさまと共にありますように」

プレコトムスは、コリドラス家の男たちに長く伝わる呪のことばを唱えて、素早く宙に一つ十字を切った。

「ありがとう。おまえもそうであるように」

深々と下げたプレコトムスの白髪頭に同じようにしてやると、ダトニオイデスは、頭を回して首の骨を鳴らし、大義そうに椅子にくずおれた。美しい石を切り出して巧緻な模様を刻んだ、幅が広い背もたれの高い椅子である。

「ううう。やれやれ。疲れたよ」

「……左様でございましょう」

肥沃土の主は座を進められるのをさりげなく待ちながら、よくわかってると言わんばかりにうなずいた。ダトニオイデスはあっけにとられ、次に大声で笑い出した。

「違う、違うぞ、プレコ！　おまえは勘違いしている！」

プレコトムスは分厚い下唇を、不服そうにつきだした。

「何がでございますか」

「だからな……いや。もういい。妙な言い訳をさせるな。そっちが勝手に憶測するのが悪いのだ。そら、座らんか、遠慮をするでない」

ダトニオイデスは舌打ちをして、ようやく相手をかけさせた。

「……で。首尾は？　どうだったのだ？」

「はい。それが、でございますな」

プレコトムスが、意外にも金銀の縫取りのある美しい綾織の手布片を出して汗を拭いたので、ダトニオイデスの瞳はからかうように大きくなり、また小さくなった。

「花崗岩の精霊バルブスは我が姪の息子にて私の口からあまり誉めるも何でございますが、岩格闘術におきましては右に出るものとてなく、また、その部下にしているものたちには、山鼠の主ゲメナ、軟泥竜の使い手ブンバ、棘蚯蚓を預かるビンガ……」

「ああ、御託はいいから結果だけを言え。俺は上手い嘘つきはかなり好きだが、もったいぶった奴と回りくどいのは御免だ」

「……も……申し訳ございません！」

プレコトムスは椅子を飛び降りて、白髪頭を床に押しつけた。

「バルブス等は、コウデマ山中の樵小屋にて、さきほどようやく保護されました！」

「保護？」

ダトニオイデスの顔から、笑いが消えた。

「それはどういうことだ？」

「はい、我等への連絡係として例の大岩の運搬からは外されておりましたブンバが、夜半近く、ひとりこちらに戻ってまいったのです。いくら待っても、バルブスたちの姿が見えないと……そこで、我等が今一度ランデールに走り、力試しの舞台を見にいってみれば、いつの間にかあの岩がそこにあり、何者かがバルブスの道化の衣裳を着込んで、司会役を務めていたのです！」

「何者かだと？　確かめてこなかったのか」

「そうおっしゃられても……あの騒ぎで、私もすっかり何が何やら」

「騒ぎは起こったのか！」

「はい、ほぼ、ダトニオイデスさまの計画なさった通りに。あれは確かに誰にも割れませな

んだ。集ったものたちは、みな不安に駆られて騒ぎ立てました。すると、水の若長がどこからともなくしゃしゃり出て来て、説教をしました。あの嫌われ者の稲妻の主クリプトカリオンと、今にも対決しそうになったのです。大雨が降り、炎が踊りました。しかし……」

「しかしなんだ、早く言え！」

胸倉を摑まれ、急きこむダトニオイデスに間近に睨まれて、愚直なるプレコトムスは震え上がった。

「岩は、岩は、……こなごなに爆発してしまったのです！　あたりじゅうの地面がめちゃくちゃになって、祭りは台なしです。みな不安がって家に帰りました。ですから、ともかく、当初の目的は達せられたのです。ですが……私どもが我にかえった時、彼の道化の姿は、もう、どこにもなく。敵なるか味方なるかすらも、さっぱり」

「……爆発した……？」

ダトニオイデスは家臣を離して、元の椅子の広い背に気だるくもたれた。

「そうか……あれが……」

「驚きました」

「ああ。あれはな、プレコ、昔、俺の揺籃であったのだ。……傲岸爺めが、赤子の俺が夜泣きや癇癪をおこすたびに、山が震え岩が動くにうんざりして、あの丈夫な大岩をくれたそうだ。餓鬼の時分に、俺自身が何度も欠いてずいぶん禿びてしまってはいたが……そうか……

あれが、ついに砕けたか……」

「まことに申し訳ございませんっ！」

白髪頭は、もう一度床に擦りつけられた。

「いや、いいんだ。惜しんでいるのではない」

そう言いながらも、ダトニオイデスは重たげに息をつき、指先を触れ合わせた手に鼻稜をもたせかけるようにした。その姿は、プレコトムスにはやはり、遠い回顧に浸っているように思えた。その性不断に陽であっておよそ静かにひとり憂うることなどのない主君ゆえ、そんな顔つきは胸に迫った。忠義なる老僕は、そっと首をうなだれた。

「……あんなことに使えば、誰かが割ることにはなるだろうとは思っていたんだ。たぶん、そいつが、俺にとって一番手強い敵になるだろうと、半ば占う気持ちでもあったのだが……いやはや……」

急に静かになったので、プレコトムスは、そうっとうわ目使いに様子を窺った。

ダトニオイデスは、もはやいつものように笑窪を作って唇を丸めニタニタしており、まもなく、大声をあげて笑いはじめた。

「……族長……」

「ああ、すまん。なるほど。確かに。いや、これは愉快だ」

膝を叩いて狂気のように笑い転げるダトニオイデスに、プレコトムスは泣きだしそうな情

けない顔をした。その顔をチラリを見ると、長はますます可笑しがった。
「ディアルトだ、そいつはディアルトだよ、プレコ。わからんのか？」
「まさか、そんな筈は」
「うむ。確かに、俄には信じられぬことだ」
なんとか真面目な顔を繕って、ダトニオイデスは座り直した。
「よし。すぐ、ゴスリニア島に使者を放て。あれを繋いだはずの大岩がどうなっているか、早急に確かめるのだ。人選はおぬしに一任する」
「はっ。ただちに！」
「待て。もうひとつあるんだ。明朝早々のうちに、樵小屋に軟禁されたと称する者どもを全員まとめて俺のところに寄越せ。ふふん、どのような言い訳をするものか、聞いてみなくてはならぬからの」
「承知いたしました」
「ふふふふ、いやぁ、そうか。まったく驚いたな」
（これを聞いたら、グアモンは何というだろう？）
びっしりと飾りを施した肘掛けを、一定の拍子に叩きながら、ダトニオイデスはきらきらと瞳を輝かせた。そのような時、主君が何かよからぬことを考えているに違いないことを、プレコトムスは知っていた。下手に邪魔だてすると、どんな目に合わされるかわかったもの

ではないということも、よく知っていた。
だから彼は、大股に部屋を横切り、扉のところで、退出の合図をするために律義に振り向いた。
「ご苦労だった」
気づかれぬかと思ったが、主君はこちらを見もせぬまま、低く言った。
「確かに予定は狂った。が、これでまたいっそう面白くなって来た。なあ、そうは思わんか？　プレコトムス」
「……わかりません」
プレコトムスは自嘲的につぶやいた。
「愚かなる私には、何もわかりませんよ、ダトニオさま……」

7

早朝の森の淡い靄の中を、老人はゆっくりと歩んでいた。
小鳥等は愛らしい声でちゅくちゅくと鳴き交わし、栗鼠や飛猿の類が頭上を駆け抜けあるいは飛んだ。木々はどれも高くそびえ、伸び伸びと枝を張っている。さまざまに色づいた葉の間からまっすぐにさす陽光が、下生えの緑の濃淡を際立たせる。影深い叢のあちらこちら

には、秋の実りである茸もまた、毒々しいまでに鮮やかな姿を見せていた。
それらのすべてに、満足そうな慈しみ深いまなざしを投げ与えながら、老人は何かに惹かれるように、奥へ奥へと歩き続けた。
やがて木立の中にぽっかりと開いた草原に出ると、老人は日向を選んで腰を下ろした。そばの枯れ枝を一本なにげなく手にとり、まぶしそうに顔をあげて、靄の立ちこめる空のどこかに、じっと見入った。風を嗅ぎ、移りゆく時の流れに耳をすませているかのような、落ち着いた様子であった。
癖のない総髪も、口髭も顎髭も眼窩に垂れかかる眉もみな、銀味を帯びるほどに白く、皺深い顔や手の皮膚はかすかに赤らんでいかにも風雪に耐えて来たといった感じに乾いている。だが、落ち窪んだ彼の眼のあたりをじっと覗きこめば、ひとは、そこに若々しく鮮やかな碧眼がふたつ並んできらきらと輝いているのを見てとることができただろう。
ミラルダ・シクラソマ・オトシンクルス。森の長老とも呼ばれる、木の精霊一族の主人であった。
彼は、じっと動かなかった。
森もまた、いつしかやさしい静寂に包まれた。鳥も、獣も、カサとも音をたてなかった。
ここに住む生命たちの中の高い知性を持ったものたちがみな、無駄なおしゃべりで老人の安らぎの時を脅かすまいと口をつぐんだため、劣るものたちも何かを感じ、黙りこまずには

いられなかったからである。

日は移り、日差しは少しずつ強くなった。それでも老人は動かなかった。何千年と生きて、どこまでも根を張った白杉の樹のように、じっとその場を動かなかった。

森に生きるものたちはみな、息をひそめたまま、ひっそりとその後ろ姿をうかがった。だが、もともとやんちゃな性格の獣たちは、だんだんじっとしているのが辛くなって来たのだった。梢の上の深山雀が、センニンソウの薮の中の斑兎が、もじもじ身動きをしかけては、遠くから他のものにギロリと睨まれて、べそをかいた。

森のものたちは、老人が何かをしてくれるのを、じっと待った。だが、老人は、やはり動かなかった……。

ちょうどそのころ、草原に面した大きな胡桃の樹のうろで、幼い小人の兄弟が遅い目覚めを迎えようとしていた。

「あ～～ふ。よく寝た。……うわぁ……まずいや。また寝坊しちまった！　おい、こら。起きろよっ」

兄のドンコは、自分の親指を美味そうに咥えてまだむにゃむにゃ幸福そうに夢を見ている弟のエサキンから、枯れ葉と栗鼠の抜け毛を詰めた蒲団を無惨にひっぱがし、その小さな背を足指で小突いた。

「そらっ。朝だぞ、起きろよ」
「ああん。寒いよ。眠いよ、にいちゃん」
「起きろったら、この横着者」
「もう少し寝かしてくれよう、すごくいい夢なんだよう」
「だめだ」
ドンコはかぶりを振った。
「今日も蔦屋の姐御の手伝いをする約束だろ。俺たちの分担してるところだけ、紅葉が遅れてる。早く行かなきゃ、ぶっとばされるぞ！　さぁ、起きろ起きろ」
「だってさぁ、今、肉料理が来るとこなんだよう」
「次の場面は、おまえが喰われる予定なんだぞ」
「うへっ！」
エサキンは両手を振り回し、あわてて寝床を這い出した。
「ほんとうかい、にいちゃん？」
「ああ、そうさ。なにせ、おまえはよく太ってうまそうだからな」
ドンコは顎を突出して、胸を張った。兄のほうは、痩せっぽちでひょろひょろしている。
「だから急いで助けてやったんだぞ。恩に着ろ」
「うん。ありがとう、にいちゃん。ああ、怖かった」

森のこびとの兄弟は、古びて継ぎの当たったレギンスに脚を通し、きちんと畳んでおいただぶだぶの上着を着て、先の折れた三角帽子を被り、半割りのどんぐりを加工した丈夫な靴をはいた。

そうして、そこらの葉に溜まった露で顔でも洗おうと、うろから顔をだした途端に、何十という非難の瞳にぶち当たったのである。

「な、なんだ？」

凍りつくドンコの肩に、寝惚け眼でぶち当たったエサキンは、一拍遅れて事態に気づいた。

「に、にいちゃあん……！」

鳥や、栗鼠や、蟲たちまでが、うろの入り口の周りに集まり、かんかんになった顔をして、無言のまま、こちらを睨んでいるのだ。表情の変わらぬ虫どもは、ブンブン羽ばたいて唸ってみせた。

兄弟は手を取りあって震えた。

（こいつら、みんなしてぼくたちを喰いに来たのかな？）

エサキンは思った。

（ああ……そんなら、やっぱりもう少し寝ておけば良かった！）

「ど、どーも……おはようさんです、はい」

必死で気を取り直し、爪をたててしがみついて来る弟のころころしたからだをうろの内側

に肘で追いやりながら、ドンコはひとつふたつ欠けた歯を剝きだしてニィッと笑った。相当にわざとらしい笑顔であった。

「これはこれはみなさんお揃いで、どうかしましたか?」

「しっ！　大きな声をたてるんじゃないよ。ちょっとそこをお退き！」

「へいへい」

ドンコは素直にからだを引いた。すると、大きな毛むくじゃらのからだが、パッと枝を揺らして、うろの内側に入って来た。連中の代表格である熊栗鼠のおっかさんである。

エサキンは暗がりで栗鼠のいかにも何でもガリガリと砕きそうな大きな前歯だけを眼にしたのだった。だから、ヒッと言って飛び上がり、片付けてあった蒲団に頭から潜りこもうと、無理をした。ぼろいレギンスの縫目がビリッと音を立てて破け、小さな尻が剝きだしになった。その冷たさに、いよいよ喰いつかれたかと観念したエサキンは、たちまちくたくたと気を失った。

「全く、おまえたちと来たら間抜けだね！」

熊栗鼠のおっかさんは、厚い胸に威張った感じに腕組みをし、片足をパタパタといらだたしく踏み鳴らしながら、キイキイ言った。

「今、長老さまがいらっしゃってるんだ。何か、じっと考えてらっしゃるようなんだよ。みんな気をつけて静かにしてるってぇのに、ぎゃあぎゃあ喚いてさ、今ごろまでぐずらぐずら

寝坊なんかして、なんだい、いい若いもんが。貧乏たらしい恰好しちゃって。まったく育ちの悪い奴らだったらないね！」
「そいつぁ、どうもすいませんでした」
ドンコは帽子を脱いで、丁寧に頭を下げた。
「俺たち、去年の大雪の時に親あなくしちまって以来、ふたりっきりでおっつかっつやってきたもんで。確かに、育ちが悪いんです。熊栗鼠のおっかさん、どうぞ、これに懲りずに、今後とも、何かと教えてください。よろしくおねがいします」
「ああ。……そうだっけ」
もともと気のいいおっかさんは、兄弟の不幸を思いだすと、すぐ顔色を変えた。怒りすぎたことに照れたように、つやつやの尻尾を撫でながら、かすかに涙ぐんでさえいる。
「親がなかったんだっけ、あんたらは……気の毒にねぇ」
おっかさんはクシュンと手鼻をかんだ。
ドンコはその隙に、そっと舌を出した。
（うるさがたの婆あには、この手に限るぜ！）
「ごめんよ。あたしも少し言いすぎたよ。……ねえ、そうだ。ドンコ、あんた、良かったら、長老さまのところまで、行ってみておくれでないかえ？」
「お、俺が？」

ドンコは面食らったが、熊栗鼠は自分の思いつきにすっかり夢中になっていたので、くりくりした瞳を輝かせ、熱心に続けた。
「どことなく悲しそうなご様子みたいで心配なんだが、あたしら、声をおかけするのは、あんまり差し出がましいじゃないか。悔しいけど、あんたたちのほうが、まだましってもんだろ。ねぇ、あんた、行って、何かあたしらでお役にたてることはないか、聞きだしておいでよ、ねっ？」
「う～～ん……」
「ここだけの話だけどさ」
熊栗鼠は、けして真実になることのない慣用句を美味そうに口にした。
「長老さまは、先だって、ご令息もお孫さまも亡くしてしまっただろ。あんたのおとっつぁんおっかさんが死んじまったっていう、その同じ大雪の時にさ。逃げ遅れた樅の木のご老人を助けだそうとして、雪崩の下敷きになっちまったって」
「え、そうだったんかい？　おいら知らなかった。なんせ、こっちもこっちで、それどこじゃなかったもんで」
「こら、あんたのてておやなんかといっしょにすんじゃないよ！　失礼な子だねっ！　……ああ……継ぎの長さまは、ほんとうに立派な、ハンサムな、おやさしいかただったのにねぇ……もったいないねぇ、ありがたいねぇ……ぐすん。ねーねー、こりゃ噂だけどさ、それで

ちゃっかり次の長になることが決まったヘテランテラとかいう奴は、美尾猫の精かなんか嫁さんにしちまってたんだってよ。てことはさ、次の次の長にはさ、よその奴らの血が混じっちまうってことじゃないか！　そんなのイデーンはじまって以来だよぉ。きっとさぁ、長老さまは、そんなこんなお考えになって、暗ぁい気持ちにおなりなんだよぉ。だから。さぁさ、早く行って、お慰めしておいで！」

「えっ、ちょっと、待ってくれよ、俺そんなのやだよ！」

「バカバカバカ！　なんて強情な子だい。いいから、行っておいで。行っておいでったら。いいね！」

「おっかさぁ～ん」

「いいねっ！」

……そう言うわけで、小さな兄弟は森のものたちの斥候となって、恐る恐る偉大なる長老さまに近づくことになった。

さしものドンコも、ひとりではあまりにも心細く、泣き虫で臆病者の弟でも、いないよりはマシだと思った。だから、失神したまままもう一度夢の国に旅して何やらうんうんうなされていたエサキンを、再び『助けだして』やったのであった。

幼いノームがふたり、どきどき胸を弾ませながら、抜き足さし足近づいて来るのに、老人

はとっくに気づいていた。実を言えば、獣や鳥たちがその小さな頭を悩ませ、せいいっぱいに気を使って、遠巻きに自分を見守っていることも、はじめから知っていたのである。
が、老人は、疲れすぎていた。そして、小さなものたちにも、平気で甘えることができるほど充分に年を取っていたのである。
彼は、もう、このイデーンでも最年長のほうから何人でもないほどの年寄りになってしまった。みながみな、老いたるものを尊重してくれる。下手に意地を張って頑張ってみせ、心配をかけるよりも、他人の好意を素直に受け入れて、感謝のことばをかけてやるほうが双方の楽であることを、彼はよく心得ていた。
だから、幼い兄弟が、のぼせたような顔をして、その小さなからだに可能な限りの勇気を振り絞って、尊い血を引く長老さまに声をかける決心をつけるまで、彼は黙って、空のどこかを見つめたまま、じっと動かずにいることにしたのである。
兄弟は、長い時間をかけて、老人のすぐ足許までやって来た。老人の衣の裾に触れそうなところまで来ると、抱き合うようにして、立ち止まった。
やがて、痩せっぽちの兄が、太った弟を乱暴につついた。弟がべそをかいて首を振ると、怖い顔をして、もっと強く小突いた。弟は真っ青になって後ずさりするうちに、老人の衣に足を取られて、転んだ。
森じゅうが息をのんだ。非難の視線が矢になって、弟に飛んで来た。

老人は可笑しくなり、また、みなを可哀想に思ったが、恐れる必要のない何かを怖がって意味もなく不安な日常を送ってしまう臆病なものたちの愚かな癖を治すよい機会であるのだと考えて、敢えて知らん顔をした。

エサキンはしばらく地面につっ伏していたが、鼓動が静まりはじめると、ぶるぶる震えながら、なんとか立ち上がった。踏んでしまった衣に、彼の涙と鼻汁の染みもついていた。彼は悲しそうに、その染みを見つめた。

どうすればいいかわからなかったので、とうとう兄のドンコを振り向いたが、兄は冷たくそっぽを向いていた。エサキンはうなだれ、何かその小さな頭で一心に考えようとしたが、頭の中は、嵐に巻きこまれた木の葉のようにめちゃくちゃに動くばかりで、役に立つようなことは何も思いつかなかった。

エサキンは観念した。おんぼろな袖で汚れた顔を丁寧に拭くと、しばらく、南天の実ほどしかない拳をきつく握りしめて、息を整えた。

急にギュッと瞑って開けたその瞳には、決死の光が宿っていた。彼は、天のいと高いところにある老人の顔を、まっすぐに見上げ、声を張り上げた。

「長老さま。……お、お館さまに、も、申しあげ、あげ、ぐげ、げ、……」

「うむ?」

老人はできるだけ厳粛を装って下を向いたが、幼いみなしご等の、あまりにもみすぼらし

い恰好とせっぱつまった表情を目にすると、たちまちいじらしさに胸がいっぱいになった。無関心な顔つきを保てるはずもなく、白い眉が、口髭が、温かい微笑みのかたちに緩んでしまった。
「やぁ、おはよう、よい天気だな。お邪魔しているよ」
白髪の老人の意外にもやさしく親しげな返答に、エサキンの外れた顎もすぽりと塡った。彼は思わず得意なような気持ちになって、どうだとばかりに兄を振り向いた。ドンコも安心のあまり、みそっ歯を見せて、パアッと笑っていた。
長老はにこにこと相好を崩した。
「森はどうだ。暮らし良いか。たつきは立っておるのかね?」
老人が尋ねると、ふたりは元気づいて、はきはきと答えた。
「はい」
「はい、長老さま、おかげさまで」
「そのなりは、木の葉のノームたちだな。名前はなんと申す?」
「ドンコです」
「え、エサキンです」
「そうか。よい名だ」
「でへへへへ」

「バカ、ありがとうございますって言うんだっ」
「これ、喧嘩(けんか)は止(よ)しなさい」
「はいっ！」
「はあい」
ふたりは、緊張(きんちょう)してきちんと両手を脇(わき)に伸(の)ばしたまま、ほとんど真上を向いていた。大声で返事をするたびに上体がぐらぐらして、今にもそっくり返りそうだった。
老人はため息をつき、その皺(わ)だらけの手を、ふたりに向けてそっと伸ばした。
「おいで。そこは遠い。わしの肩に乗るがいい」
兄弟は顔を見合わせたが、老人の手をいつまでもそのままにしておくわけにもいかぬと覚(かく)悟(ご)を決め、恐る恐る乗りこんだ。
「よいか、落ちるなよ」
古木のようにカサカサになった老人の指に必死にしがみつきながら、エサキンは最初、眼を回すまいとしてギュッとまぶたを閉じていた。が、風の唸りと、光の縞(しま)に撫でられて、そうっと小さな眼をあけて見た。
「ひゃっほー！　すげぇや、早い早い。ねぇ、下から上に雪滑(ゆきすべ)りしてるみたいだね、にいちゃん！」
「バカ、間抜け、失礼なことを言うんじゃあないっ！」

「ほっほっほっ。よいよい。さぁ終点だ。そこらにお座り。骨ばって座り心地が悪いやもしれぬが、勘弁せえ」
老人の右肩は、その原っぱの真ん中では、ひとつだけ飛び抜けて高い位置をしめていた。複雑に入り組んだ木立の中からうかがういつもの景色ではない。頭をまわせば、ぐるりがみんな、見慣れた森の、見慣れぬ姿なのだ。
「うわぁ……」
ドンコは我知らず、帽子を脱いで握り締めた。
朝の森は、美しかった。静かに立ち尽くす木々、さしこむ光。流れる霧のヴェールの遥か彼方に、うっすらと雪を抱いたコウデマ山の山肌がごく微妙に彩られているのを、ドンコは見た。遠い空を、剣鷹らしい精悍な姿が、悠々と横切って行った。
（……神さま……。
世界を、ありがとうございます。生命を、ありがとうございます。
俺、俺、いっしょうけんめい働きます。弟の面倒もちゃんと見ます。
神さまや長さまがたのご恩に報いるように、うんとうんと気をつけます！）
ドンコの切れあがった瞳に、涙が光った。
手にした帽子でそれを乱暴に拭った時、ドンコは、何か忘れているものがあったような気がした。

（そうだ。このひとは、こどもをなくしたんだっけ）
（お館の中で、たったひとりぼっちなんだろうか？　だから、寂しくて、森に来たんだろうか？　なのに、みんなして、知らん顔しちまったんだろうか？
なのに。うんとうんと悲しいはずなのに。
長老さまは、俺たちみたいな半端者にまでやさしくしてくださった。すごいひとだ。偉いひとだ……！）
「……長老さま……ほんとうに、もったいないことです！」
ドンコがつぶやくと。
「えっ、もったいないって？　どこ？　どこに食い物があるの？」
弟がすっとんきょうな声をあげた。
「……うう……っ………」
「痛いっ！　やだなあ、抓るのは堪忍してくれよ、にいちゃん。破けちまってまだ治してないんだ、それおいらのケツの肉だよう」
「これ。仲よくしなさい」
エサキンは、兄が叱られ自分が庇ってもらったのだと思ったので、垂らした足をぶらぶらさせながら、ことさら、得意そうに調子っぱずれな口笛を吹いてみせた。だが、兄はそれ以上は何も言わなかった。感じ入ったような熱っぽい瞳を山のほうに向けたまま、黙っている。

こっちのことなど忘れてしまっているらしい。エサキンはつまらなく思った。少しふくれて、姿勢を崩(くず)した。

老人のローブはふかふかで、鎖骨(さこつ)のでっぱりがちょうどよいベンチがわりになった。持ち主のぬくもりと、かすかな体臭(たいしゅう)が、まだ少しドキドキしているエサキンの小さな胸をやさしくいたわってくれるかのようだ。

(ああ、安心だ)

(熊栗鼠のちびたちといっしょに眠る時より、いい気持ちだ)

エサキンは、満足して、またうとうとしてきた。

が、ふと静かな視線を感じたので、また兄にどやされるのかと片眼を開けた。視線を辿(たど)ってゆくと、老人の顔があった。それは、あまりにも間近だった。

ミラルダ老は、なにがなし切ないようなくすぐったいような気持ちで、いたわりと愛情をこめてこの兄弟を見つめたのだが、エサキンには近すぎて、その目つきの意味までは判然としなかった。

そこから見ると、老人の頬(ほお)の皮膚(ひふ)は古くなった木の皮みたいだし、髭は冠猿(かんむりざる)のボスの頭のようだった。大きくて虹鷲(にじわし)のくちばしのようにかすかに曲がった稜線(りょうせん)の下側に、洞穴(どうけつ)のような鼻腔(びこう)が穿(うが)たれていて、まるで、何か、恐ろしいものがひそんでいるみたいだ。唇(くちびる)は、干上がった河底のようにひびわれて、そこには……。

エサキンの髪が、これといってはっきりしたかたちのない不安に、ざわざわ逆立ちはじめたその刹那、老人がおっとりと口許を笑わせた。

エサキンは見た。長い歳月に摩滅し、うっすらと象牙色に変わった巨大な歯を。

「……ひ……！」

「危ねえ！　うわあっ」

つりあいを崩して落ちかけたエサキンにドンコがとっさに腕を伸ばし、ふたりはもつれあってもんどりうって、そのまま、まっすぐ墜落した……と思ったが。すぐそこに、下ろしたままのフードの折り返しがあったものだから、ふたりとも、網に掬われたようにすっぽりとフードにはまって、うまく止められたのである。

「むぎゅむぎゅっ」

「わあ、こりゃあいい、ふっかふか。あったかいね、にいちゃん！」

「バカ、重いじゃないか。早く俺の上からどけよっ！」

「痛いよ、にいちゃん、痛いよ」

「ほっほっほ、元気のよいこどもたちじゃ」

老人が声を出して笑うと、フードにも振動が伝わって来た。

ドンコは、老人が笑っているふりをして泣いているのではないかと思った。自分たちのせいで、亡くなった孫のことを思いだして、また悲しくなってしまったのではないかと疑って、

思わず、自然に弾んでしまうからだを固くした。だが、エサキンは大喜びで、できるだけ高く乱暴に飛び跳ねてみせた。
「まったく、少しもじっとしておらぬな。よう顔は見えぬが、そこなら落ちることはなかろう。降りたくなったら降ろしてやるから、しばらくそうしているがよい」
「ねぇ、重くありませんか、長老さま」
ドンコはそっと尋ねた。
「まさか。重いものか」
「あ〜あ、いいなあ。こんな蒲団がうちにも欲しいなあ」
エサキンはフードの端を寝袋のようにしてうまいこと落ち着くと、うっとりと眼を閉じ、欠伸をした。間もなく、小さな安心しきったいびきが聞こえはじめた。
ドンコは弟の寝汚い姿をうんざりしたように見遣ったが、今は責めている場合でないと思い直した。
彼は三角帽子を被り直し、フードの紐を生命綱かわりに腰に結わえると、老人の耳のすぐ下まで登って行った。
「……長老さま」
「なんだ」
「あのう……俺、頼まれて来たんですけど」

「何をだ」
「ですから……つまり……」
「うん？」
「ああ、ちくしょう！」
大変な役目を押しつけた熊栗鼠の偉そうな態度を思いだしてドンコは思わず声を荒げたが、老人が穏やかなまなざしを向けるので、あわてて、言い直した。
「すみません。あのね、長老さま、みんな、心配しているんです。長老さまが、なんだか……そのう……お元気がないって」
「……ほほお？」
「もしかしたらどこか具合が悪いのじゃないか、何か自分たちが知らぬ間にまずいことして、怒らせちゃっ……お怒りを買ってしまっちゃったんだったらヤバ……大変だって、みんな、すっかり怖がっちゃってるんですよ」
（ああ、おいらはなんて上手な嘘つきなんだろう！）
掌の冷や汗をレギンスの尻に擦りつけながら、ドンコは続けた。
「長老さまがお見えくださったことは、ほんとうに嬉しいんです。でも、みんな、そんな立派なかたを近くで見たことなんかないから、頭混乱して、うんとあがっちゃうんです、だから、教えて欲しいって……どうすればいいか、言ってくだされば、みんなほんとは歓迎して


Mutsumi

るんですから」
「そうか」
老人は眼を細めた。
「それはすまぬことをした。なに、少しひとりになってな、考えたいことがあったのだよ。おまえたちが思い煩うことはない」
「はぁ……そうですか」
ドンコは老人が無理をしていると思った。自分の目を避けるようにしたのが、何よりの証拠だと思った。
そうして、一人前扱いしてもらうこともできない小さな自分に、静かな悔しさを感じて、ついうつむいてしまった。
「ドンコ?」
「はい」
「おまえ、わしが怖いか?」
こびとの少年は、顔をあげた。そして、老人の瞳を挑むようにまっすぐに見上げると、真剣な顔つきのまま、視線を逸らさずに首を振った。
老人がからかうような光を瞳に踊らせたのを見ると、彼は決然と老人の巨大な顔に歩みより、両手をその頬に注意深く触れ、つまさき立ちをして、小さな小さな接吻をした。

「最初は、少し、おっかなかったです。でも、今は、ちっとも怖くなんかありません。あなたは、俺たちみんなの、おじいさまみたいなかたなのですから」

老人は途方にくれたような瞳で、黙って彼を見つめた。だから、彼はもう一度、きっぱりと繰り返した。

「あなたは、森のみんなの、おじいさまです」

「ありがとう、ドンコ」

照れたように、困ったように、老人は口髭をもぐもぐと動かした。そして、あの雪冠を抱く山に、遠く瞳を投げかけると、つぶやくように言った。

「だがな……わしは、恐ろしい」

「何がですか」

「何もかもさ。あの山も。あの空も。流れ去ってゆくこの時というものも……そうしてな、このわし自身のことも、恐ろしく思う。この老いさらばえたからだに流れる古き血をな、とても恐ろしいものだと、思わずにいられぬのだよ、ドンコ……」

老人のことばに反応するかのように、ふと、山のほうから、冷たい風が吹き下ろして来た。急な風に、帽子が飛んだ。ドンコは激しく髪をなぶられながら、前かがみになって堪えた。老人の頬に触れていた手にも力が籠ってしまった。

老人は少年を守るように、大きな手を翳してくれた。唇を結び、眼を細めて、じっとまた

何かを考えこんだ。
　さっきの言葉や今のこの表情の意味は、ドンコには、よくわからなかった。だが、老人の瞳に映る深い洞察と諦観と、そして悲しみに、激しくつき動かされた。そんな思いは、生まれてはじめてだった。両親が死んでしまった時にも、それほどの感情に動かされはしなかったのに、今、彼のからだは、彼のこころから湧き上がる思いの強さに圧倒されて、ぶるぶる震えたのだ。彼は自分のその気持ちや状態を表すことのできるようなことばを知らなかったので、何も言うことができなかった。
　だから、彼はただ足を踏ん張り、顔をあげて、その小さな瞳にせいいっぱいの熱意と闘志をこめ、老人の見ていると思われる方角の空を、老人と同じように、一心に睨みつけたのだった。
　いつしか、身を潜めていた鳥や獣たちが、ひとつまたひとつ、静かに姿を現して、老人とこびとたちの周りを輪になって囲んだ。輪は、次第に大きく、厚くなった。
　それでも、森は、まだ静かだった。
　清いほどに静寂だった。
　老人のからだが壁となってくれたおかげでこの強い風にも当たらなかった太っちょエサキンがフードの蒲団に包まって幸福そうにつぶやく寝ごとばかりが、その静けさの中にかすかに聞こえていたのである……。

8

「召集をかけるわ！」

女総裁の気取った声が、アヌビアス家の黄金城に轟き渡った。

冷たく広がるパンガシアノドン・ギガスの入り組んだ海岸線に面した峻厳なる断崖に聳えたつこの金襴たる城塞の最上階のホールに、金の精霊等の当主、ペルラ・ナナ・アヌビアスの玉座があった。前にも後ろにも脚にも肘掛けにも座面の裏にさえも金銀宝石細工を施し、とびきり美しい麗豹の毛皮を敷いたその椅子に、しかし、彼女は座っていなかった。

色とりどりの豪華な糸を、寸の隙もなく刺繍した女王のようなスカートの裾から、金色の絹のペチコートの縫取りと、同じ色の繻子の靴をのぞかせて、いらいらと歩き回っていたのである。

「すぐに、そう、すぐに会議を開きます！　その道化なるものの正体をできる限り早急につきとめなければ！　ああ、それに、シフィルの勝手なふるまいについても、問題にしなければ！　まったく、あの子ったら、何さまのつもりなんだか……」

「奥よ……」

トリファスキアータは天鵞絨の長椅子にしどけなく凭れ、氷の塊を包んだものを額に載せ

て、うめいた。

「後生だから、もそっと静かに話してくれぬか。さもあらねば、うわんうわん鼓膜だの脳天だの振動するばかりで、何を言われているやら、儂にはさっぱり」

「だあから、お酒なんか召し上がらなければいいんですっ！」

ペルラは、まつげのない冷たい瞳を夫に向けて、いっそう音程をひき上げた。

「ああたのお祭り好きはよっく存じておりますからね、私だってひとの愉しみを無碍に邪魔するような依怙地な女ではございませんもの、どうぞいらしてくださいと申しましたわ、たっぷり楽しんでいらっしゃいませと、ええ、ええ、確かに言ってさしあげましたとも！　けぇれども実際ひどく気が揉めましたのは、ああたのことですからねぇ、すぐに調子にお乗りあそばしてお羽目をお外しにおなりになり過ぎるに決まっているってぇことでしたのよ！　ご覧なさい、そのとーぉおりじゃありませんの！　ちょっと。ああた。何か弁解なさったらいかが？」

「ああ、うう」

トリファスキアータは唸った。

「わたくしが一番気に入らないのはですね、ああた、若いひとばかりになる時間にまでぐずぐず残って、みっともないだあらしないとんでもない恰好を、一般大衆にお晒しにおなりあそばされたことですのよ！　ああ、だあからほどほどに切り上げてさっさとお戻りになれば

宜しいのに、ああ、まったく恥ずかしいったらありゃあしませんですわ！　わたくし、もう一生ランデールになど参れません。わたくしが歩けば、きっとみなが指をさして笑うんですわ。あれがあの破廉恥な酔っ払いのトリファどのの令夫人であることかと、陰でこそこそ、さも可笑しそうに言われるに決まっているじゃあございませんの！　ああ、ああ、アヌビアス家の栄光も地に落ちたものだわ！　ああたのようなかたがいらっしゃるおかげで、世の中は、まったく安泰だったらございませんことねっ！」

　トリファスキアータは、妻のことばを半分も聞いていなかった。それは寄せては返す波の音のようなもので、ひとたび耳を欹てればけして止むことなどないと思い知らされるが、注意を向けさえしなければ取り立てて気に触るほどでもない。要は慣れの問題であった。
が、彼が聞き流していると知れば、妻はちゃんと聞かせようとして、さらに苛酷になり意地になるだろう。少なくとも、よく聞いているふりはしておかなくてはならない。

　痛む頭にしかめた眉や、むかつく胃を堪えて噛んだ青い唇が、自らの悪行を悔い昨夜の醜態を恥じるあまり暗く沈黙している姿に見えればよいがと祈りつつ、彼は、ホールの海側の長細い窓越しに、外を見つめた。焼きを入れたばかりの鉄のように青黒く光る海面を眺め、どんよりと重く垂れこめた雲を眺め、水平線の彼方に広がるけして溶けたことのない氷原を眺めた。そして、いっそ思い切ってあの窓から宙に歩き出したら実にさばさばするのではないだろうかと、考えを巡らした。

（さすれば、この不名誉なる二日酔いの臓腑も、尊大にして無神経な妻の煩わしい世迷いごとも、何もかもみな、海の藻屑と消えてしまうことであろうなぁ）

このあたりの海は冷たく、奇岩に富み、天候の変化が激しかった。今日はまた一段と風が強く、波が荒かった。

これほどの高みから飛び降りれば、いかな飛びこみの達人とて、助かる心配はない。実際トリファスキアータは全くと言っていいほど泳げないのだから、実に頼もしい。たとい落下の途中で気絶し制御を失ったとしても、安全確実に死ねるに違いなかった。そしてまた、もともといつの日か滅ぶべきさだめであるこの肥満した魂のいれものは、波が、岩が、潮の流れが、どこか誰も知らぬ海の底に連れ去ってくれるのだろう。最悪の場合にも、崖の途中に巣をかけた冠鵜や回遊する牙海豚の連中が、最も小さき骨のかけらまでも、きれいに始末してくれるに違いない。

冬は遠くなかった。遥かな氷の原が、すぐ鼻先までその範疇を広げ迫って来る日も、そう先のことではなかった。極寒の時期を越え新たな春に向かうころともなれば、氷の大陸から千切れた分厚い塊がこの城のすぐ下まで流れ来て、数多の岩に当たって欠け落ち、ついには粉々に砕けるだろう。一晩じゅうそんな氷塊の崩れ去る鈍い響きが止まぬ日もあり、特に巨大な流氷が強い海風に吹き寄せられれば、この堅牢な城全体が大地震にでもあったかのようにぐらぐらと揺れることもあるだろう。そんな日にもペルラは、おそらくなにごともないよ

うに平然と眠りつづけるのだ。跡継ぎとして生まれ落ちたその瞬間から、この寒風凄まじき海辺の城に暮らしつづけた彼女にしてみれば、激しい怒濤も巨大な流氷もそれらの演ずる凄まじい格闘も断末魔のあがきも、すべて、ただよく馴染んだ子守り歌のようなものでしかないのだから。

（要するに、この海とてペルラには勝ち目がないのだ）

その思いつきにうっかりニヤリとしてしまってから、トリファスキアータはあわてて表情を引き締めた。だが、勘の鋭い彼の妻は、もちろんそのような最も見ていて欲しくない時をけして見逃す性分ではなかった。

「あぁた！」

不運な男が長椅子の上で、ギュッとからだじゅうに力をこめた時である。

「う、うわぁぁぁ……！」

黄金の一枚板で作られた重たい扉を開け放って、彼等の長男が走りこんで来た。その後には、黒い顔がより目立つような糊のきいた真っ白いエプロンをつけた石炭の妖精が、短い足をちょこまかと動かし、大きな籠を引きずるようにして、まろびながらついてくる。

「んまぁ、カボンバ！」

重たげな衣裳をじゃらじゃらと鳴らして近寄ると、ペルラは息子に両腕を広げた。

「どおおしたの、まぁまぁ、そんなに泣いて。どうしたの、うん？」

自分よりも背丈の高い息子の顔をおろおろ見上げながら、ペルラは夫に対したのとはまるで違う甘くやさしい猫撫で声を出した。と、同時に、有無を言わさぬ勢いで、横ざまに腕を伸ばしてもいるのだから見事なものだ、と夫は思った。

ようようこの場に辿りついた短軀な子守りは、息を弾ませながらも即座に籠の中に手をつっこみ、魔法のように、染みひとつない手拭いを取りだして、その手に渡した。ねばつく涎を引いているのが遠くからでもはっきりと見えるほど大口を開けていつまでも泣きじゃくる息子の顔を、母は乳幼児にするように、せっせと拭いてやった。

トリファスキアータはとりあえず妻の関心が逸れたので、ホッと息をついた。しかし、息子の姿を見るといつもそうであるように、なんとも落ち着かない、嫌な気持ちになった。

彼等は種族の長たるべきものの務めとして、非常に若いうちに結婚したのだが、数年間というもの、全く子宝に恵まれなかった。口にするものや触れるものはもちろん、会話する相手から時刻や方位にまで気を配り、遠い親戚のもたらしたあやしげなる護符を寝所じゅうに張りめぐらせもしたが、吉兆はなかった。

神経を参らせたペルラは、ある嵐の夜中、眠んでいた寝台から急に起き上がると、寝間着のまま、アヌビアス家の宝物蔵に忍びこみ、奥深くに厳重にしまわれていた葛を開け、何か巨大な物を持ちだした。そして、それを重たげに引きずりながら、城塞の頂上にある鐘つき堂へ登って行ったのだ。

「天の神々よ、わたくしに世継ぎの赤子をくださいませ！　どんな子でも構いません。必ず立派に育てます。お礼に、これをさしあげましょう、どうぞお受けとりくださいませ！」

　彼女を追って狭い螺旋階段をやっと登りおえたトリファスキアータは、妻の姿を目にして鼓動が止まった。蔦の錠を開くためにか、持ち歩く際にどこかぶつけでもしたのか、渦巻く嵐の中、鮮血に塗れた妻の腕に高々と掲げられたその盾こそ、悪名高きナンゲの盾であるとひと目で知ったからである。

　一方の眼窩から二つ頭の蛇を覗かせニタリと凄まじく笑った髑髏が中央に彫りつけてあるその純金の盾は、何十代前になるやら、いずれミトラ神が降臨したまいてイデーンが今のように落ち着くよりも遥かに前のことであろう、武具の収集に異常なまでに熱心であった当時のこの家の重鎮が、財産の大半と引き替えにして作らせた暗黒の宝であった。ナンゲなるいにしえの彫金師は、盾にこの世の何者にも負けぬ美しさと防備力を与えんがため、自分の娘を含む十三人のおとめを殺し、その血を蓄えた髑髏型の池にこれを浸して呪文をかけた。盾は完成したが、ナンゲ自身は発狂して、煮立った黄金の窯に身を投げたという。彼の血肉に染まった黄金で作られた兜や籠手は途方もない呪いの力を秘めていたので、ナンゲの弟子たちが恐ろしがって地上に捨ててしまった。黄金の盾を手に入れた重鎮も、はじめは得意がったが、次第に恐ろしさのあまり痩せ衰え、捨てんと欲したが叶わず、ついに、これを、高き血に繋がるアヌビアス家に自ら奉納し、その管理を任せてしまったのであると伝わっていた。

（そのような物に願を掛けたら、どんなことになるか！）

トリファスキアータは妻を止めなくてはならないと思ったが、恐ろしさのあまりからだが動かなかった。彼女は盾を海に投げ落とした。吹き荒れる風のためか、打ち寄せる大波のせいか、あるいは狂ったような妻の高笑いにかき消されたか、水音はいつまで待っても彼の耳には届かなかった。トリファスキアータは急ぎ寝所に戻り何も知らぬふりをしたが、戻って来た妻が血塗られた手を洗っている水音のために、いつまでもいつまでも眠ることができなかった。

海が凪いで後、妻のいない隙に、彼は遠眼鏡を持ちだして注意深く海岸線を捜索したが、黄金の盾らしき物はどこにも見当たらなかった。

そして、その後まもなく、妻はまつげのない瞳を瞬かせもせずに、懐妊を告げたのである。トリファスキアータは、なんとも背筋の凍るような嫌な予感を覚えたが、口にすることはできなかった。

月満ちて誕生した男児は、取り上げられたその時から、先が二つ又に分かれた長い尻尾と、ひねこびた角を持ち、顔以外の体表のすべてを剛い毛で覆われていた。そして、その毛も肌も、爪から舌から虹彩までもが、みな燦然と輝く金色だったのである。

（退けられしもの！　この子はまるで、ミトラ神によって退けられた悪しき精霊等のようではないか！　どんな夢魔が妻の頼みを聞いたのだ!?）

褓に包まれた我が子を見せられたその瞬間、父は茫然とし、次に心底脅え、激しい罪悪感に囚われた。何もかも妻が悪いのだと思ったが、そのようなことはおくびにも出さなかった。また、妻に触れることを内心ひどく恐れもしたが、そのような恐れを自らに許すこともできなかった。

何かの呪縛から逃れたかのように、次の年も、また次の年も、ペルラは規則正しく妊娠した。妻が誇らかに懐妊を告げるたびに、彼は絶望的な打撃を味わったが、その後立て続けに生まれたこどもたち五人はすべて娘で、みなしごく月並みの妖精らしい赤ん坊であった。彼は涙ぐむほどに喜び、娘たちをことのほか愛しく思ったが、表立って溺愛することはできなかった。はじめのこどもだけを少しも愛していないことを、妻に知られ、責められたくなかったのである。

妻でありこどもたちの母である家長ペルラは、そのような繊細なこころ遣いとは生まれつき無縁な女であった。平凡な娘たちには、通りいっぺんの関心も払わなかった。特別の容姿を持った息子ひとりを、激しく愛した。彼女自身の腹で育んだのが、まるで、その金色の毛皮をまとった息子ただひとりであるかのようにふるまい、ひとにその偏愛を知られることをも、まったく恐れなかった。

トリファスキアータが、時折酒精の力を借りてまで引っこみ思案な勇気を振り絞り怖々と止め立てしたにもかかわらず、彼女は、逢うひとごとに饒舌に息子自慢をした。陣痛がはじ

まるその時まで、巨大な腹を揺すってイデーンじゅうを歩き回り、精力的に執務に当たるほどの女丈夫であった彼女は、身内の話を事細かに他人に聞かせることを、特に恥ずかしいとも思わなかった。ひとの思惑を憚るということがなかった。その態度のどこを取っても、とても控え目だったとは言えないが、親戚や身内のものにはことさらに手放しに息子を誉めちぎったのだから、彼女なりに内と外との区別はしていたのであろう。最も親しいものの間にある時には、彼女はその短すぎるまつげのせいで冷淡にしか見えぬはずの顔を、誇りと感動で少女のような薔薇色に染めて、最愛のカボンバの美しさと力強さと聡明さを繰り返し喧伝した。このように明らかに特別な姿を持って生まれたからには、必ずや、雄々しく強く、また賢く篤実な跡継ぎとなって、我がアヌビアス家を、古き血の五大家の中でも、特に力ある立場にしてくれるに違いないと、力説した。

「ミトラ神御自身だって、こんなに神々しい御姿はしていなかったに違いないわ！　ああ、ねえ、考えてもみて？　カボンバが執政に当たったたならば、イデーンはどんなに素晴らしい世界になるでしょう！　わたくしは、もう決心しているの！　この子が成人したら、わたくしはさっさと引退しますわ。いいえ、いいえ、引き止めたってだめですのよ。そのころはわたくしも、もうすっかりお婆さんでしょう？　いつまでも偉そうな顔をしているわけにもいきませんことよ。わたくしは館の隅の小さな部屋にでも引っこんで、カボンバがあの黄金の手腕をみごとに発揮するのを、うっとり応援するわ！　ああ、早くそんな日が来ないかしら

ね斜……！」

このように、カボンバの御世のあるべき姿について、何度も何度も微に入り細に穿って語るペルラに辛抱強くつきあったひとびとは、天の神々をも恐れぬ母のあまりの思い上がりに、密かに災難避けの呪をせずにはいられなかった。

誰よりも、父は祈った。息子の幸福を、健康を、無事を、一心に祈った。多少愚鈍で腰抜けであってもかまわないから、どうかこころのまっすぐな少年に育ちますように、平和と静寂を愛するものになりますようと、切ない願をかけ、妻にも誰にも完全に隠れて、三十三日の間パンカックスの滝に打たれに通いさえもした。だが、その必死の祈りも、報いられなかったのである。

息子は、三歳を過ぎるまで歩けなかった。十歳を越えても、数も文字も理解しなかった。そのくせ、力ばかりはやたらに強く、乱暴で、堪え性がなかった。あまりにもちやほやされ、我が儘に育てられたため、気に食わぬものはなんでも破壊してしまっておいて、それがもとどおりの姿にならぬと、またいっそうの癇癪を起こすのである。息子はこの家の恐ろしい暴君であり、一族の恥そのものだった。

妻は何も言わぬが、かつての大言壮語を少しは後悔しているのではないかと、彼は思う。なにしろ、とっくに嫁をもらっていてもいいはずの二十二歳の今日に至るまで、彼女の自慢の息子は、この黄金城から一歩も出されたことがなかった。幼児の年齢を越えて以来は、数

少ない限られたものたち以外の目に触れさせられることもなかった。そうして、家長の座は、『お婆さんなんだから偉そうにしてないでさっさと引退する』はずの妻が、今でもせっせと、務めているのであった。

このやっかいな御子の守り役を任されている石炭の妖精は、色が黒く、ずんぐりと太って、少しも美しくはなかったが、誠実で辛抱強かった。いつまでたっても幼児の知能しか持たぬ黄金の野獣(やじゅう)に、誰よりも厳しくふるまったが怪我(けが)ひとつしなかった。彼も彼女にはよくなつき、恐れていたため、その言うことだけは少しはきいたのである。

父は彼女に、どんなに感謝してもし足りることはないと自覚していた。望んでもなかなか得られるような乳母ではないと、知っていた。

だから、今しがたの、妻の実に横柄(おうへい)な態度に、思わずその狆(ちん)くしゃな顔をしかめる彼女と眼があった時には、深い同情をこめてそっとうなずいてみせた。しかし、酔いどれた名残(なごり)に頭の鈍(にぶ)ったトリファスキアータは、いくら考えても、彼女の名前を思いだすことができなかった。彼の妻に至っては、もともと、この見目のよくない娘に名があることなど、あえて考えてみることもなかっただろう。

「ねぇ、カボンバ？　言ってごらんなさい。いったいどうしたのか、おかあさまに教えてちょうだいな」

「あ……あう……！」

息子は大きく口を開いたが、いくら力んでも、息はことばにならなかった。

「あー！　ああ！　ああう！」

涙を浮かべ、激しくあえいだが、意味のあることは言えなかった。今では簡単なことばはさすがに覚えているはずなのだが、興奮すると、すぐに何もわからなくなってしまうのである。

ついに母も諦め、子守り娘のほうを向いて、短く尋ねた。

「どうしたの、この子は？」

「はい。坊っちゃまは本日たいへんにご機嫌であらせられ、はしゃぐあまりに、廊下でつまずかれたのです」

石炭の精は両手を前に組んだ従順な姿勢で、しかし、無表情にまっすぐ前を睨んだまま、はきはきと答えた。

「その時、ちょうど手にしてらした竜の玩具が壊れてしまったので、すこぶる腹を立てておいでなのだと思います。無邪気な若様をひっかけた悪い廊下と、簡単に壊れてしまう愚かで軟弱な玩具に、今さっき、散々おしおきをなさいました」

娘の皮肉は、母には通じなかった。

「まあ……可哀想に！　よしよし、カボンバ、偉かったわね」

「偉かった……！」

石炭娘が吐き捨てるように繰り返したので、ペルラはサッと顔を赤くした。

「そうですとも！　偉かったわ！　なにせ『やられたらやりかえせ！』と言うのが、うちの家訓なんですからね。従わないものは罰するべきです。裏切ったものは滅ぼすべきです。もちろんですとも！　ねぇ、カボンバ、あなたはほんとうに偉かったわねぇ。これからも、そうでなくっちゃいけませんよ。あなたは栄光のアヌビアス家の、立派な跡継ぎなんですからねぇ……」

肉体ばかり酷いほどに逞しく成長した金色の跡継ぎは、大好きな母に手放しで誉められ、毛むくじゃらの頬をやさしく撫でられたので、満足してニタニタ大きく口を開き、その三つ又の尾を甘えた雪猫のように愛らしく振り回した。尾は母の豪華な玉座にぶつかり、その飾りをいくつかふっ飛ばした。

（また誰かが苦労するのだろうな）

と、トリファスキアータは思った。

無言のまま次の指示を待って立ち尽くす子守りの、何かを諦めたかのように弛緩した瞳の先を、ふとみると、そこにはあの海への窓があった。

（ああ。この娘も、あれを乗り越えて、ここから永久に脱出することを考えているのではなかろうか？）

トリファスキアータが長椅子の上で身を起こすと、娘は視線に気づいてこちらを向いた。



あわててなにげなくまぶたを伏せ、そ知らぬ顔を装うトリファスキアータの胸を、冷たく暗い霧が満たした。

(いっしょに行かぬかと誘ってみたらどうだろう？
彼女は何と言うであろう？　その時はじめて、思いもかけぬほど美しい顔になるのではないだろうか。そのことばを長いこと待っていたと、告白されるのではないだろうか……？
いやいや、儂はまだ酔っているのだ。
そんなのは悪夢だ。恐ろしい醜聞だ。けしてそんなことはすまい。間違ってもすまい。たとえしたとて、あの娘は黒い顔を軽蔑でいっぱいにして、儂を見るだろう。そうして儂は、ひとりで飛び降りなくてはならなくなるだろう)

薄く開いた唇から、彼は、まだかすかに酒臭い小さな吐息を、そっと洩らした……。

9

ポリプテルス家の精霊等が代々居住する湖畔の館は、五大家の他の長等の屋敷に比すれば、いたく質素で狭苦しくはあったが、多くのひとびとの憧憬と羨望をこめて、水晶宮と呼ばれた。

館は、月の巫女住まう神殿の島を抱く神秘なる霧のレピディオと地底にて繋がっている小

さな湖水ロリカリアの中に建っていた。水上にではなく、水中に、半ば没した形で建築されていたのである。床や壁の一部が魔術をもって精製した丈夫な玻璃細工であったために、ここを訪れる機会を得たものは、あたかも人魚か魚にでもなったかのような視点から、透明度の高い湖水の内部の様子を詳しく面白く眺めることができた。また、館そのものが巨大な飾り噴水になっていて、パンカックスの滝に連なる清らかな水が、いつもその仄白い大理石の外壁を静かに洗っているのであった。水晶宮は、どの屋敷よりも美しく、どの城塞よりも繊細に見え、しかし堅牢であった。聖なる水に四方八方を守られたこの館には、招かれぬものは案内を乞うことすらもできなかったからである。

　水の種族の若き当主シフィル・ロリクタス・ポリプテルスは、水を経て午前の柔らかな日差しの差しこむ最下階の執務室の中央の荒織の絨緞の上に結跏趺座し、至宝『青の水鏡』に華奢な背を向け、巨大な玻璃の窓に向かいあい、サファイヤの瞳をうつむかせて、ひたすら考えごとをしていた。

　考えるべきことは、彼を押し潰した。いくら考えても詮ないことのように思われたが、考えぬわけにもいかなかった。

（さまざまな事柄がひとつに繫がって、重い首飾りのようにわたしの頸に掛かっている）

　と、彼は思った。

（どの鎖も解けぬ。ひとつひとつの鎖を試してまさぐり辿ったとても、いつしか見覚えのあ

るような気のする環に返るばかり。

ああ、何故これには止め金がないのだ。どこかに鋭い刃物はないものか？　外す魔法はないものか？

我が頸を落とさずには、この軛はけして外れぬと言うのか……）

彼は聡明であったが、何といってもまだ十八になったばかりであった。種族を率いてことに当たり、世間に揉まれた経験に乏しかった。

最高の結果が得られない時にでもましな道を、より多くのものにとってあまり損にならぬ道を、せめて最悪ではない結果に通ずる道をこそ探して尊き妥協をするべきが、指導者たるものであるのだと頭ではわかっていたが、苦しかった。心から望んだことがらしか、為したくなかった。納得のいかぬ部分を残した選択をするのは、たとえ決断を迫られている時にも、嫌で堪らなかったのである。

見るともなく見つめていた玻璃ごしの視界の中に、靄のようなものが滑りこんで来た気がして、彼はふと、顔をあげた。

透明な水の彼方に、何かがいた。それはある瞬間には大きな翼を持つ鳥のように見えたかと思うと、美しい女の姿を取って彼を誘い、弾けるようにして希薄に散り、またみる間に集まった。じっと見つめていることに気づきでもしたのか、シフィル自身の姿を真似て、長い髪を水の中の風に器用に靡かせてみせもした。

シフィルの彫像のように整った顔に、救われたような微笑みが浮かんだ。

「……オンディーヌ……珍しいな。遊びに来たのか。さにあらば、わたしの鬱なる気分を察して、慰めにでも来てくれたのか？」

オンディーヌは、答えなかった。

一人前の妖精ではない。さだかな形を持つこともなく、厳密な個体の区別もなく、天の神々から預かった役目もない、刹那の快楽に生きているだけの下等なものだ。しかし古いことだけは古く、五大家に匹敵するほどの昔からこのイデーンに住み着いている種族のひとつであった。

ミトラ神の粛正の昔に、このような性質を持った他種族のものたちは、ほとんど追放され、あるいは滅ぼされた。だが、この水の精等は……複数的に考えることが正しいかどうかはともかくとして……厳しい追及を受けることもなく、今日までずっと生き長らえた。悪さをするほどの力もなく、またどうせこのような人里離れた環境からけして離れることができないものたちであるために、目こぼしにあったとも言えるし、ポリプテルス家の祖先の嘆願が聞き入れられたのだとも言えるかもしれない。彼等は風景の一部であり、湖そのものだった。鳥や魚や水草のように、彼等は生きた。だがそれらのものとは決定的に違っていた。

彼等は食さず、死なず、殖えなかった。パンカックスの滝に、その長い生命を負うていた。高所から落ちかかる清い水に打たれることに、わずかな精力を得、たとえようもない歓びを

覚えるのだった。滝を離れることは稀で、レピディオ湖の中ほどまで彷徨いだすのがせいぜいな億劫がりな連中であったのだが、シフィルが当主となってからは、この水晶宮にもほんの時たま姿を見せるようになった。

（かつて並んで滝に打たれたこのわたしが、こんなところに閉じこもって、額に皺を寄せて唸っているのが可笑しいのかもしれない）

シフィルは、オンディーヌが好きだった。その屈託なく戯れ遊ぶ無防備な姿を見ていると、遠いこどものころに還ったような、胸の奥の柔らかな部分を直接掴まれるような、なんとも言いようのない気分になる。気が沈んでいる時にはことさらにそうだった。

（どんなにしかつめらしく考えても、所詮、能うることと能わざることとがある。彼等のように何ひとつ悩むでもなく、迷うでもなく、ただあるがままに遊び惚けて生きてゆくものたちにも、天のいと尊き神々は、生命の秘蹟をお与えたまうているではないか。為し得ることだけを為せばよい。所詮天ならぬものには完璧はない。わたしはわたしに、完全を期待しなくともよいのだ）

そんなふうに感ずることができると、気病みのあまり痛いほど凝り固まっていた肩の力が抜け、胸いっぱいの暗い空気が吐きだされ、シフィルはなにがなしか楽になるのである。

今もまた、彼は硬い姿勢を解して立ち上がり、近づいて玻璃の壁に頭を凭せかけ、甘えるように言った。

「オンディーヌ……教えてくれぬか。わたしは間違っていたろうか……？」

「いいえ！」

不意に声がした。

シフィルは一瞬少年の素顔に戻り、真っ赤になって振り向いたが、許可も乞わずにずけずけとこの執務室に踏みこんで来た女たちを目にすると、たちまち冷徹な若長の表情になり、非難をこめて静かにつぶやいた。

「叔母上がた……」

「あなたは、間違ってなどいません」

「ひどい災難にあいましたね、シフィル」

「あなたがあの場にいなかったら、もっと恐ろしいことになっていたことでしょう」

ボレリィ、アガシジィ、バケッティの三つ子は、先に亡くなったシフィルの父の年の離れた妹たちであった。子のないままに高齢を迎えついに跡継ぎを作らずに終わるかと思われた父に彼というひとり息子が誕生するまで、この叔母たちはみな、あるいは自分が次の長になるのではないかと思惑し、周囲にもそのように取り扱われたために、いつも種族内外の目を強く意識し、厳格に純潔に高邁に自らを律して、その青春を費やした。

女の身で一族を纏めるなど無理だ不可能だと迷惑ぶり謙遜しながらも、その実、名誉に思い心待ちにせずにいられなかった長の椅子からすっかり遠ざけられてしまったその時には、

彼女らの堅苦しいものごしや口調、慎ましい生活態度、高い教養とその反動としての俗世間についての無知は、既に矯正できなくなっていた。

嫁いだのはバケッティただひとりで、その息子がアンジェリカスである。あとのふたりは、いつの間にか過ぎてしまった適齢期のどこかに、密やかな恋も甘く危険な逢い引きの楽しみも、その生涯の伴侶も、永久に見失ってしまったのだ。かくして、イデーンには珍しい未婚夫人がふたりと、夫もこどももあるもののその精神は他のふたりとほとんど違わないひとりが、生きることとなった。

三人の叔母には全く悪気はなかったが、みな、その色褪せてしまった若き日の代償を、シフィルに求めずにはいられなかった。自分たちが、心に身につけようと努力したような、長なるものの持つべきさまざまな能力や資質を、期待せずにいられなかった。素晴らしい当主の夢を、彼に託さずにはいられなかったのである。そして、他の誰に対しても慇懃なほどに礼儀正しく、気に食わぬことがあってもけして顔に出さず、飛び上がりたいほど嬉しい時にもかすかに唇の端を持ち上げるばかりのこの叔母たちが、シフィルただひとりにだけは、全く遠慮会釈なくふるまった。我が儘に、強引に、尊大に、気紛れに、たとえば、私室に入るにも許可を求める必要を認めぬほどに、勝手なやりかたを通したのである。

「あなたがこころを痛めることはありません」

「すぐにグアモンどのに親書を認めなさい」

「クリプトカリオンを罰してくれるよう勧告するのです」
「まったく、失礼千万にもほどがあります」
「明らかに騒乱罪に価しますとも」
「ほうっておけば、火の輩どもは、ますます増長するばかりです！」
「そう一時に話さないでください」
シフィルは怒鳴りつけたい気持ちを掌に握り潰して、ことさらに静かな口調で三人を止めた。
「ご助言まことに辱なく思います、しかし、どうぞほうっておいてください」
「シフィル！」
「でも！」
叔母たちは気色ばんだが、シフィルは片手をあげて制した。
「いずれ、会議があります。その時グァモンどののほうから、何かおっしゃるでしょう。あるいは、まったくそれどころではない話題になるかもしれませんが……」
最後のほうは言うつもりではなかった。言ってしまってから、ひとりごととして聞き流してくれればいいがと、叶わないことを望んだ。
「それどころではない？」
「どういうこと」

「何かあったのですか？」

ボレリィもアガシジィもバケッティも、みな同じ海色の瞳をきらめかせて身を乗りだし、迫って来た。シフィルは痛いほどの後悔と共に、何かが喉許を突きあげて来るのを感じた。

（ああ、オンディーヌ、わたしには、荷が重すぎる！）

しかし表面に見える限り、彼は平静だった。その長いまつげのあたりに少しばかり物憂げな様子を匂わせただけで、嘲弄的な笑いを崩しさえしなかった。

「すみません。申し上げられることではないのです」

「おっしゃい！」

「もったいぶらずに！」

「ここだけの話にしておくわ、ね、シフィル」

「いいえ、叔母上がたといえども、例外扱いはできぬのです。いずれ、近いうちには明らかになりますから……では、わたしは急ぎの仕事がありますので、失礼」

半跏に脚を折り畳み目を伏せて瞑想に入るシフィルに、叔母たちは耳まで真っ赤に染まると、合図もないのに三人同時にくるりと背を向け、反抗的攻撃的な慎ましさを全身から漂わせながら静かに歩み去った。

おのずから退却してくれた災難の気配を片目を開けて確認したシフィルは、ほっと吐息を洩らして、姿勢を崩した。

そのまぶたの裏には、見まいとしても、またあの重苦しい鎖が見えた。鎖のひとつひとつが魔法文字であり、サラマクセンシスおよびラルバタス、ふたつの神殿から届いた書状の文面を表していた。それ等は、全く同じだった。一字一句、違わなかった。

彼の発した質問に対する答えと言うよりも、それ自体が、新たな謎であった。

『火と土の共に動く時、世界の礎は崩れ去る』

(火と、土。カリクティスとコリドラス?
かの手強き巌にも、稲妻にも、わたしは勝った。雨は勝った。一応は勝った。
しかし……正しかったのか。正しくなかったのか。
水もまた、共に動くべきなのか、動かざるべきなのか。動いてもしかたがないのか、ともかく動くしかないのか……)

彼は知らず知らずのうちに目をあげていた。

何が起ころうとしているのか気づいた時、彼は、なんとか拒み、顔を背けようとしたが、敵わなかった。

目に見えぬ何ものかに捕らえられ引きずられるようにして、シフィルは『青の水鏡』に吸い寄せられた。見たくなかった。だが、鏡は、瞬くことも許してくれなかった。こじ開けられたシフィルの青い眼は、脅えきったこどものようにいっぱいに涙を湛え、落ち着きなく動いた。その華奢なからだを、魔力あるものに道具のように利用される時の、身も世もない

感覚が貫いた。彼はうめいた。彼の古き血と若き精力を啜って、鏡がまた蘇ったのだ。
鮮やかな青の表面が細かく波立ちはじめ、薄い布を重ねたようにぼやけて、唐突に完全に静まった。そこには、今や、空の青があった。天高い雲があった。そしてその雲を従えるようにして、秀麗なる山が聳え立っていた。

魔峰オーブであった。

イデーンに住むものならば赤子から老人までみな良く知っている山だったが、険しい山脈と厚い雲を隔てているために、滅多にその姿を見ることはできなかった。剣鷹の精でも、ごく遠くからうかがったことしかなかった。

六つの谷を従え、その川辺に『追放されしものたち』の子孫を侍らせ、天地を自由に駆け巡る神の乗り物怪鳥ラーミアを育む、この世界第一の高峰、魔峰オーブ。

その中腹から頂上までを、今、シフィルは見ていた。水鏡が、彼のこころとからだを繰って、鮮やかに描きだしてしまったのだった。

シフィルの瞳は長いこと抵抗し、躊躇した後に、ようやく頂上に向かった。

そこは、うっすらと、細い白煙をあげていた……。

馴染みはあるが、何度繰り返しても鼓動が止まりからだが爆発してしまうかと思うほどの凄まじい恐怖に襲われたとたん、鏡の呪縛が解けた。

反動でシフィルは投げだされたように床に崩れ、固く閉じたまぶたから他愛もなく透明な

涙をこぼした。シフィルはあえいだ。泣かされてしまったことで、悲しみが、胸を塞ぎべっとりと黒く覆う不安が、またいっそう募った。シフィルは泣いた。四つん這いになって、嗚咽をあげて、全身を痙攣させて泣いた。泣くまいとする努力など、とうに捨ててしまっている。歯を食いしばって堪えれば、また無理やりにあの恐ろしい姿を見せつけられるばかりなのだ。彼が抗う気力をなくし、無力なおとめのように捩じ伏せられ、恐怖と屈辱と不安に激しく泣きじゃくるまで、鏡は、山は、けして彼を放そうとはしなかった。

だから、彼は、自棄のように泣いた。

見上げても、山はもう消えていることを、彼は経験で知っていた。恐ろしい衝撃を受けても、少し時が過ぎてしまえば、少しも耐えがたくなくなることを、彼は知っていた。だが、鏡は、何度も何度もその魔力を発揮した。彼は見た。同じ悪夢を、繰り返し見せられた。逃げることはできなかった。忘れることもできなかった。

シフィルは泣いた。

他にどうしたらいいのかわからなかった。

（わたしは無力だ。いくら古き血の一族の長でございと言ったところで、死すべき定めの精霊のひとりにすぎぬ。

たいしたものではない。まったくたいしたものではない。クリプトカリオンの言うとおり、口ばっかりの軟弱者だ。

ああ。神々よ。

こんなわたしに、いったいどうしろというのだ……!?

10

岬の神殿サラマクセンシスは、狩人と犬座の果て、陸の終焉、凍てる大海と日の入る海とを隔ててある細長いアガマ岬の先端に位置する。

たとえばランデールからここに至ろうとするのは、容易なことではない。選択し得るひとつは、テネルス草原から大地の一族の領分である岩山の連なりを越えて、コウデマ山系との間にある踏み分け道を経、引潮の時を選んでメガロドラスの砂浜沿いを、十里あまりも下る道筋である。もうひとつは、アンギス湾から漕ぎだしてパルマト岬先端の斜め灯台、さらにはアヌビアス家の黄金城に停泊し、そこからパンガシアノドン・ギガスの複雑にして岩だらけの海岸線を徒歩で進む方法が考えられた。が、いざ神殿に近づけば、波打ち際はかなり遠浅に平らな岩が続いていて、潮の干満によって見え隠れし、波静かなおりにもいつも白々と泡立っている。通って通れぬことはないが、滑りやすくまた通れる時刻がごく僅かに限られてある。どちらの道も険しく困難であり、なまじの妖馬には耐えられぬ。いかな健脚を誇る精霊であろうとも、充分な装備と日程を組まなければ無謀であった。飛ぶことのできるもの

の体力もまずは覚束ぬ。最も丈夫な竜たちか、あるいは、魔峰に住む巨鳥ラーミアであるならば、行来も可能、と言うほどの悪路ばかりであった。

それでも、サラマクセンシスを目指すものは少なくはなかった。陰であり月である巫女と湖の神殿ラルバタスが善なる女たちの命綱であるように、陽であり太陽である神官は男たちのよすが、その祈禱を受けミトラ神の加護を保証されることこそ、男子一生の悲願であったのだ。ここに到達するための道が整っていないことも、若者や少年の功名心や冒険心をかえってそそった。サラマクセンシスに行って来た、と言うことは、つまり、彼がそれだけの根性と体力と冷静な頭脳を持った男であることの証明にもなるからである。女たちが誰でもほんとうに困った時にこそラルバタスに駆けこむことができるのに比べれば、彼等はあまり恵まれていたとは言えない。しかし、ミトラが、男に対してのみ厳しいこと、本人がある程度以上の努力を発揮しなければ許さぬこと、自ら助くることのできるものにしか崇められたがらぬこと等を、あえて不当であると断ずるものは、このころのイデーンにはいなかったのである。

それにしても、気候厳しい冬場には、まず滅多に参拝客はありえなかった。そのありえぬ客が、この日、あったのである。

スクレロパゲス・レグナスは額の汗を拭った。海から吹く風は冷たかったが、強行軍のた

め、彼の胸は早鐘を打ち、からだじゅうがカッカと火照っていた。しかし、いよいよ辿りついたのだ。

サラマクセンシスは、左右の大海からの風にさらされて、静かに、孤独に、建っていた。スクレロパゲスもまた、ひとりきりであった。品性を重んずる彼は、折り畳んで捲っておいた襯衣の袖口を戻し、乱れた頭髪を手で撫でつけ、長靴の埃を払った。しかしどう見ても、その恰好は礼儀正しいとは言いがたかった。

炎一族の当主グァモン・セミアクィルス・カリクティスの命によって、二匹の火竜と二名の供のものを連れ、彼が煉瓦城を発ったのが昨日の早朝である。託されたものは書状で、内容は彼には知らされていなかったが神託を問うものであることは間違いない。その神託の案件には、容易に予想がついた。急いでいると、当主はただのひとことも言わなかった。だが、スクレロパゲスにはスクレロパゲスの考えがあった。彼は山の道を選んだ。途中脱落するものが出るは覚悟の上で、昼夜一刻の休みもなく、竜を飛ばした。すべての竜が倒れて後は歩いた。満ち潮になりかかる岩場の難所を、両手両足で這いつくばるようにして通って来たのだ。身ぎれいないでたちでいられるわけはなかったのである。

何百年もの間何千何万という参拝客によって刻まれた岩場の階を、彼はそそくさと登って行った。実は、スクレロパゲスは、サラマクセンシスに来るのは初めてだった。成人前、友達同士で立てた無邪気な計画から逃れ損なって、海路を辿ったことはあった。が、荒れ狂う

パンガシアノドン・ギガスに少年たちの船は翻弄され、あやうく遭難するところを九死に一生を得、ほうほうの体で到着したアヌビアス家にひどく世話になり、レグナス家はその後、大変な財産を毟り取られたのだった。

初めて見る岬の神殿は、思っていたほどに豪勢でも立派でもなかった。多柱式の解放的な円型舞台が、どうやら拝殿であるらしい。柱には、銀白色に輝く貝の殻が飾りに張りつけてあるが、その半数は既に落ちたり割れたりしてしまっている。円殿を支えるは十二匹の竜頭亀の彫刻であり、その鼻面で正確な方位を示し、それぞれ微妙に異なる視線や髭や前足のつっぱり具合が、イデーンのこの数千年間の季節と暦とを赤裸々に表している、と聞いたことがあった。しかしこの亀たちもまた、永らく風雨にさらされたために、その繊細なる表情を半ば失ってしまっていた。

(誰が作ったやら……誰か直せないのかな)

整っているもの、上品で美しいものを愛するスクレロパゲスは、なにがしか不満のようなものを感じずにいられなかった。このイデーンの中でも特別に聖なる土地、聖なる建物ともあろうものが、荒れ果てたままとは、あまりのことと思えたのである。

スクレロパゲスはゆっくりと円殿の周囲を回ってみた。

円の中心に位置するは、螺旋を描いて互いに絡みあう五匹の大蛇で、その蛇どもの舌を為すものはみな異なった性質を持っていた。あるものは永遠に若やいだ緑の枝であり、あるも

のは迸りでる水であり、キラキラと輝く金属であり、黒土を練ったような塊であり、また明々と燃える炎であった。言わずと知れた、高き血の五大家の象徴である。

もっとそばに寄ってみたい気もしたが、神官の許しなく、また清めの儀式もないままに、拝殿に足を踏みいれるのは恐ろしかった。スクレロパゲスは急いで残りの半周を回り終えた。

海に対して円殿の背後、太陽に対しては正面となる位置、すなわちつのぶえ座の方角には、細い塔があって、こちら側に長い影を落としていた。塔の内部は神官の居住空間であり、その屋上は物見の台を為している、と聞いていた。

塔の入り口と思われる場に立って、スクレロパゲスはひとつ深呼吸をし、高らかに呼ばわった。

「頼もう！」

塔の内部に、自分の声がいつまでも木霊して響いてゆくのを、彼は聞いた。そしてその木霊がついに消えた時、返事があった。

「お入りなさい」

声は複雑に反響して、風変わりな音色となった。思っていたよりも、若く、高い声であるように感じられたが、どのような姿形をしたものが、神官を務め、自分の呼びかけに答えてくれたのか、この応えからは想像がつかなかった。

「では、お邪魔を」

ごくりと唾を飲みこんで、スクレロパゲスは、白銀色の戸口を潜った……。

11

目覚めは不快だった。

肌寒く、からだじゅうがきしんでこわばっているのに、喉がからからなのだ。鎧戸の隙間から入ってくる僅かな陽光さえも、いやにまぶしく思えて、イライラした。ルビスは、間断なく姿勢を変えながら、いつまでもぐずぐずと寝床を出なかった。

（ああ、しんどい。ああ、起きたくない。

咎められたら、思い切り弱々しい目つきをして、死にそうな擦れ声で謝っちゃえばいいわ。ほんとうに具合が悪いんですもの。ほんの少し大袈裟にそう見せればいい。

威張りん坊のマルランドに、たまにはたっぷり心配をかけてやっちゃえ。

ひどい病気だと思えば、いくらマルランドでも、そうそう無理はさせないだろう）

それにしても、自分は何故こんなに調子がでないのだろうと、重苦しく鈍った頭を巡らせたとたん、ルビスは昨夜のことを思い出した。さまざまな場面が、次々にはっきりと蘇った。

ルビスは思わず掛け物を被って、手足を縮めた。

悪い夢だったのではないかと甘い考えを起こしたが、記憶が鮮明すぎた。掛け物の隙間か

らそっと覗いてみると、果たして、床のそばの椅子に汚れたマントが掛けてあった。
　マルランドが来る前に、なんとかしておく必要があった。だが、とても、洗濯をする気にはなれなかったし、そんなことをしているところを見つかったら一巻の終わりだった。
　舌打ちして、ルビスは起き上がった。マントを取ると、せいいっぱい足音を殺して当てもなく質素な部屋じゅうを歩き回った。やっと、作り物の花を飾った壺に目をつけ、乱暴に花を抜き取った。思いのほか嵩ばる憎らしいマントをぎゅうぎゅう押しこみ、ひっかかった衿飾りの宝石をあわてて外した。やっとなんとか見えなくなって不恰好に花を押し戻しホッとしたとたんに、ドアが開いた。
「まあ、お目覚めでしたの、良かった！」
　マルランドは不健康に太った顔をほころばせた。寝坊をした割には、いつになくご機嫌のようだった。
（助かった！　ゆうべ、お姉さんのところでよっぽど楽しかったんだわ。その気分が、まだ続いているんだ）
「おはよう」
　ひきつった笑顔を浮かべながら、ルビスは壺を背にするようにじりじりと動いた。今にもばらけて落ちてしまいそうな花を後ろ手にまとめようとしたら、衿飾りのピンが掌に刺さった。思わず顔をしかめてしまったが、マルランドはちょうど窓を開けに立っていたので、気

づかなかった。
　大急ぎで衿飾りを胸元に隠し、手の怪我を舐めて後ろに組むと、ルビスはできるだけなにげなさそうにマルランドに近づいた。
「遅くまで寝ててごめんなさい、なんだか、ちょっと具合が悪かったものだから……」
「おやおや、それはいけませんわね、きっと、あんまりお腹がすきすぎたんですよ。なにしろ、ゆうべは何にも召し上がらなかったんだから……」
（あ。叱られる）
　ルビスが顎を引くと、マルランドは振り向いたが、その顔はまだぴかぴかに微笑んでいた。
「さぁさ、お食事になさいませ！」
　あっけに取られるルビスをそれ以上構いもせず、鼻歌を歌いながら、マルランドはせっせと寝乱れた床を直した。敷き物の下にでもマントを隠しておこうかと思ったばかりだったルビスは、思わず額を拭った。
「ねぇでもお嬢さま、あんまりたんとおあがりになっちゃあいけませんよ。すぐ、お風呂に入っていただかなくっちゃなりませんから」
「え、お風呂？　こんな昼間から？」
「気持ち良うございますわよぉ、姉のところから分けてもらってきた露薔薇の香料を、たっぷり入れるように言っておきましたからねぇ」

ルビスは胸騒ぎを覚えた。

(どうも様子がおかしい。不気味すぎる)

だが下手に逆らってしまえばマルランドがその抜け目なさや手強さを遺憾なく発揮することになるだけなのを、彼女は長い経験でよく知っていた。おまけに、彼女の胸には、昨夜の秘密の罪悪感がとぐろを巻いて潜んでいるのだ。

(口喧嘩になって、うっかり妙なことを喋ってしまったら大事だわ。蛇の潜んだ藪を、つつかせてはいけない)

だから、彼女は、ことさら無邪気そうに微笑んで、言ってみた。

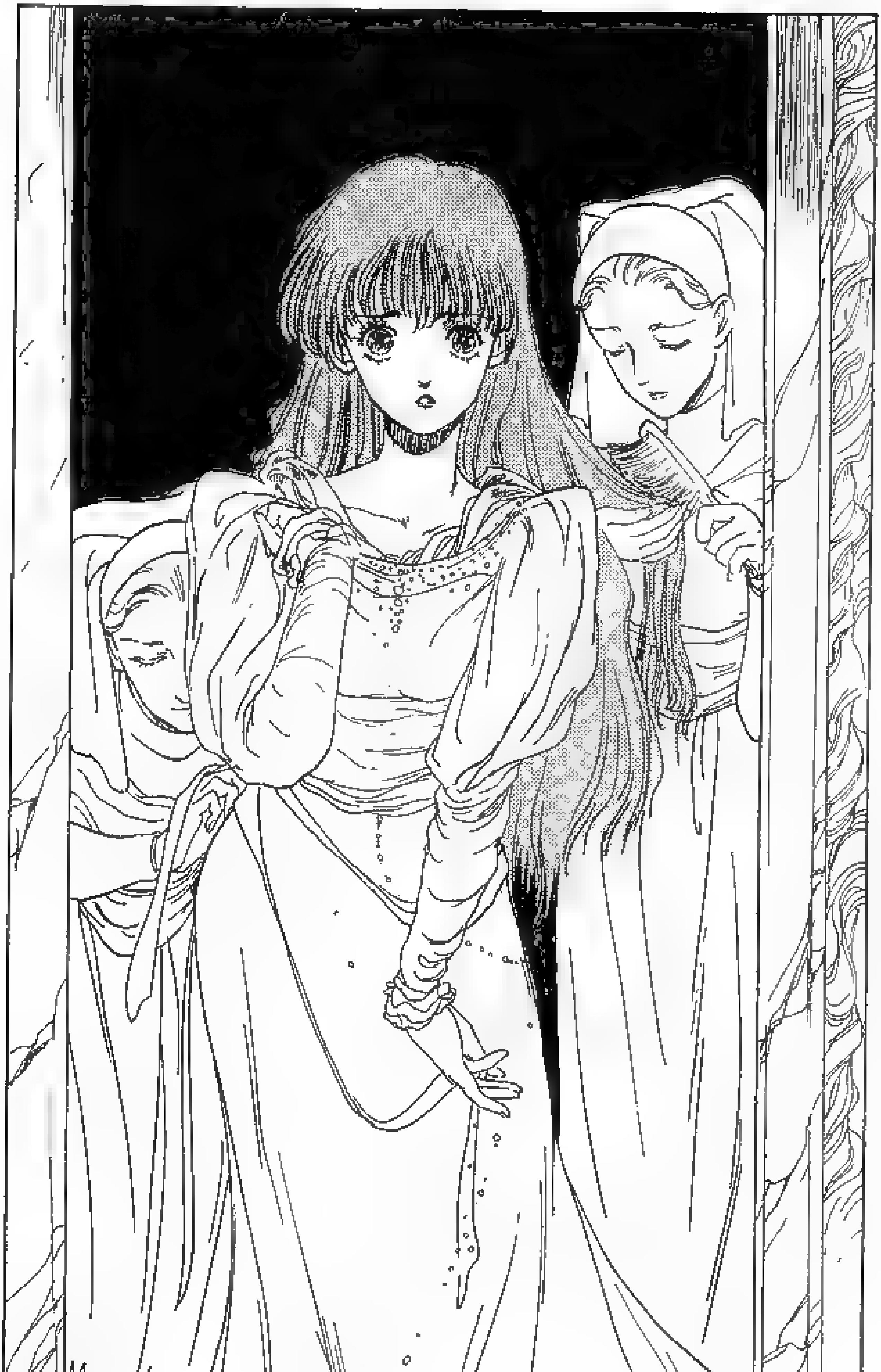
「まぁ素敵。いったい何があるの? パーティー? 叔父さまがいらっしゃるのかしら?」

焦りのあまり、少々やりすぎたらしい。

騙されませんよと言わんばかりの鋭い横目を使いながら、マルランドが振り向いた。きゅっと窄めた丸い頬は、何かを隠しているらしい。そして、そのたくましいからだの全体に、何が何でもルビスに予定の行動をさせてみせるぞと言う、恐ろしいまでの決意が漲っているのをルビスは見た。

「後のお楽しみです。さぁ、余計なことは心配なさらずに、早く召し上がっていらっしゃい!」

入浴をすませると、髪を梳かれた。生まれてはじめて、頬と唇に紅までさされた。ローブ



から着替えるようにと出されたのは、純白の新しい衣服で、胸元や裾に小さな真珠が星の数ほど縫い取られていた。そんな恰好をした自分がどんなに美しくまた可憐に純情に見えるかを、鏡の中に発見した時、ルビスは、化粧では覆い隠せぬほど青ざめた。
(まるで、花嫁御寮じゃないの!
まさか……まさか、婿になるひとに逢わせるというのでは?
ああ、なぜ、今? なぜ、こんなに早く……!)
絶望が、脳天から浴びせられた水のように彼女を凍らせた。泣き喚きたかった。床に身を投げて、嫌だ嫌だと声も嗄れるまで怒鳴り散らしたかった。だが、目の前は真っ暗で、からだじゅうに力が入らなかった。奪われた恋、拒まれた夢、まもなく永久に捨て去り諦めなくてはならなくなるすべての事柄に、ルビスは茫漠たる寂寥を覚えた。両親にも、同じ世代の普通の境遇の娘たちにも、ただひとり取り残され、置いてきぼりにされ、仲間外れにされたかのような圧倒的な孤独感が、彼女を押し潰し、呼吸を止め、甘苦しい露薔薇の薫りの中に閉じこめた。
上機嫌のマルランドに手を取られて進んだ廊下を、ルビスは、初めて目にするもののように、もの珍しく見つめた。それは、確かに、彼女の知らない館だった。彼女の知らないひとびとの住む、知らない世界だった。
(自由だったわたしは、昨日死んだ。

わたしの世界はもう、昨日、滅んでしまったんだ。

ああ。そうだ。では、ほんとうのわたしと、最後の最後の時をいっしょに過ごしてくれたのは、あのディアルトだったのだ……）

接見室の、長の座るべき椅子に自らが座っていることに、ルビスはふと気づいた。その手にはいつの間にか、炎の剣が握らされていた。亡くなった母や、叔父のグアモンでさえ、非常に大切な儀式の時にしか手にしたことのない、家宝の魔剣であった。それはもう長いこと、武器として使われたことはなかった。

（わたしが、これを今、自分の胸を突くのに使ったら、どうなるだろう。お母さまは悲しむだろうか……）

朦朧としたこころの片隅に、昨夜激情に任せて振り回したちゃちな贋の剣のことが思いだされた。彼女は、儚く微笑んだ。そのとたん、剣の柄を関節の白くなるほど摑んだ手の甲の上に、冷たい涙がひと粒落ちた。

「ルビスさま、お顔をおあげください」

マルランドの、上品ぶった声がした。

ルビスはそうした。無表情に、無感動に、こどものように素直に、顔をあげた。濡れた頬を拭いもしなかった。

涙に滲み霞んでよく見えない視界の正面に、誰かがいた。家紋炎十字を縫い取った燃える

ような旗の前に、恭しく胸に手を当てた男が立っていた。

見覚えがある気がしたが、涼しげに刈られた髪に違和感があった。豪華な礼装がどこか馴染まなかった。

瞬くと、今度ははっきりと、彼の顔が見えた。

(く……クリプトカリオン……!!)

「驚いたな、ルビス。俺もだ」

と、彼は言った。

その声にはかすかにからかい戸惑う響きもあったが、五芒の徴の瞳には、真剣で厳粛で気概の籠った光があった。

「おまえの婿になるのは、てっきり兄貴のほうだと思っていたんだがな。今朝、通達があった。こともあろうにその兄スクレロパゲスが神託を受け取って来た。……俺たちは、次の新月に、結婚するのだ」

――中巻につづく――

〈この小説は一九九〇年三月に発行された『ドラゴンクエスト精霊ルビス伝説上』を文庫化したものです〉

久美沙織

岩手県生まれ。長野県在住。犬2猫2栗鼠2その他の母。小説家。『プラトニック・ラブ・チャイルド』『きみの瞳にギャラクシー』『ガラスのスニーカー』『抱いてアンフィニ』『薔薇の冠　銀の庭』『丘の家のミッキー1〜10』『SPEAK　EASYの魚たち』『あけめやみ　とじめやみ』『MOTHER』『風をつかまえて』『碧い宝石箱』『ドラゴンクエストⅣ』など著書多数。

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 上

遙かなるイデーン

1992年3月19日　初版発行

著　者　久美沙織

協　力　横倉　廣

●　●　●

発行人　福嶋康博

発行所　株式会社エニックス

東京都新宿区西新宿7−5−25

西新宿木村屋ビル3F

営　業　☎03(3369)8982

書籍編集　☎03(3369)7200

印刷所　加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取り替え致します

定価はカバーに表示してあります

ドラゴンクエストブックシリーズ　好評既刊

小説シリーズ

ドラゴンクエストの小説化。感動の名シーンが今甦る!!

小説 ドラゴンクエストIV 導かれし者たち《全四巻》

1魔起黎明・2闘武群雄・3双華流浪・4天空夢幻 ★絶賛発売中★

●邪悪なるもの目覚めしとき 勇者もまた目覚めん。神すらも操れぬ戦慄のシンフォニーは、まさしく今始まった。

四六判　豪華上製本　定価各1200円

小説 ドラゴンクエストIII そして伝説へ 上 下

●魔王バラモス征伐のため、勇者は人の仲間とともに冒険の旅に出る。

四六判　豪華上製本　定価各1000円

文庫判上下(各450円)も絶賛発売中

小説 ドラゴンクエストII 悪霊の神々 上 下

●邪悪の大神官ハーゴンに立ち向かうロトの末裔たちの大冒険ドラマ。

四六判　豪華上製本　定価各1000円

文庫判上下(各450円)も絶賛発売中

小説 ドラゴンクエスト

●ロトの血をひきし勇者が駆ける。ドラクエ伝説・栄光への大いなる第一歩!

四六判　豪華上製本　定価1300円

文庫判上下(各380円)も絶賛発売中

ドラゴンクエスト 精霊ルビス伝説 上 中 下

●語り継がれてきた精霊神ルビスの伝説が今、説き明かされる。

四六判　豪華上製本　定価1300円

文庫判上中下(各450円)も絶賛発売中

ワールド漫遊記シリーズ

ゲームクリア後のドラクエアナザーワールドに接近!!

ドラゴンクエストIV ワールド漫遊記

●平和になったドラクエIVワールドはいったいどんな世界なのか? そんな夢の新世界での楽しいドラマの数々を、美しいイラスト満載で大紹介!!

A5判変型　オールカラー　定価980円

公式ガイドブックシリーズ

ファミコン・ドラクエのすべてを解明!!

ドラゴンクエストIV 導かれし者たち 公式ガイドブック 上世界編 下知識編

●全五章の壮大なストーリー、さらに数を増したモンスターとアイテム、新登場AI戦闘… 果てしないIVの世界を上下2巻で完全分析!!

B6判　オールカラー　定価上720円/下680円

ドラゴンクエストIII そして伝説へ 公式ガイドブック

B6判オールカラー　定価700円

ドラゴンクエストII 悪霊の神々 公式ガイドブック

B6判オールカラー　定価597円

ドラゴンクエスト 公式ガイドブック

B6判オールカラー　定価566円

ゲームブックシリーズ

キミが主人公となってドラクエ世界を冒険した。

ゲームブック ドラゴンクエストIV

文庫判　定価各500円

1第一章 王宮の戦士たち　第二章 おてんば姫の冒険
2第三章 武器屋トルネコ　第四章 モンバーバラの姉妹
3第五章 導かれし者たち(前編)　4第五章 導かれし者たち(後編)

●ドラクエIVの感動と興奮が全四巻のゲームブックに! 勇者と8人の仲間たちの大冒険は始まった。キミの決断で世界が動く!

ゲームブック ドラゴンクエストIII

文庫判　定価各494円

上勇者旅立つ　中伝説の宝珠を求めて　下決戦 アレフガルド

ゲームブック ドラゴンクエストII

文庫判　定価各580円

上ロトの末裔たち　下激闘! ハーゴンの神殿

ゲームブック ドラゴンクエスト

文庫判　定価各490円

上甦るロト英雄伝説　下死闘! 竜王の島

エニックスの本

ENIX

4コママンガシリーズ

ドラクエワールドに笑撃!!
会心の一撃ギャグが大集合。

ドラゴンクエスト
4コママンガ劇場『ガンガン編』1
A5判　定価580円

●月刊『少年ガンガン』爆笑連載中の『4コマガンガン編』が、完全保存版に！最強のレギュラー先生が勢ぞろい!!

キミのつくったギャグで勇者が、仲間たちが、モンスターが踊る!!

ドラゴンクエスト
4コママンガ劇場 番外編
4コマクラブ傑作集　1　A5判　定価480円　2　A5判　定価500円

●山ほど届いた読者応募作からよりぬきの奇作・怪作・大傑作を集めた「番外編」に、いよいよ待望の第2巻が登場。栄光の「キングスライム賞」は誰の手に!?

ドラゴンクエスト
4コママンガ劇場 1〜6
A5判　定価各580円

★大好評の『ドラクエ4コマ』に並び『マリオ4コマ』も絶好調!!

スーパーマリオ
4コママンガ劇場 1・2
A5判　定価各580円

●ドラクエに続け！最新スーパーマリオワールドまでのおなじみキャラ総出演！



© Nintendo

ドラクエパズルブック

全ページクリアできれば、キミはもうドラクエ博士。

ドラゴンクエスト
パズルランド
B5判　オールカラー　定価680円

●バラエティいっぱいのパズルとたくさんのイラストが楽しい、ドラクエ紙上遊園地が新登場！ キミも伝説のパズル勇者をめざせ!!

オリジナルストーリーブック シリーズ

もう一つのドラクエ伝説が今、キミの前に!!

ドラゴンクエストIV **知られざる伝説**　A5判オールカラー　定価880円

ドラゴンクエストIV **モンスター物語**　A5判オールカラー　定価880円

ドラゴンクエスト **アイテム物語**　A5判オールカラー　定価880円

ドラゴンクエスト **モンスター物語**　A5判オールカラー　定価980円

ドラゴンクエストIII **知られざる伝説**　A5判オールカラー　定価700円

ドラクエパーフェクトコレクションシリーズ

完全保存版、ドラクエファン必携の書！

ドラゴンクエスト
パーフェクトコレクション1992
B5判オールカラー　定価980円

●史上最強のRPG『ドラクエ』の関連商品（文具、書籍、グッズ、CD、各種ゲーム等）を完全紹介。最新ドラクエVグッズやカードダス特集も見のがせないぞ!!

DRAGON QUEST CDシアターシリーズ

ドラゴンクエストの感動が、迫真のサウンドドラマCDとオールカラースーパーワイドイラストブックになって復活!!

CDシアター **ドラゴンクエストII**　A5型豪華パッケージ上装　定価3000円

CDシアター **ドラゴンクエストI**　A5型豪華パッケージ上装　定価2800円

●定価はすべて消費税を含んだ価格です

エニックスの少年マンガ誌
★☆★ 月刊少年ガンガン ★☆★

ドラゴンクエスト列伝「ロトの紋章」他豪華連載作がギッシリ!!

毎月12日発売　定価390円



Dragon Quest NOVELS

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 上

遙かなるイデーン

久美沙織

ENIX エニックス文庫

ノベル

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 上

久美沙織

エニックス文庫

EB38

P450

9784900527843

1910176004506

ISBN4-900527-84-X

C0176 P450E

定価450円(本体価格437円・税13円)

ENIX エニックス文庫 EB38

ロト伝説に遥か先立つ遠きいにしえの時代。ルビスはこの時、まだ、神ではなかった……。天と地の間に存在する精霊や妖精たちの国イデーン。いまこの世界で大きな伝説の環が閉じようとしていた。
ファミコンＲＰＧ最高峰「ドラゴンクエスト」の広大な世界を語る、外伝小説序章。

イラスト／いのまたむつみ